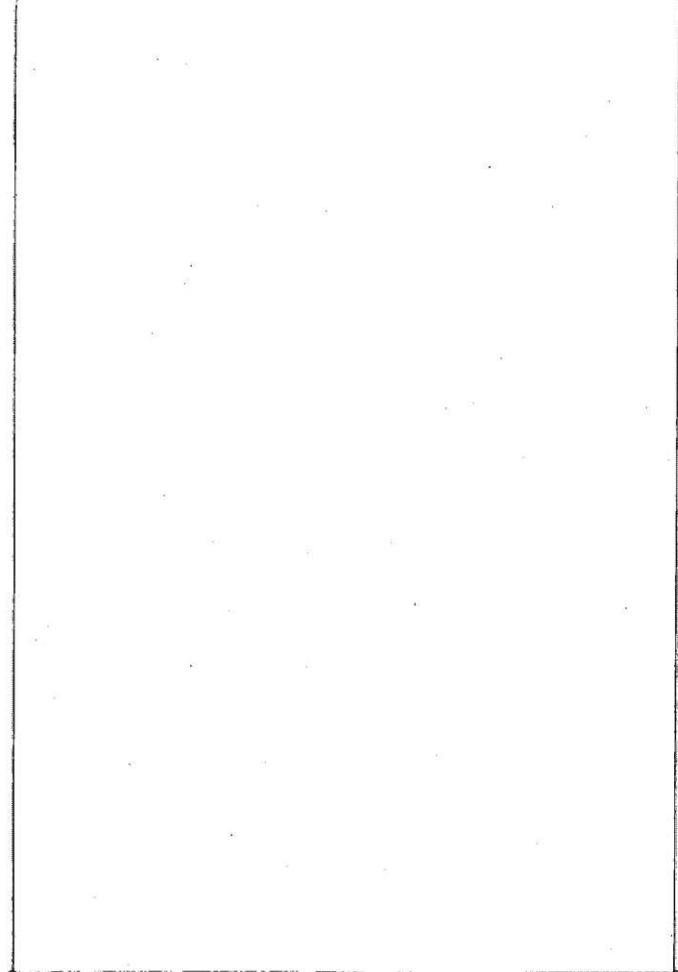


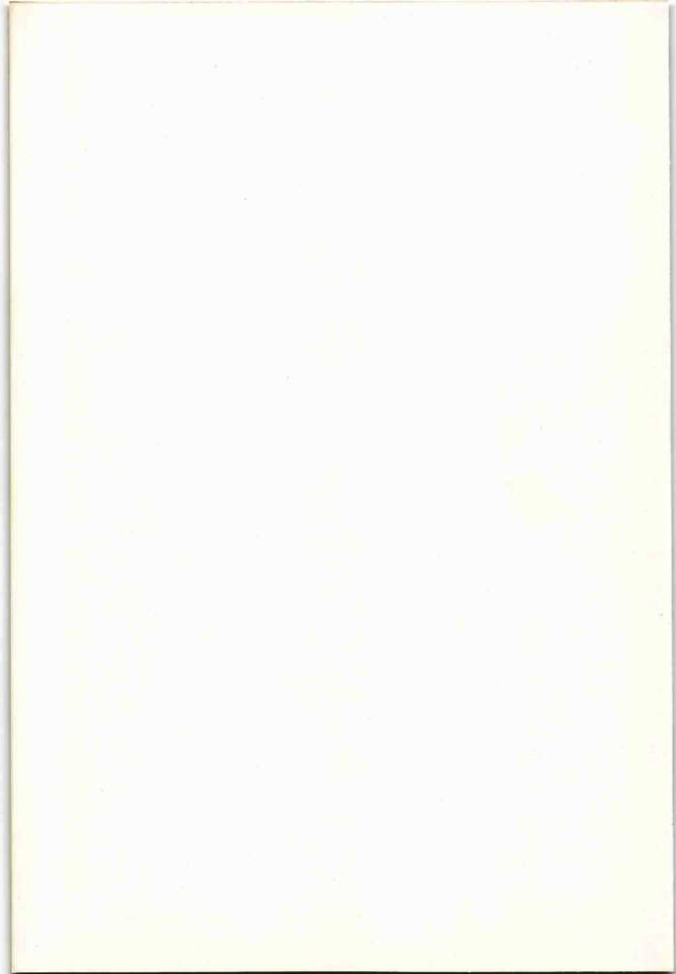
**新千歳空港用地内埋蔵文化財
発掘調査報告書**

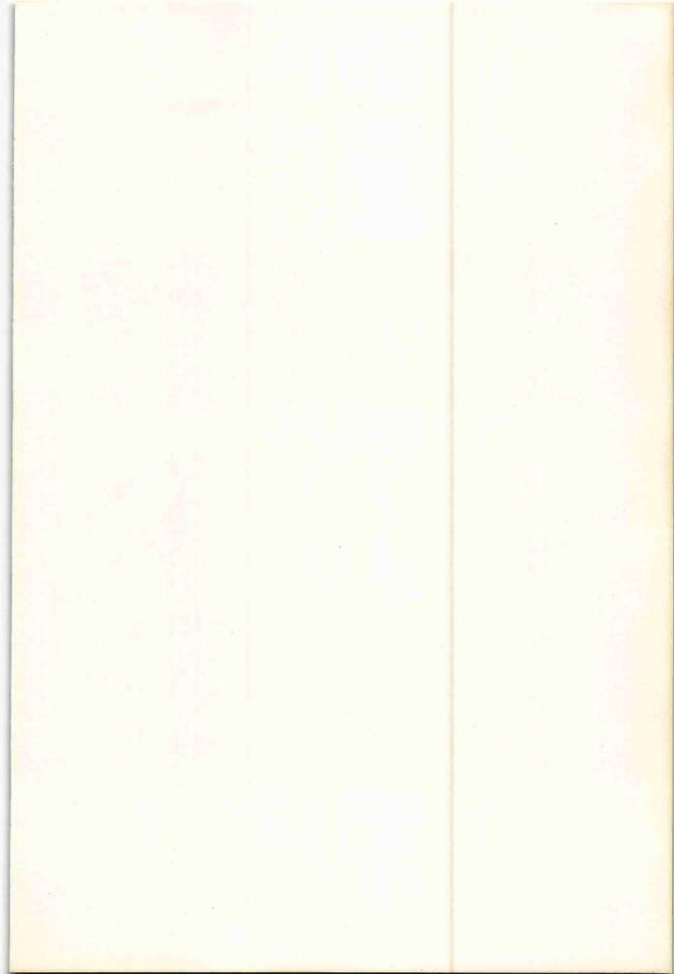
第2分冊 美沢川流域の遺跡群XI

昭和62年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター





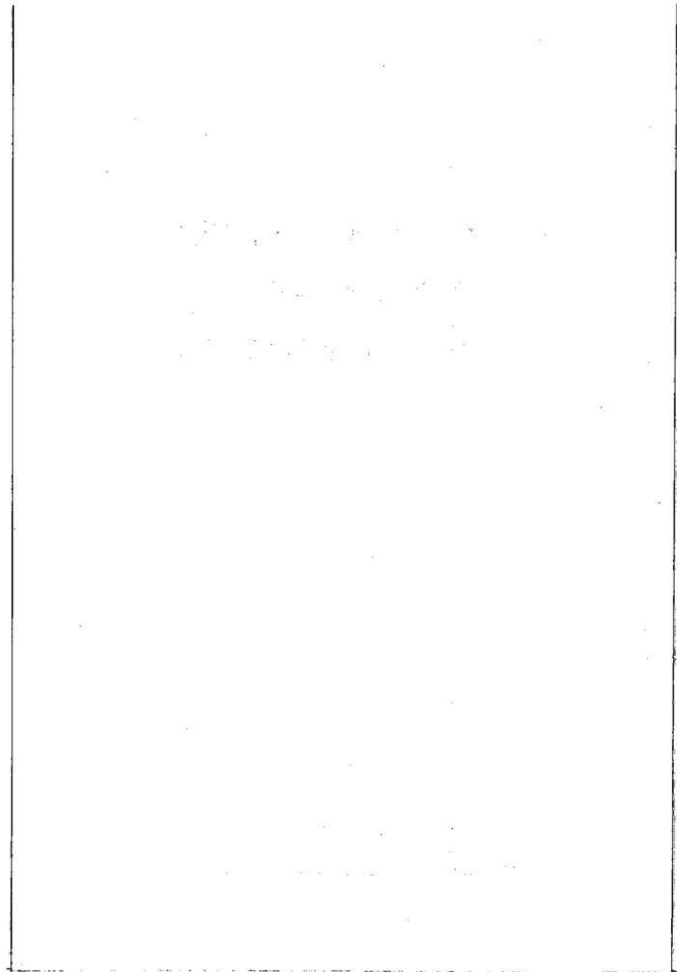


新千歳空港用地内埋蔵文化財 発掘調査報告書

第2分冊 美沢川流域の遺跡群Ⅺ

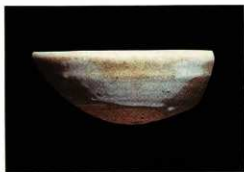
昭和62年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター





全景（空から）



陶器（表）



陶器（裏）

13

14

15

16

17

18

19

20

21

22

23

24

25

26

27

目 次

口絵

目次

挿図目次

表目次

図版目次

I 美々8遺跡の調査	1
1. 概要	1
2. I黒層上面にみられる道跡	3
3. I黒層の遺構と遺物	5
(1) 遺構	5
1) 住居跡	5
2) 土壌	9
3) 集中産	10
(2) 遺物	17
1) 土器・陶器	17
2) 石器等	27
3) 金属製品	28
4. II黒層上面にみられる道跡と動物の足跡	29
5. II黒層の遺構と遺物	32
(1) 遺構	32
1) 住居跡	32
2) 土壌	53
3) Tピット	54
(2) 遺物	79
1) 土器	79
2) 石器等	87
6. ローム質土層の調査	95
(1) 発掘区の設定と層序	95
(2) 遺物	96
7. 美々8遺跡I黒層出土の種子について	99
8. まとめ	100
(1) 弥文時代の土器	100

(2) 覆土に En-a ロームがみられる T ビットについて	103
付 表土層の調査	104
写真図版	107
Ⅱ 美沢13遺跡の調査	139
1. 概要	139
2. Ⅱ黒層の遺構と遺物	144
(1) 遺構	144
1) T ビット	146
(2) 遺物	147
3. 表土の遺構と遺物	148
4. 美沢川の河道変遷について	151
5. まとめ	152
引用・参考文献	153
写真図版	157

挿 図 目 次

図 I-1 美々8遺跡の調査地区	1
図 I-2 Ⅰ黒層上面の地形と道跡	4
図 I-3 遺構位置図	5
図 I-4 H-1 上面の有珠山 b 火山灰と遺物出土状況	7
図 I-5 P-1	9
図 I-6 P-2	10
図 I-7 集中礎	12
図 I-8 集中礎出土状況・位置図	13
図 I-9 土器・鉄鍋出土状況・位置図	15
図 I-10 Ⅰ黒層の土器 (1)	23
図 I-11 Ⅰ黒層の土器 (2)	24
図 I-12 Ⅰ黒層の土器 (3)	25
図 I-13 Ⅰ黒層の土器 (4)	26
図 I-14 Ⅰ黒層の石器	27
図 I-15 鉄鍋	28
図 I-16 金属製品	29
図 I-17 Ⅱ黒層上面の地形 (部分)	30
図 I-18 Ⅱ黒層上面の道跡・動物の足跡	31

図 I-19	Ⅱ黒層の遺構位置図	33
図 I-20	H-1	35
図 I-21	H-1 の遺物	38
図 I-22	H-2	39
図 I-23	H-2 の遺物	42
図 I-24	H-3	43
図 I-25	H-3 の遺物	46
図 I-26	H-4	48
図 I-27	H-4 の遺物	49
図 I-28	H-5・6	51
図 I-29	P-1	53
図 I-30	P-1 の遺物	54
図 I-31	T-1・2	61
図 I-32	T-3・4	62
図 I-33	T-5・6	63
図 I-34	T-7・8	64
図 I-35	T-9・10	65
図 I-36	T-11・12	66
図 I-37	T-13・14	67
図 I-38	T-15・16と遺物	68
図 I-39	T-17・18と遺物	69
図 I-40	T-19・20	70
図 I-41	T-21・22	71
図 I-42	T-23・24	72
図 I-43	T-25・26	73
図 I-44	T-27・28	74
図 I-45	T-29・30	75
図 I-46	T-31・32と遺物	76
図 I-47	T-33・34	77
図 I-48	T-35・36	78
図 I-49	T-37	79
図 I-50	Ⅱ黒層の土器 (1)	80
図 I-51	Ⅱ黒層の土器 (2)	81
図 I-52	Ⅱ黒層の土器 (3)	82
図 I-53	Ⅱ黒層の土器 (4)	83

図Ⅰ-54	Ⅱ黒層の土器 (5)	84
図Ⅰ-55	Ⅱ黒層の石器 (1)	88
図Ⅰ-56	Ⅱ黒層の石器 (2)	89
図Ⅰ-57	Ⅱ黒層の石器 (3)	90
図Ⅰ-58	Ⅱ黒層の石器 (4)	91
図Ⅰ-59	Ⅱ黒層の石器 (5)	92
図Ⅰ-60	遺物と出土位置	96
図Ⅰ-61	旧石器確認調査地区と土層	97
図Ⅰ-62	Tピット	103
図Ⅰ-63	表土層の遺構と遺物分布	104
図Ⅱ-1	遺構位置図	140
図Ⅱ-2	傾斜部の土層	141
図Ⅱ-3	低地部分の土層-1	142
図Ⅱ-4	低地部分の土層-2	143
図Ⅱ-5	T-1・2・3	145
図Ⅱ-6	遺物	147
図Ⅱ-7	表土の遺構	148
図Ⅱ-8	P-1・2・3	149
図Ⅱ-9	P-4・5	150
図Ⅱ-10	旧美沢川復元図	151

表 目 次

表Ⅰ-1	遺構一覧	2
表Ⅰ-2	ローム質土層遺物一覧	2
表Ⅰ-3	分類別遺物一覧	3
表Ⅰ-4	H-1の礫	6
表Ⅰ-5	集中礫	11
表Ⅰ-6	Ⅰ黒層の土器観察表	17
表Ⅰ-7	掲載石器一覧	27
表Ⅰ-8	金属製品一覧	29
表Ⅰ-9	H-1掲載土器一覧	37
表Ⅰ-10	H-1掲載石器一覧	37
表Ⅰ-11	H-2掲載土器一覧	41
表Ⅰ-12	H-2掲載石器一覧	42

表 I-13	H-3 掲載土器一覧	46
表 I-14	H-3 掲載石器一覧	46
表 I-15	H-4 掲載土器一覧	47
表 I-16	H-4 掲載石器一覧	47
表 I-17	P-1 掲載土器一覧	54
表 I-18	P-1 掲載石器一覧	54
表 I-19	遺構別出土遺物一覧	60
表 I-20	T-16 掲載土器一覧	68
表 I-21	T-18 掲載土器一覧	69
表 I-22	T-32 掲載土器一覧	76
表 I-23	掲載土器一覧	86
表 I-24	掲載石器一覧	93
表 I-25	植物遺体一覧	99
表 II-1	遺構・遺物一覧	139
表 II-2	T ビット一覧	144
表 II-3	土器一覧	147
表 II-4	石器一覧	147
表 II-5	低地部分出土遺物一覧	150

図 版 目 次

美々 8 道跡	107
図版 I-1 空中写真	107
図版 I-2 ①遠景 (S-N) ②南側斜面 (W-E)	108
図版 I-3 ①道跡 (W-E) ②道跡 (W-E)	109
図版 I-4 ①H-1 (N-S) ②H-1 炭化材出土状況 (NE-SW) ③H-1 礫	110
図版 I-5 ①P-1 (S-W) ②P-2 (NW-SE) ③土器片出土状況 (h-67-80 SW-NE) ④集中礫出土状況 (h-67-36 NW-SE)	111
図版 I-6 I 黒層の土器	112
図版 I-7 I 黒層の土器	113
図版 I-8 I 黒層の土器	114
図版 I-9 I 黒層の土器	115
図版 I-10 ①I 黒層の土器 (V 群 c 類) ②I 黒層の石器	116
図版 I-11 吊耳鉄鍋	117

図版 I-12 金属製品	118
図版 I-13 ①道跡 (W-E) ②動物の足跡 (W-E) ③動物の足跡 (SW-NE)	119
図版 I-14 ①H-1 (W-E) ②H-1の土器	120
図版 I-15 ①H-1の石器 ②H-1フレイクチップ集中1 ③H-1フレイク 集中2 ④H-2 (S-N)	121
図版 I-16 ①H-2の土器 ②H-2の剥片石器 ③H-2の礫石器	122
図版 I-17 ①H-3 (W-E)、②H-3 (E-W) ③H-3の土器・石器	123
図版 I-18 ①H-4 (SW-NE) ②H-4の石器 ③H-4の土器	124
図版 I-19 ①H-5・6 (NW-SE) ②P-1 (S-N) ③P-1の土器 ④P-1の石器	125
図版 I-20 ①T-1 (SW-NE) ②T-16 (NW-SE) ③Tピット列 (W-E) ④T-18の土器 ⑤上 T-16・下 T-32の石器	126
図版 I-21 ①旧石器確認調査 (W-E) ②II黒層の土器 (III群・IV群)	127
図版 I-22 II黒層の土器 (I群b類)	128
図版 I-23 II黒層の土器 (II群a類)	129
図版 I-24 II黒層の土器 (III群a・b類、IV群a類)	130
図版 I-25 II黒層の土器 (IV群b・c類、V群c類)	131
図版 I-26 II黒層の石器 (A・B・C類)	132
図版 I-27 II黒層の石器 (D・E類)	133
図版 I-28 ①II黒層の石器 (F類) ②II黒層の石器 (G・N類)	134
図版 I-29 II黒層の石器 (J・M類)	135
図版 I-30 表土層の遺物	136
美沢13遺跡	157
図版 II-1 ①重機による Ta-C 除去後の全景 (N-S) ②全景 (S-N)	157
図版 II-2 ①T-1 (N-S) ②T-1 遺跡 (SW-NE) ③T-2・3全景 (N-S)	158
図版 II-3 ①T-2 (N-S) ②T-3 調査風景 (N-S) ③T-4 (W-E)	159
図版 II-4 ①マス・ウェスティングによる土層逆転部分 (E-W) ②II黒出土の遺物	160
図版 II-5 ①低地部分トレンチ全景 (S-N) ②低地部分トレンチ (NW-SE) ③低地部分調査風景 (NE-SW) ④水付部分調査風景 (E-W)	161
図版 II-6 ①低地部分 N-S トレンチ (SW-NE) ②低地部分 E-W トレンチ (NW-SE)	162
図版 II-7 低地部分出土遺物 (①陶磁器、②小瓶類、③鉄製品、④瓶類)	163
図版 II-8 低地部分出土木材	164

I 美々 8 遺跡の調査



A

B

A

B

A

A

B

I 美々8遺跡の調査

1. 概要

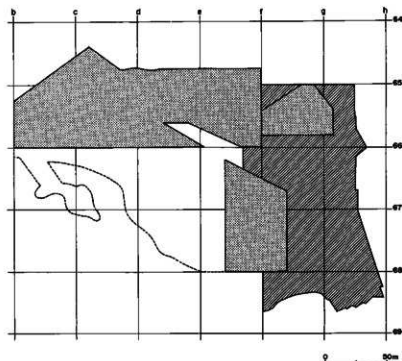
美々8遺跡は、美沢川左岸の遺跡群の中では最下流にあり、標高約20mの台地とこれに続く溜れ沢の斜面及び美沢川に向う急斜面にある。

本遺跡は、昭和56年度・昭和57年度・昭和60年度の3回にわたって調査され、延発掘面積は17,603m²である。

本年度の調査は、Ⅰ黒層11,112m²、Ⅱ黒層9,777m²を対象として実施した。このうち南側急斜面下位の水付き部分については、バックホーによる深掘りを4カ所行ったが、遺構・遺物が確認されなかったため、その後の調査は打ち切った。また調査区南西側の張り出し部分は、工事用道路開設の際に一部削平され失われている。

Ⅱ黒層・ローム質土層については、旧石器確認のため、5%相当の面積を確認調査した。

Ⅰ黒層からは、道跡が2カ所、住居跡が1軒、土壇が2個検出された。道跡はⅠ黒層上面に浅い溝となっていたもので、この中にUs-b火山灰が斑点状に確認されたことから、西暦1663年以前のものである「ユウフツ越」の原形を示すものと思われる。



図I-1 美々8遺跡の調査地区

住居跡は、過去3回の調査を含めて初めての検出である。Ta-b層除去後、中央部がくぼみ周辺がやや盛り上がった状態で確認された。調査の結果隅丸方形の竪穴で、カマド・柱穴・炉跡は検出されなかった。また炭化材が検出されたことから火災住居と思われる。

時期は、くぼみにUs-b火山灰が確認され、覆土の堆積が浅いことから西暦1663年以前から縄文時代にかけたのものと思われる。

土壌は、縄文時代晩期と思われる円形のもの、住居跡・道跡とほぼ同時に属すると考えられる隅丸方形のもの、とが検出された。

遺物は、縄文時代の土器・礫が主体を占め、縄文時代の土器・石器等が少量である。その他には陶器片・鉄鍋・鉋なども出土している。

Ⅱ黒層からは、道跡が1カ所、住居跡が6軒、土壌が1個、Tピットが37個検出された。遺構ではないが、Ⅱ黒層上で動物の足跡も検出されている。

道跡は、Ta-c火山灰(約2300年前)に覆われていたことから、縄文時代晩期末より以前のものである。Ⅰ黒層のものとはほぼ同じ方向に延びている。

住居跡は全て発掘区南側斜面の下位に位置する。縄文時代前期のものが5軒、中期のものが1軒検出された。前期の住居跡は隅丸方形で、壁際に柱穴をもつのが特徴である。このうちH-2は最大規模のもので、長軸が約6mあり、中央部に主柱穴をもつ。H-3では竪穴構築時の排土が確認された。斜面下方に(約5mの範囲で)広がっていた。縄文時代中期の住居跡はH-3の覆土を掘り込んで造られている。平面形は楕円形で外周する柱穴をもつ。

土壌は、H-2の北西側で1個検出されたのみである。時期・用途は不明である。

Tピットは、大きく北側の畛れ沢斜面と、南側の斜面肩部の2カ所に集中している。この中には古いTピットのくぼみに新しいTピットの掘りあげ土を埋めたものがある。

遺物は、縄文時代早期～晩期の土器・石器類が出土した。土器は縄文時代早期・前期のものが多く、石器は石鏃・スクレイパー・つまみ付ナイフが多く出土している。

動物の足跡は、台地の平坦部北側から畛れ沢斜面にかけて検出された。痕跡の形態・歩様からキツネのものが大部分を占める。

ローム質土層からは、頁岩製のフレイクが1点出土した。

表土層からはアメリカ軍が残したと思われるビール缶・薬^{おつとよう}莢・オイルエレメント等が出土した。
(佐藤和雄)

表I-1 遺構一覧

	Ⅰ黒層	Ⅱ黒層	計
住居跡	1	6	7
土壌	2	1	3
Tピット		37	37
計	3	44	47

表I-2 ローム質土層遺物一覧

分類	計
01	1

表I-3 分類別遺物一覧

分類	I 黒層				II 黒層			
	遺物	包含層	計	合計	遺物	包含層	計	合計
土	Ib-3			7	7			7
	Ib-4			12	909	921	921	
	IIa-1			92	321	414	414	
	IIa-2			33	54	87	87	
	IIa			82	67	149	149	
	IIb			30	30	30	30	
	IIa			109	109	109	109	
	IIb			58	58	58	58	
	IIc			127	127	127	127	
	Ve			265	265	265	265	
石	VI	64	64	3,129	3,129		3,129	
	計	3,193	3,193	219	1,947	2,166	5,359	
	陶器			1	1		1	
	I 2			2	2		2	
	IIa	3	36	39	6,386	14,422	20,808	30,847
	2			8	78	86	86	
	3			6	6	6	6	
	4			14	14	14	14	
	5	12	12	11	112	123	135	
	A			1	1	1	1	
等	7			1	2	3	4	
	破片	5	5	42	42	47	53	
				6	47	53	59	
	B	1		6	6	6	6	
	破片			4	4	4	4	
等	C			2	4	6	6	
	D			11	63	74	74	
	E			9	51	60	60	
	1				3	3	3	
	2			1	9	10	10	
	資料				5	5	5	
	破片			6	85	91	91	
	G			19	19	4	4	23
	破片				3	3	3	
	1				3	3	3	
等	2				9	9	9	
	3				1	1	1	
	破片				5	5	5	
	K				5	5	5	
	破片				5	5	5	
	M			3	4	7	7	
	N			6	3	11	11	
	破片			2	3	5	5	
	O	11	949	960	5	82	87	1,047
	1	8	519	527	65	582	647	1,174
等	石製品			1	1	1	1	
	計	22	1,543	1,565	6,525	15,661	22,186	23,751
	金属製品			158	158		158	
	合計	22	4,896	4,917	6,744	17,029	24,353	29,269

2. 第I黒色土面にみられる道跡

I 黒層上面で浅い溝状の道跡が2カ所確認された(図I-2)。幅30~50cm、深さ約4cmで、Ta-b 軽石層がくぼみに残っていた(図版I-3)。調査区南側の溜れ沢にある道跡は、昭和60年度調査地区付近から南東方向へ延びている。調査区中央の平坦部のものは南東~北西へ延びており、形状・規模・方向からみて昭和57年度に調査された道跡に続くものと思われる。今回確認された2カ所の道跡は、約100m離れて平行に延びており、同一の道跡とは考えにくい。

道跡はTa-a 軽石層に覆われていたことから西暦1663年以前のものである。この道跡については、日本海側と太平洋側を結ぶ重要な交通路であった「シコツ越」、「ユウフツ越」の原形をなすものとして、その可能性を指摘する考え方がある(北海道埋蔵文化財センター、1981)。

(佐藤和雄)

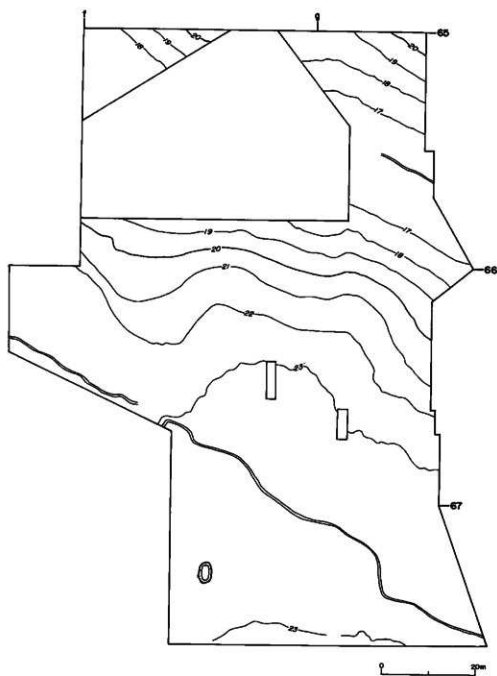


図 I-2 I 黒層上面の地形と道跡

3. 第I黒色土層の遺構と遺物

(1) 遺構

1) 住居跡

竪穴住居跡が1軒検出された。過去3回の調査を含めて最初の検出例である。

H-1 (図1-4)

台地縁辺のI黒層上面でTa-a, b層除去後、方形のくぼみとその周辺にTa-c混じりの盛土を確認した。くぼみの深さは約30cmである。盛土とくぼみの上面には、緑褐色の有珠山b火山灰(Us-b₁, 1663年降下。横山他1973)が斑点状に検出された。火山灰の厚さは1~2cm程度である。Us-b₁火山灰除去後、北西隅の覆土第3層より炭化材を検出した。このことから、この住居跡については火災住居跡と判断した。炭化材は、この他南東部からも検出されたが、遺存状態が悪く取り上げ段階では割材と丸太材が識別できた程度である。床面はTa-c層中で確認した。竪穴の掘り込みは非常に浅く、火災後あまり堆積が進まないうちに

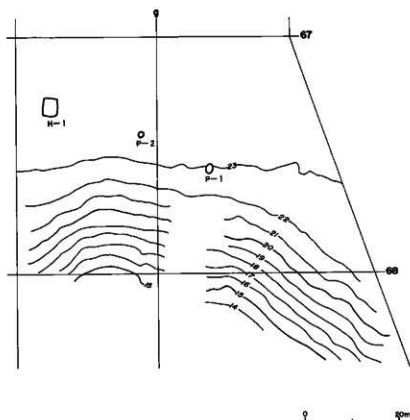


図1-3 遺構位置図

Us-b₁火山灰やTa-a・b層の降下があったと考えられる。

竪穴の形態は、平面形が隅丸長方形を呈している。床面は中央部が若干くぼんでいるが、ほぼ平坦である。壁は東壁がやや弓状に張り出すが、他は直線的で、立ち上がりも垂直に近い。カマドは無く、炉跡や柱穴も無かった。

覆土第3層から床直上にかけて、19点の小型礫が出土した(表I-4)。出土層位が炭化材と同じで火熱を受けていることから、火災時に流れ込んだものと思われる。また、覆土から床面にかけての土壌を水洗いしたところ、数種類の種子を検出することができた。しかし、これらのものについては、竪穴周辺の土壌中からも同様のものが得られたことから、流れ込みの可能性が強いと考えている。

構築時期については、時期を決定する遺物が出土していないため、不明である。ただし、Us-b₁火山灰火山灰の降下前は竪穴が完全に埋没していなかったこと、盛土がI黒層上面で確認されたこと、¹⁴C年代測定結果が790±60 y. B. P. であることなどより、縄文時代後半12世紀初頭からUs-b₁火山灰が降下する1663年以前という年代幅を与えることができる。

位置 g-67-42・43

平面形 隅丸長方形

規模 3.70×3.16/3.56×3.07/0.18m

- 覆土 1 黒色(I黒、上面のUs-b₁を含む) 2 茶褐色(I黒<c)
3 黒褐色(I黒>c、炭化材・礫を含む) 4 暗茶褐色(I黒>c)

(森岡健治)

付 液体シンチレーション¹⁴C年代測定結果

山田 治(京都産業大学)

KSU-1645 H-1 炭化材No.20 790±60 y. B. P.

※¹⁴Cの半減期は5568年、y. B. P. は西暦1950年よりさかのぼる年数

表I-4 H-1の礫

遺物番号	大 き き (cm)	重さ(g)	材質	層位	遺物番号	大 き き (cm)	重さ(g)	材質	層位
1	(5.3)×3.6×1.8	49.2	Sa.	3	11	5.6×3.1×2.5	51.8	Mud.	3
2	6.2×3.9×2.1	57.5	+	+	12	4.5×3.7×2.0	48.3	Che.	+
3	5.8×3.7×3.0	99.6	+	+	13	5.3×2.3×1.9	26.0	Sa.	+
4	7.2×3.2×2.3	54.6	+	+	14	(3.6)×4.0×1.8	37.2	+	+
5	4.7×2.5×1.6	20.7	Amb.	+	15	4.4×3.6×0.7	21.6	+	+
6	(2.6)×3.7×1.6	23.8	Mud.	+	16	5.6×3.0×2.5	59.0	Ser.	+
7	7.7×4.0×2.6	98.2	+	+	17	6.1×3.1×2.5	63.0	Sa.	+
8	7.0×3.2×2.6	86.2	+	+	18	5.4×2.5×2.2	39.9	Mud.	+
9	5.4×3.0×2.2	39.5	And.	+	19	7.7×3.1×1.5	47.9	Sa.	+
10	7.2×3.0×2.0	55.6	Sa.	+					

2) 土壌

土壌は2個検出された。いずれも台地縁上に位置する。遺物の伴出が無く用途等は不明である。時期は覆土の状態・火山灰の関係・形状等から、P-1が縄文期～中世、P-2が縄文時代晩期の可能性がある。

P-1 (図I-5)

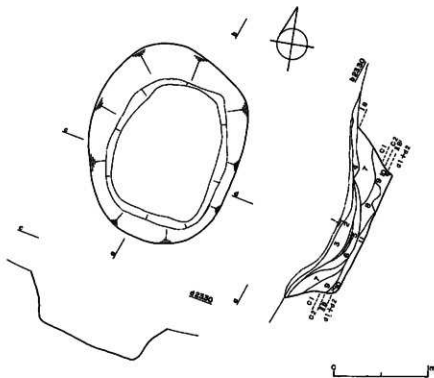
本遺構の位置する台地縁辺部は、調査前から表土が失われており、I黒層の落ち込みが確認できた。壁はほぼ垂直に立ち上がり、横底は地形に沿って傾斜している。構築時期は(I黒層の落ち込みの方が)覆土最上部のUs-b火山灰の堆積がH-1住居跡、道跡と同じような状態であるため、これらと近い時期に掘り込まれたものと思われる。¹⁴C年代の測定結果は80±60 y. B. P. で新しい年代を示しているが、資料である炭化物が覆土上面に一部食い込んでいたことから、開拓期のものが流れ込んだのではないかと推測している。

位置 h-67-75

平面形 隅丸方形

規模 2.04×1.61/1.40×1.07/0.33

覆土 1 灰黄褐色土 (Us-b) 2 I黒

3 暗灰褐色土 (黒色土>>d₂、粘性がある)4 暗黄褐色土 (汚れたC₁、掘土の流れ込み)5 C₂6 黒色土 (黒色土>>C+d₂)

図I-5 P-1

7 暗褐色土 (黒色土 > $C + d_1 + d_2$)

(佐藤和雄)

付 液体シンチレーション¹⁴C年代測定結果

山田 治 (京都産業大学)

P-2 (図 I-6)

台地上縁部付近に位置する。断面形は碗状で床と壁との境は不明瞭である。形状・規模などから縄文時代晩期の土壌に類似する。

位置 g-67-03・04

平面形 円形

規模 1.16×0.70/0.54

- | | |
|-------------------------------|------------------------------|
| 覆土 1 黒色土 (I 黒 > d_1 、固く締まる) | 2 暗黄褐色土 (I 黒 + C_1) |
| 3 暗褐色土 (I 黒 > $C_1 + C_2$) | 4 暗茶褐色土 ($C_1 + C_2$ > I 黒) |
| 5 黄褐色土 (汚れた C_1) | 6 黒色土 (黒色土 + C_1 締まりがない) |

(佐藤和雄)

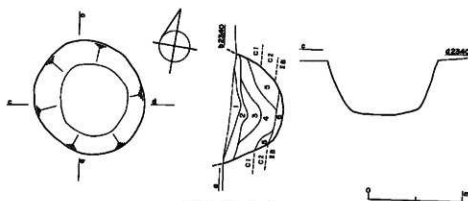


図 I-6 P-2

3) 集中礫

I 黒層上面及び I 黒層には22カ所の礫の集中する地点がみられた。この集中地点は道跡の脇を含め平坦部に位置するものが多く、溜れ沢の斜面、南側の斜面部にわずかにみられる (図 I-8)。

礫は楕円形で細長いものと、扁平なものが多い。石材は砂岩・泥岩・片麻岩・珪岩である。表 I-5 は各地点の集中礫の計測平均値を示したものである。これらの集中した礫は平均重量から4つのタイプに分けられる。100g を超すものを「A」、31g ~ 90g のものを「B」、16g ~ 30g のものを「C」、3g 以下のものを「D」とした。「A」は1~4、「B」は5~15、「C」は16~20、「D」は21~22である。図 I-7 は各群の重量分布と長径・短径を比較したものである。各タイプの平均値は「A」では重量195.6g、長径8.6cm、短径4.8cm、「B」は重量48.1g、長径5.5cm、短径3.1cm、「C」は重量22.4g、長径4.4cm、短径2.1cm、「D」は重量2.7g、長径1.8cm、短径0.2cmである。

集中礫は遺構に伴って発見される例がある。北大構内のサクシュコトニ川遺跡は、縄文期の空穴住居跡の床面でこのA・Bタイプの集中礫と紡錘車とが共存している。札幌市K460遺跡の報告では「むしろを織る際に用いた長さ10cmの木や土製の^{ミカヅナ}筒紐と同様な用途として使われた可能性が高いものと考えられる。ちなみに、現代の木製の筒紐は100g前後である」と織物に関係する用途を指摘している。この考え方に従えば、本遺跡の「A」「B」は重量・大きさから織物に関係する用途と考えられる。ただし、「A」には400gを超える大型のものがおり、これは別の用途があるのかもしれない。「C」は56年度の調査で伴出した土^{ミカヅナ}紐の重量から、網の^{ミカヅナ}紐の可能性が考えられる(北理文1981)。「D」は重量が3gに満たない小型のもので、石材は珉岩である。このような小型のものも民族例では布を織る際に使用されている。それらの形状は細長いもので、糸を巻きつけるために使われたのではないかと言われている。それらの資料を実現したわけではないが、本遺跡のものと重量からみて、そのような用途のものではないかと考えている。

注1 横山英介 1986「集石」『サクラシュコトニ川遺跡』

注2 上野秀一 1980「棒状礫について」『札幌市文化財調査報告書』XVI

注3 名古屋大学渡辺誠助教授の御教示による。

(佐藤和雄)

表I-5 集中礫

番号	発掘区	重量(g)	長径(cm)	短径(cm)	数量
1	h-65-57	319.3	10.5	6.8	8
2	h-65-75	234.3	9.2	4.4	6
3	h-67-36	119.5	7.8	4.1	11
4	f-66- ¹² ₁₃	109.5	6.8	4.1	40
5	g-66-37	80.2	6.6	4.0	6
6	h-68-11	78.0	6.6	3.8	14
7	g-65-92	67.1	6.6	3.7	8
8	f-66-23	59.2	6.8	3.3	11
9	g-67-44	54.6	6.3	3.3	8
10	g-67-43	52.5	5.9	3.3	23
11	h-67- ⁴⁴ ₄₅	47.3	5.8	3.1	46
12	g-67-12	40.9	5.7	3.1	6
13	h-67-52	35.4	4.7	3.0	109
14	g-66-19	32.6	5.6	3.7	14
15	g-67-44	30.1	5.6	2.8	16
16	h-67- ⁴⁵ ₄₆	26.4	5.3	2.8	68
17	g-67- ²² ₂₃	25.3	4.6	2.4	64
18	h-67-82	24.7	4.2	2.3	13
19	h-67-61	19.8	4.1	1.5	24
20	h-67-72	16.0	3.7	1.3	11
21	f-66-13	2.9	1.9	0.3	12
22	f-66-22	2.6	1.7	0.1	13

I 美々8遺跡の調査

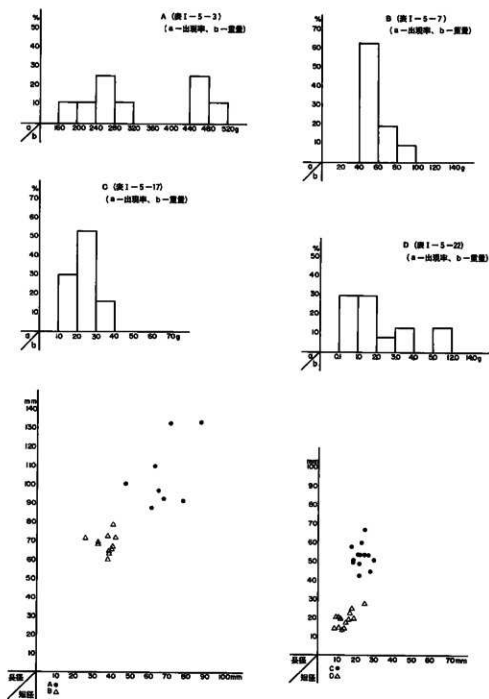


図 I-7 集中度

(2) 遺物

I黒層からは、土器片3,193点、陶器片1点、石器等1,543点、金属製品158点が出土した。

1) 土器・陶器 (図I-10~13)

土器片は縄文時代晩期のものが64点で、その他の土器片は弥文時代のものである。個体数は縄文時代晩期のものが1個体、弥文時代のは51個体である。弥文時代の土器については図I-9に復元土器を中心に分布と出土状態を図示してある。個々の土器については表I-6に示してある。

(佐藤和雄)

表I-6 I黒層の土器観察表

番号	発掘区	名称	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	文様	備考
1	I-66-13	甕	口径 (25.7) くびれ径 20.0	口縁部外反し、端部は平坦になる。	外面は縦のハケメ、上部に本口状工具による縦の条痕がつく。内面横ハケメ。	頸部に波状の沈線がつく。	
2	I-66-04	甕 土師器	口径 16.7 くびれ径 13.4 高さ 20.1 底径 6.9	口縁部外反し、上部は立ち上がる。端部は平坦になる。底部張り出す。口縁部から肩部にかけて段をもつ。	口縁部横ハケメ。体部外面縦ハケメ。内面おもに横ハケメ。体部外面に輪痕が残る。		外面に炭化物付着。
3	I-66-13	甕 土師器	口径 22.9 くびれ径 16.7 高さ 23.7 底径 7.3	口縁部外反し、端部が平坦になる。肩部がやや張り出し沈線がつく。	外面縦ハケメ。内面横・斜ハケメ。		内外面全体に炭化物付着。
4	I-66-03	鉢 土師器	口径 7.8 くびれ径 7.1 高さ 8.5 底径 5.5	口縁部やや外反し、端部丸味をもつ。頸部から肩部にかけて段をもつ。底部張り出す。	口縁部ナデ。体部縦ハケメ。内部横ハケメ。		外面に炭化物付着。
5		甕 土師器	口径 (14.3) くびれ径 (12.4)	胴張りの甕で最大径が胴部上平である。口縁部外反する。	口縁部ナデ。体部外面ケズリ後にミギキ。内面横ミギキ。		内黒、1/3残存。

I 美々8遺跡の調査

番号	発掘区	名 称	法 量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	文 様	備 考
6	g-66-29 h-67-42 52	甕	口径 (15.5) くびれ径 (9.3)	口縁部外反する。	内外面ハケメ後にヘラミガキ。	頸部横走沈線。	口縁部のみ1/4残存。
7	h-67-80 81	甕	口径 22.4 くびれ径 17.8 高さ 24.1 底径 7.7	口縁部外反し、端部丸みをもつ。	口縁部横ナデ。体部ハケメ後にヘラミガキ。内面上部横ヘラミガキ	口縁部に沈線。	内面上部に炭化物付着。補修孔1封。底面に本蓋痕。
8	h-67-61	甕	口径 (21.8) くびれ径 17.2 高さ 27.4 底径 8.1	口縁部外反し、端部丸味をもつ。底部張り出す。	口縁部縦ハケメ。体部おもに縦ヘラミガキ。内面上部横ハケメ後に横ヘラミガキ以下横ハケメ後に縦ヘラミガキ。		
9	h-67-45	甕	口径 27.4 くびれ径 21.1 高さ 32.2 底径 8.5	口縁部外反し、端部に浅い凹みがめぐる。	口縁部横ナデ。体部ヘラケズリ後にヘラミガキ。内面上部横ヘラミガキ以下縦ヘラミガキ。	頸部に横走沈線。	内面上部に炭化物付着。
10	f-66-03 13	甕	口径 26.1 くびれ径 20.3 高さ 30.7 底径 7.3	口縁部外反し、上部やや立ち上がる。端部に浅い凹みがめぐる。	内外面ともにハケメ	口縁部は沈線による段をなし、頸部は横走沈線をもつ。	口縁部内外面炭化物付着。
11	g-66-90 91 92	甕 土師器	口径 (14.5)	口縁部外反し、上部で重底に立ち上がる。端部丸みをもつ。	外面横ナデ。内面横ナデ、ヘラミガキ。	口縁部から頸部にかけて横走沈線。	口縁部のみ2/3残存。
12	g-66-66 75 85 93	甕 横文	口径 (24.0) くびれ径 (17.6)	口縁部外反し、端部平坦になる。	体部ハケメ。内面上部斜・横ヘラミガキ。内部ハケメ後にヘラミガキ。	口唇部に短横文。口縁部から肩部にかけて横走沈線。	1/4残存。

番号	発掘番号	名称	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	文 様	備 考
13	g-65-60	甕 推 文	口径 21.9 くびれ径 16.5	口縁部外反し、端部 丸みをもつ。	口縁部ナデ。 体部内面ハケメ。	口縁部は深い横走沈 線がめぐり、その直 下に短刻文。胴部は 横走沈線上に斜行す る短刻文と三角形に 短刻文を充填させた 文様が交互に施され る。	胴下半部を除く 内外面に炭化物 付着。体部に輪 模様。
14	g-65-60	甕 推 文	口径 19.5 くびれ径 15.4 高さ 23.2 底径 7.0	口縁部外反し、上部 で立ち上がる。端部 丸みをもつ。底部張 り出す。	口縁部ナデ。体部縦 ヘラミガキ。内面横 ヘラミガキ。	口縁部から胴部にか けて横走沈線。口縁 部・隆帯・肩部に短 刻文。	口縁部内外面に 炭化物付着。
15	g-67-00 h-66-59	甕 推 文	口径 15.0	口縁部ゆるく外反す る。	内外面ヘラミガキ。	口縁部に貼着がつき その上に短刻文。胴 部斜沈線、その上に 横走沈線。隆帯上に 点押文。文様部下地 に斜位の沈線。	内面上部に炭化 物付着。
16	g-65-58	甕 推 文	口径 (10.0) くびれ径 (8.2)	口縁部外反する。	体部ヘラケズリ後に 縦ヘラミガキ。内面 上部横ヘラミガキ。 下部タテヘラミガキ。	口縁部・文様部下地 に短刻文。その間に 斜沈線と横走沈線。 口縁部に貼着の刻 痕。	1/3残存。
17	g-67-24 44	甕 推 文	口径 (18.0) くびれ径 (13.6) 高さ (17.4) 底径 5.8	口縁部外反する。底 部張り出す。	体部縦ヘラミガキ。 底部縦ヘラケズリ。 内面横ヘラミガキ。	口縁部・隆帯に短刻 文がつく。胴部欠部 横走沈線。胴部山形 沈線と斜短刻文。	内黒。 口縁部炭化物付 着。1/3残存。
18	g-65-00	鉢 推 文	口径 (8.1) 高さ 4.8 底径 4.1	口縁部ほぼ垂直に立 ち上がる。底部張り 出す。	内外面ヘラミガキ。	口縁部・底部に短刻 文。胴部に矢羽模 様の沈線。	1/4残存。

I 美々8遺跡の調査

番号	発掘区	名称	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	文様	備考
19	g-65-60 61	甕	底径 9.0	底部張り出す。	内外面ともハケメ後にヘラミガキ。		
20	h-67-42 43 52	甕	底径 (5.5)	底部張り出す。	外面縦ヘラミガキ。		
21	g-66-28	甕	底径 6.2		内外面ともハケメ後にヘラミガキ。		1/3残存。
22	h-67-75	甕	底径 7.1		外面ヘラケズリ後にヘラミガキ。		1/3残存。
23	g-66-93	環 土師器	口径 16.4 高さ 5.6	口縁部外反し、体部下部に沈線がめぐる。	体部外面ヘラケズリ後にヘラミガキ。		内黒。
24	f-66-04 g-66-94 g-67-30	環 土師器	口径 19.7 高さ 5.8	口縁部やや内押し、体部下部に段をもつ。丸底。	体部外面ヘラケズリ後に横ヘラミガキ。 内面横ヘラミガキ。		内黒。
25	f-66-13	環 土師器	口径 (17.8)	口縁部内彎する。	ヘラケズリの後、横ヘラミガキ。		1/4残存。内黒。
26	f-66-14 土師器	皿	口径 (18.0) 高さ (2.3)	体部下部に段をもつ。	体部ヘラミガキ。		1/22 残存。 内黒。
27	g-66-22	環 須恵器	口径 (12.3)	口縁部わずかに内押しする。	口縁部整形。		1/4残存。
28	f-66-14			口縁端部に浅い凹がつく。	内外面ヘラミガキ。		
29	f-66-13				内外面ハケメ。		
30	g-65-72	甕		口縁部外反し、肩部丸味をもつ。	外面ハケメ後にナデ。横走沈線。 内面ハケメ。		

番号	発掘区	名 称	法 量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	文 様	備 考
31	g-66-91	甕		口縁部内等ぎみに立ち上がる。肩部は平坦になる。	外面口縁部ナデ。肩部斜ハケメ。内面横ハケメ。	口唇部に短刻文。	
32	f-66-23	甕		口縁部外反し、肩部は平坦になる。	内面横ハケメ。	口唇部短刻文。口縁部横走沈線。	
33	h-65-56			口縁肩部丸味をもつ。	内面ヘラミガキ。	横走沈線。	内黒。
34	g-67-23	甕		口縁部外反し、上部垂直に立ち上がる。肩部は丸味をもつ。	外面ナデ。内面横ヘラミガキ。	横走沈線・短刻文。	内黒。
35	f-66-43	甕		口縁部外反する。口縁部・肩部に段をもつ。	外面ナデ。内面横ハケメ。		外面炭化物付着。
36	f-66-21	甕			内面横ハケメ。	横走沈線。	内外面炭化物付着。
37	h-65-66	甕			内面横ヘラミガキ。	横走沈線。	
38	h-65-72	甕			内面ヘラミガキ。	横走沈線の上に斜短刻文。	
39	h-65-78				内面ヘラミガキ。	横走沈線の上に斜行沈線がつく。	
40	h-65-72				内面横ヘラミガキ。	横走沈線を切って斜行沈線がつく。	
41	f-66-03 13				体部ヘラミガキ。内面ヨコハケメ。	横走沈線。	

I 美々8遺跡の調査

番号	発掘区	名称	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	文様	備考
42	f-66-23				底部ヘラミガキ。	斜沈線。	内外面炭化物付着。
43	f-66-03	土師器		口縁部ゆるく外反する。	外面横ヘラミガキ。 内面斜ヘラミガキ。		内黒。
44	g-66-57	土師器			外内面ヘラミガキ。		
45	g-66-75	土師器			回転ナデ。		内黒。
46	h-66-79				外内面ヘラミガキ。		内黒。
47	f-66-22	環 土師器			ヘラミガキ。		内黒。
48	f-66-23	須恵器		上部で外折する。	ロクロ整形。		
49	g-66-28	須恵器			回転糸切りの後、周縁をヘラケズリ調整。		
50	g-66-22	須恵器			ロクロ整形。回転糸切り。		
51	g-66-29	鉢 陶器	口径 (13.8)	口縁部内折する。器厚はやや厚手である。	外面ロクロ目が残る。 内面丁寧に調整される。内外面に施釉。色釉は淡茶褐色。		1/3残存。胎土はやや砂粒が多い。焼成は上部環元下部酸化。
52	h-66-74	深鉢 縄文	口径 (21.9)	口唇断面は切出し形になる。	内面ヘラ状工具によるナデ調整痕がつく。	Rし層体の縄文。口唇部に縄の刻み目。 口縁内面に縄文。	1/2残存。

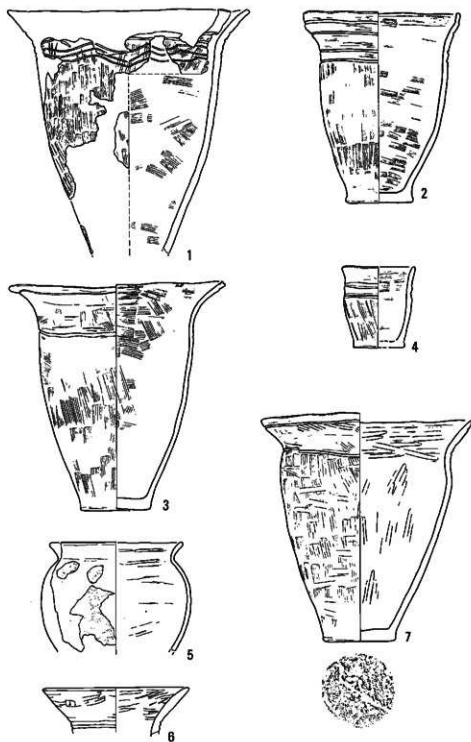


図 I-10 I 黒層の土器(1)

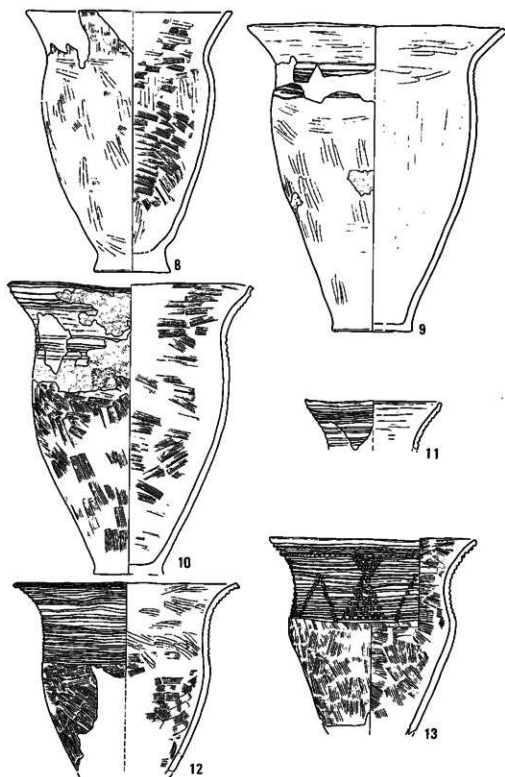


図 I-11 I 黒層の土器(2)

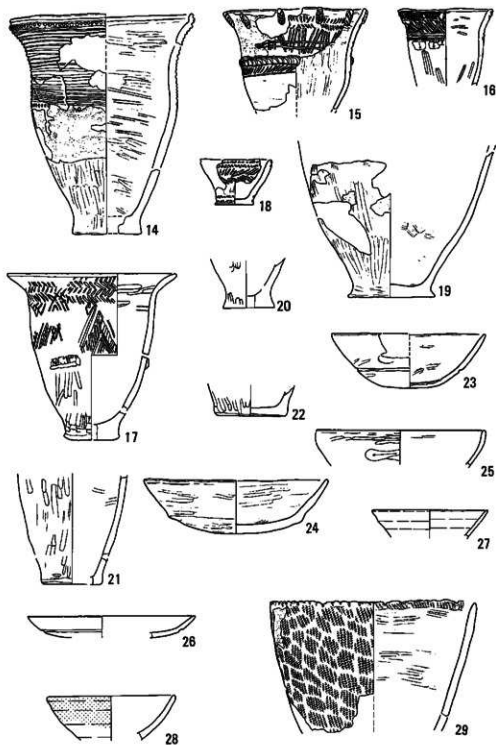


図 I-12 I 黒層の土器(3)

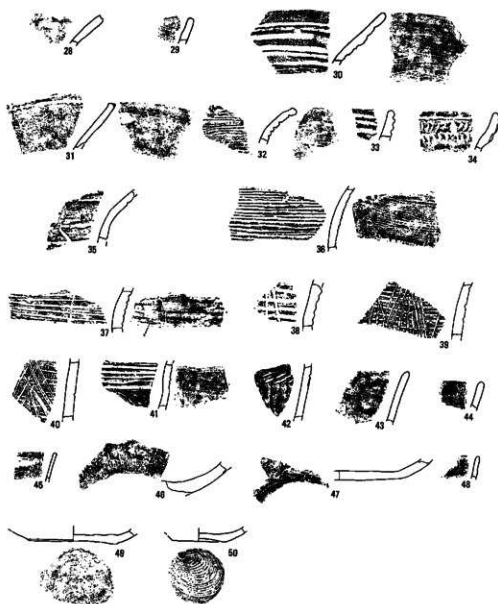


図 I-13 I 黒層の土器(4)

2) 石器等 (図 I-14)

総数1,543点の石器等が出土した。このうち、フレイク・チップ、礫、礫片が98%を占め、石器はわずか2%の出現率である。以下、器種別に記す。

石鏃 (1~12) 17点出土した。A₁類12点とA₇類5点に細分される。A₁類 (1~9) は、基部が平坦なもの (1) 内湾するもの (2~9) がある。A₇類 (10~12) は、かえしが明瞭なもの (10・11) と不明瞭なもの (12) がある。石材は、12が頁岩、ほかはすべて黒曜石。

石槍またはナイフ (13) 1点のみ出土した。基部を欠失した黒曜石製のB₁類である。

たたき石 (14~16) 19点出土している。15は扁平礫を素材としたG₂類。14・16は球形礫を素材としたG₃類。石材は14・16が安山岩、15が砂岩である。 (森岡健治)

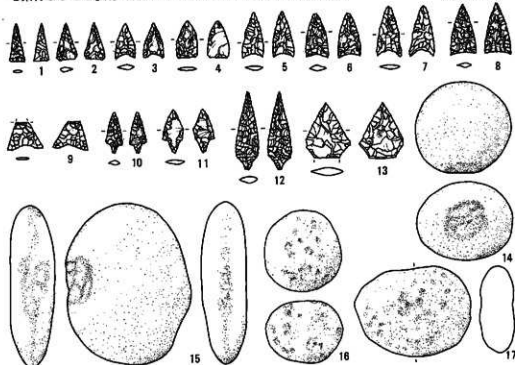


図 I-14 I 黒曜の石器

表 I-7 掲載石器一覧

番号	名	部	分類	後 編 号	大 小 (cm)	重 量 (g)	材質	分属回廊番号
1	石	鏃	A ₁	h-65-56	3.0×0.8×0.2	0.2	Obs	7-10
2	"	"	"	h-67-73	1.9×1.0×0.2	0.4	"	"
3	"	"	"	g-65-82	1.8×1.1×0.3	0.3	"	"
4	"	"	"	h-65-66	1.9×1.2×0.2	0.1	"	"
5	"	"	"	h-66-84	2.4×1.1×0.2	0.5	"	"
6	"	"	"	h-66-78	2.4×1.3×0.3	0.9	"	"
7	"	"	"	h-65-73	2.7×1.3×0.3	0.7	"	"
8	"	"	"	h-67-93	2.7×1.4×0.3	0.8	"	"
9	"	"	"	h-66-71	1.5×1.8×0.2	0.5	"	"
10	"	"	A ₇	h-67-74	2.1×0.9×0.3	0.4	"	"
11	"	"	"	h-67-80	2.2×1.0×0.2	0.5	"	"
12	"	"	"	h-66-71	3.9×1.2×0.4	1.1	Sh	"
13	石槍またはナイフ		B ₁	h-66-95	2.9×2.9×0.5	2.8	Obs	"
14	たたき石		G ₃	h-67-35	7.1×7.1×6.0	480	And	"
15	"		G ₂	h-67-66	12.7×9.9×5.6	730.5	Se	"
16	"		G ₃	g-66-74	6.3×6.1×5.0	240	And	"
17	鏃		XO	f-66-22	7.0×9.1×3.2	120.5	Pum	"

3) 金属製品

鉄鍋が3個体、小札・鉈が各1個出土した。

吊耳の鉄鍋(図I-15) I黒層上面で大きく3か所に分れて出土した(図I-9)。底部には2本の脚と、中央に径2.9cm、高さ1.2cm断面円形の湯口の痕跡が残っている。吊耳の片方は3孔で、もう片方は1孔である。耳の内面上には鋳造の際についた筋が残っていることから耳と体部とは同時に造られたものと考えられる。容量は、4升焚きである。

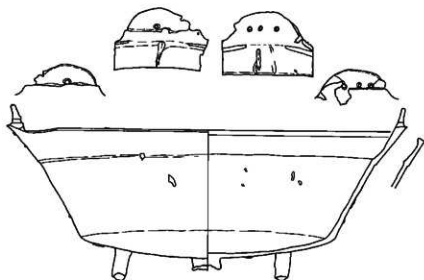
鉄鍋(図I-16-2) 一部がI黒層に入り込んだ状態で出土した。破片は腐蝕が進んでおり小片である(図I-9)。口縁部と体部の間に段がつく。湯口痕・脚・耳などは確認されない。

小札(図I-16-3) I黒層上面で出土した。2列の穴があいているものである。

鉈(図I-16-4) I黒層上面で出土した。柄部の一部には木質部が残存している。鍔は敲き道具に使用したとみられ、つぶれている。

なお金属製品の保存処理については当センター発行「ユオイチャシ跡・ボロモイチャシ跡・二風谷遺跡」1985により行った。

(佐藤和雄)



図I-15 鉄鍋

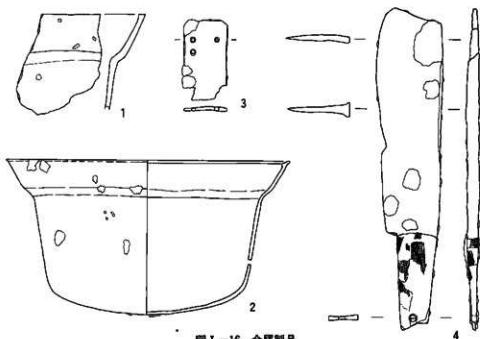


図 I-16 金属製品

表 I-8 掲載金属製品一覧

図番号	名称	発掘区	大きさ (cm)	材質	備考
図I-15	鉄 鋸	g-66-91	口径×くびれ径×高 42.6×13.5×35.6	鉄	2/3 残存
図I-16-1	＊	g-65-80	—	＊	—
図I-16-2	＊	g-64-09	口径×くびれ径×高 30.2×24.4×16.3	＊	1/2 残存
図I-16-3	小 札	h-67-41	長×幅×厚 6.3×3.4×0.3	＊	—
図I-16-4	鉈	g-66-18	長×幅×厚 25.4×5.3×1.0	＊	—

4. 第Ⅱ層黒色土層上面にみられた道跡と動物の足跡

Ta-c層除去後にⅠ黒層上面で道跡としたものと同様な浅い溝状の遺構と、円形のくぼみが点々と続いているのが確認された(図I-18)。

溝状の遺構は幅約60cm、長さ約115mで両端は未調査地区へのびている。この溝状のものは平坦部にあり、流水の痕とは考えにくい。同様なものは昭和56年度的美々8遺跡、昭和60年度的美々4遺跡でも確認されている。このうち美々8遺跡のものは方向・規模からみて、今年度のものに続く可能性がある。またルートはⅠ黒層のものとはほぼ重複している。これらのことからⅠ黒層のものと同様に道跡として差しつかえないものと思われる。

円形のくぼみは以前の調査においても動物の足跡であることは判断されていた(北海道埋蔵

文化財センター 1981・1985)。今回のものは淵れ沢から平坦部にかけて線状にのびている。

動物の種については、形態・歩様を北海道開拓記念館門崎允昭氏の鑑定結果（北海道埋蔵文化財センター 1986）に照合した結果、判別できるものはすべてキツネであった。

当時の環境は以前の調査で指摘されているように、裸地かそれに近い状態であった可能性が強い。季節は融雪期で、T_a-c層が降下する間に降雨があったと考えられている。詳細は「美沢川流域の遺跡群Ⅱ」北海道埋蔵文化財センター 1985を参照されたい。

（佐藤和雄）

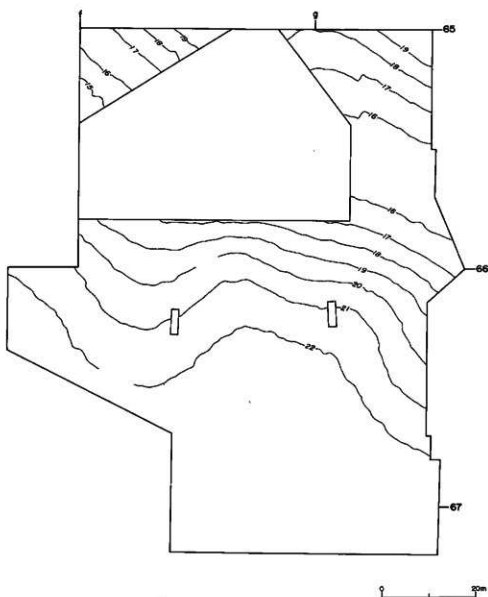
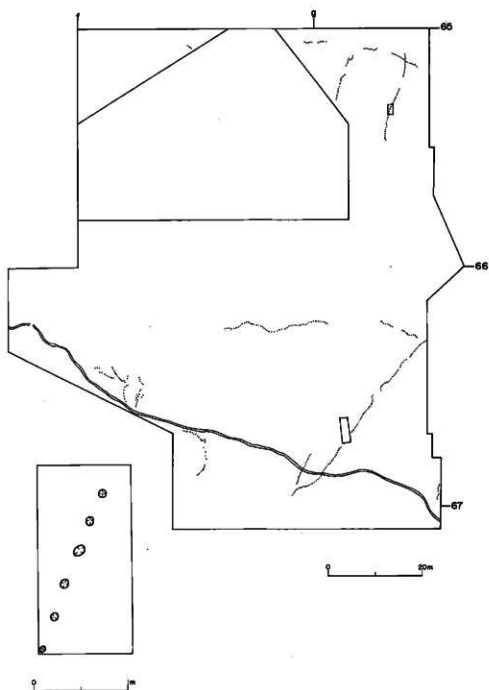


図 I-17 I 黒層上面の地形（部分）



図I-18 II 黒層の上面の道跡・動物の足跡

5. 第Ⅱ黒色土層の遺構と遺物

(1) 遺構

1) 住居跡

竪穴住居跡が6軒発掘された。いずれも南斜面下位に構築されている。構築時期は、竪穴住居跡の位置・形態や出土遺物から、H-1が縄文時代中期で、H-2～H-6は縄文時代前期である。

H-1はH-3と重複しており、H-3を切って掘り込んでいる。平面形は卵形で竪穴外周には柱穴と思われるピットがある。

H-2・H-3は隅丸方形で、H-4～6は方形あるいは多角形と推定される。柱穴状のピットは全ての住居跡で確認されている。壁際あるいは壁に廻るもので、内傾するものが多い。その断面形は先端部が細い杭状をなす。その他の付属する施設はなく、炉跡と推定される焼土等も確認されない。

H-2は長径が約6mで発掘された住居跡の中では最大のものである。柱穴状のピットは壁際に廻るものの他に長軸上に3個、主柱穴と思われるものが確認されている。

H-3は長径約4mで、上部をH-1に切られている。谷側に竪穴構築時の掘り上げ土(排土)が確認された。

H-4・6は谷側の壁が崩落しているため全体の規模が不明である。

H-5はH-6と重複している。H-6の覆土を切ってH-5が構築されている。

他の遺構との位置関係は、H-2の南側にP-1、T-32が、H-5・6の北西側にT-16があるほかは住居跡付近には他の遺構はない。これは検出された遺構の大部分を占めるTピットが北側の畛れ沢斜面部と平坦部縁辺とに集中し、住居跡との分布がことなるためである。

(佐藤和雄)

H-1 (図I-20)

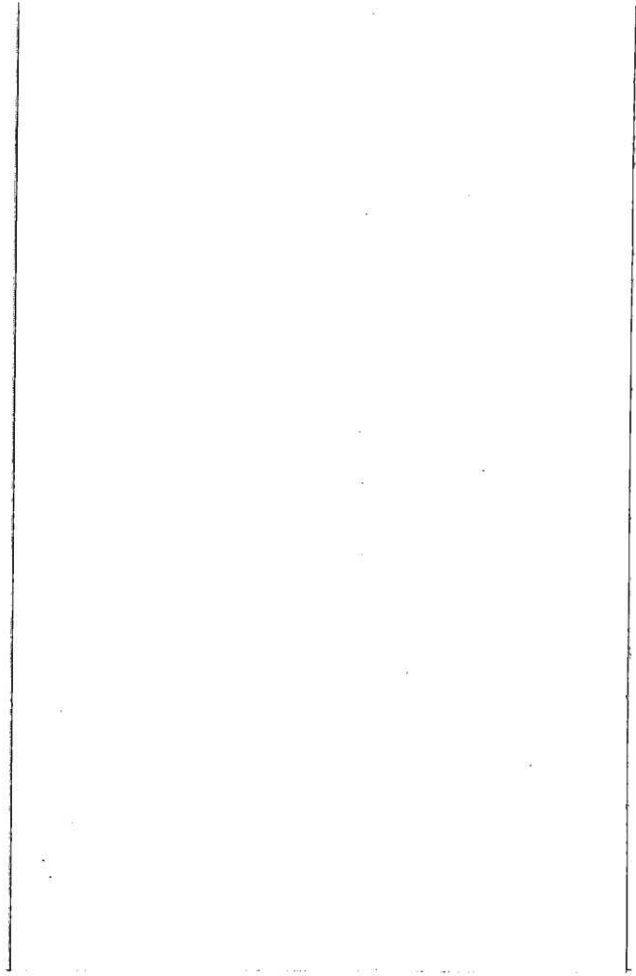
位置 h-68-71・81・82 調査区南側斜面部、標高約11.5～12m。H-3と重複。

平面形 長軸が東-西方向の卵形。 規模 5.60×3.40/4.64×3.00/0.73

H-3の覆土と北東側の地山を掘り込んでおり、H-3より規模を一回り大きくした形で造られている。覆土は斜面下方に向い流れ込んでおり、Ⅱ黒層-E_n-a ローム層が混入した状態である。

床は地形に沿って傾斜しており、やや凹凸がある。壁は山側の北・東方向では急な立ち上がりみせるが谷側の南・西方向では緩やかで南西側では立ち上がりはみられなくなる。床・壁ともに北西側を除き固く締まっている。

柱穴は全部で11個確認された。このうちP-10を除いて他は竪穴外周にある。径約12cm、



深さ12～20cm、いずれもほぼ垂直である。

炉跡は検出されない。

遺物は床直上で2個体の土器がまとまって出土したほか、フレイク・チップの集中が2カ所確認されている。

時期は床面上の土器がⅢ群a類に属するものであることから、縄文時代中期に構築された住居跡と考えられる。(佐藤和雄)

遺物(図I-21) 3はⅠ群b-4類土器、LRとRRの自縄自巻原体による縄文がある。4はⅡ群a-1類の網文土器である。各条の節はいく分なで消されている。5・6はⅡ群a-1類の羽状縄文土器である。5は口径14cm前後の小形薄手の土器で、口唇断面は角形を呈し、口唇面は無文である。口縁直下に縄端によるとみなされる刺突を加え、その下に斜行する縄文の条が認められるけれども、条内の節はなで消されている。6は大形で、やや厚手の土器である。やや細い条の羽状縄文が施され、条内の節はなで消されているが、かろうじて判別できる。7は浅くLRの縄文とみなされる文様の施されたⅡ群b類土器である。口唇面を角形に調整した後器面の縄文を施している。1・2・8・9はⅢ群a類土器である。1は口縁の4分の1程度残存するもので、4か所に山形の突起部をもつものとみられる。器面上には結束羽状縄文を地文として突起の下に1か所には3条の沈線がたてにつけられている。他の突起の下にはない。器面には凹凸が多い。2は体部の3分の1程度残存するもので、結束羽状縄文の地に口縁の突起部から下ってくる貼付帯の末端部が認められる。貼付帯には縄端によるとみられる刺突文が施されている。器面にはやや凹凸がある。8は2と同一個体の小片である。9は浅く縄文の施されたもので包含層の土器と同一の個体に属する。(大沼忠春)

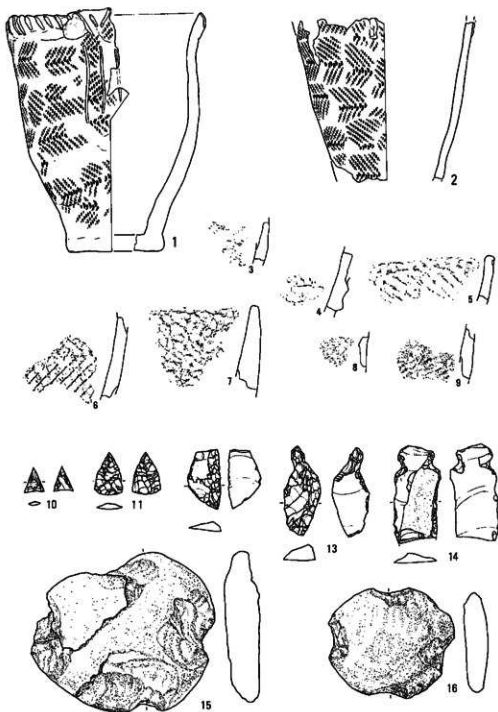
10・11は無茎石鉄・12は二次加工が片面に施されたスクレイパー・13・14はつまみ付ナイフ。13は片面全面に二次加工が施されたもの、14は片面の周辺に二次加工が施されたもの、15・16は長軸と短軸の4カ所に打ち欠きをもつ石鏟。(佐藤和雄)

表I-9 H-1 掲載土器一覧

図番号	分類	部位	層位	備考	図番号	分類	部位	層位	備考
1	Ⅲa		床		6	Ⅱa-1	胴	覆土	
2	*		*		7	Ⅱb	口縁	*	
3	Ⅰb-4	胴	覆土		8	Ⅲa	胴	*	
4	Ⅱa-1	*	*		9	*	*	*	
5	*	口縁	*						

表I-10 H-1 掲載石器一覧

図番号	名称	分類	層位	大きさ(cm)	重さ(g)	材質	図番号	名称	分類	層位	大きさ(cm)	重さ(g)	材質
10	石 鏟	ⅠA-4	覆土	1.3×1.0×0.2	0.2	obs	14	スクレイパー	ⅢE	覆土	3.2×1.8×0.4	2.1	obs
11	*	ⅠA-6	*	2.2×1.5×0.3	0.9	*	15	石 鏟	ⅣN	*	8.5×9.9×2.0	233.8	Gnl
12	つまみ付ナイフ	ⅢD	*	4.8×2.0×0.9	7.0	sh	16	*	*	*	12.5×14.0×2.8	810.0	Sa
13	*	*	*	5.2×2.4×0.6	8.1	obs							



図I-21 H-1の遺物

H-2 (図I-22)

位置 g-68-11・21・12・22 調査区南傾斜面。標高約10.2-11.2m。

平面形 長軸が北西-南東方向の隅丸長方形。 規模 6.14×4.10/5.42×3.08/1.06

床面はEn-a層を掘り込んでおり、中央部がやや低くなる。南側を除き非常に締まりがよい。壁は直線的な立ち上がりをもせ開口部で開く。南壁の一部は試掘の際に削平されている。柱穴状の小ピットは15個確認された。壁際・壁近くのもの11個、長軸線上に3個、配列に規則性のないものが1個ある。壁際・壁近くものは2個を除きすべて内傾する。

遺物は床から石鏝・フレイク・チップ等が出土している。覆土の遺物はⅡ群a類の土器片が多い。

時期は、本住居跡が斜面部に位置し、形状が隅丸方形であること。床面出土の石鏝・覆土及び周辺出土の土器からみて縄文時代前期に構築されたものと考えられる。(佐藤和雄)

遺物(図I-23) 1-4はⅠ群b-4類土器である。小片ではあるが、いずれも、白縄自巻の原体による縄文がつけられている。5-7は、Ⅱ群a-1類に属する網文土器である。6は条内がなでつけられているが、5・7は、なでられてはいない。8はⅡ群a-1類に属する羽状縄文土器である。条内はかるくなでられている。9・10はⅡ群a-2類土器である。9は比較的古く、内面にも縄文が施されている。口縁部に近い破片とみられる。10は内面がなめらかに磨かれ、器面には非常に粗い縄文の施されているもので、条内の筋はふぞろいである。胎土に繊維を多量に含む。(大沼忠春)

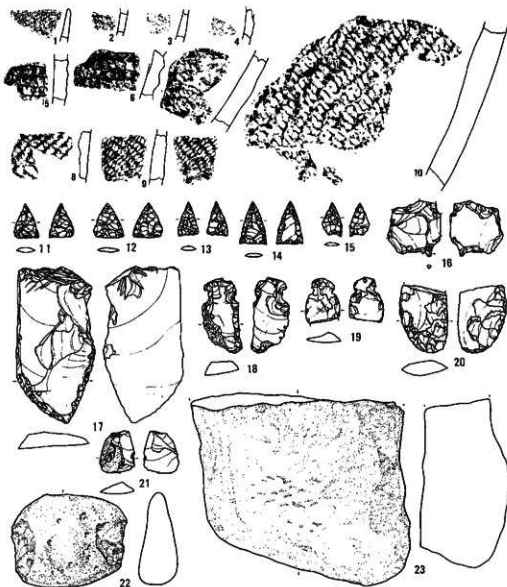
11-15は黒曜石製の無茎石鏝、15は基部の一部が欠損している。16は黒曜石製の石鏝、先端部が欠損している。17・20は黒曜石製のスクレイパーである。17は剥片の形状をあまり変えずに片面のみに刃部を作出するものである。20は両面に二次加工が施されるもの。18・19は黒曜石製のつまみ付ナイフである。いずれも片面の周縁に二次加工が施され、19は先端部が欠損している。21は黒曜石製のフレイクである。床面より出土した。22は砂岩製の石鏝。長軸両端に打ち欠きがみられる。23は砂岩製の台石である。中央部がやや凹んでおり石皿の用途も考えられる。(佐藤和雄)

表I-11 H-2掘出土器一覧

図番	分類	部位	附位	備考
1	Ⅰb-4	口縁	覆土	
2	*	胴	*	
3	*	*	*	
4	*	*	*	
5	Ⅱa-1	*	*	
6	*	*	*	
7	*	*	*	
8	*	*	*	
9	Ⅱa-2	*	*	
10	*	*	*	

表I-12 H-2 掲載石器一覧

図番	名	分	期	層位	大	小	厚 (cm)	重 (g)	材質
11	石	細	I A-4	掘土	1.8	1.3	0.2	0.4	Obs
12	"	"	"	"	1.8	1.6	0.2	0.5	"
13	"	"	"	"	1.3	1.1	0.2	0.3	"
14	"	"	"	"	2.3	1.4	0.2	0.5	"
15	"	"	"	"	1.8	1.0	0.2	0.3	"
16	石	細	II C	"	2.8	2.8	0.5	(5.1)	"
17	つまみ針ナイフ	細	II D	"	4.0	1.9	0.7	6.4	"
18	"	"	"	"	(2.2)	1.8	0.5	(2.1)	"
19	スクレイパー	細	III E	"	3.6	3.6	0.8	7.6	"
20	"	"	"	"	8.3	4.3	1.1	36.5	"
21	石	石	VM	"	16.9	14.7	6.6	2,900.0	8a
22	石	細	VIN	掘	7.5	9.1	2.9	241.7	"
23	細	石	VI	"	2.1	1.9	0.6	2.4	"



図I-23 H-2の遺物

H-3 (図I-24)

位置 h-68-71・72・81・82 調査区南側斜面部。標高約11.4~12m。H-1と重複。

平面形 長軸が南東-北西方向の長五角形(隅丸方形)。

規模 3.90×3.50/2.66×2.50/0.40

床はSpfl・Ⅲ黒・Ta-d₂を掘り込んで造られており、固く締まっている。地形に沿って傾斜しており全体に凹凸がみられる。

壁は南西側を除きH-1構築の際に上部が削平されている。北東側のテラス状になる部分は当初、本住居跡にともなうものと考えていたが、床直上の黒色土の堆積がないことや、周辺にも同様な地形がみられることから自然に崩落した跡と考えられる。

柱穴は全部で34個確認された。この中には壁際にめぐるものと、そうでないものがある。壁際にめぐるものには径12cm~16cm、深さ22cm~42cmの主柱穴と思われるものが10個と、径6cm~8cm、深さ12cm~28cmの小ピットが17個ある。主柱穴と思われるものは規則的な配列を示しP-10を除き全て内傾するものが7個、その他は垂直である。断面形は先端部が細い杭痕状である。中央部寄りの柱穴はいずれも垂直で、配列に規則性はみられない。

排土は、本住居跡の堆積状況を知るためのベルトを斜面下方に延長し、断面観察をおこなった時点で確認された。この排土は周辺の土と色調が似ているため平面的に範囲を知ることが困難であった。そのためトレンチを入れて排土を切り断面を観察する方法で広がりを確認した。その結果、南東側の壁から斜面下方に約5m×3.5mの範囲で広がっていた。層厚は壁際が最も厚く約10cmあり、他は約6cmである。

遺物は床面でスクレイパー・つまみ付ナイフが出土した。また床面上の土を水洗したところ装飾品が1点と521点のフレイク・チップが検出された。

時期は、本住居跡の立地・形状、覆土及び周辺出土の土器がⅡ群a類に属することからみて縄文時代前期に構築された住居跡と考えられる。

遺物(図I-25) 1は、Ⅱ群a-1類の網文土器である。口唇断面は特異である。口縁にへら状工具によるかとみられる刻み目が施されている。2はⅡ群a-2類土器である。LRの太い原体による斜行縄文が浅く施されている。

(大沼忠春)

3~5はつまみ付ナイフである。3と4は片面の全面に二次加工が施される。5は片面の側縁上に二次加工が施されるもの。6はスクレイパーで片面に刃部を作出するもの。7は長さ約5cmの小型の石斧である。左側縁部に打欠きによる調整がみられる。8は約角が欠失している石製品である。カンラン石製の玉で両面から穿孔されている

(佐藤和雄)



図I-25 H-3の遺物

表I-13 H-3掲載土器一覧

図番号	分類	部位	層位	備考
1	Ⅱa-1	口縁	覆土	
2	Ⅱa-2	＊	＊	

表I-14 H-3掲載石器一覧

図番号	名称	分類	層位	大きさ (cm)	重さ(g)	材質
3	つまみ付ナイフ	ⅢD	床	7.3×1.6×0.6	8.1	Sb
4	＊	＊	覆土	4.5×1.6×0.4	2.7	Obs
5	＊	＊	＊	3.8×1.4×0.4	2.3	＊
6	スクレイパー	ⅢE	床	4.4×3.4×0.8	12.5	＊
7	石 斧	ⅣF	覆土	4.9×2.0×0.7	9.0	Gr-Mud
8	石 製 品	—	床	(0.3)×(0.3)×0.3	(0.1)	Per

H-4 (図I-26)

位置 h-68-81・82・91・92 調査区南傾斜面部、標高約9.8~11m。

平面形 長軸が北東-南西の隅丸方形。 規模 $3.50 \times 3.30 / (3.30) \times 2.80 / 0.97$

床はSpflを掘り込んで造られる。地形に沿って傾斜し、凹凸がある。壁は南西側を除きほぼ垂直に立ち上がる。南西側は崩落のため床・壁ともに失われたものと考えられる。

柱穴状の小ピットは20個確認された。このうち13個は壁または壁際にある。ほぼ等間隔に廻り、内傾する。規模はP-4を除き径6cm~8cm、深さ22cm~30cmである。P-4は径13cm、深さ45cmと大きい。いずれも断面形は先端部が細い杭状である。他の小ピットは、東側に4個、西側に3個あるが、配列等に規則性はない。

遺物は床直上からフレイク・チップ、覆土からはⅡ群a類の土器片が出土している。

時期は、本住居跡の立地・形状及び覆土・周辺出土の土器がⅡ群a類のものであることからみて縄文時代前期に構築された住居跡と考えられる。 (佐藤和雄)

遺物 (図I-27) 1~11はⅡ群a-1類の縄文土器である。1は条内の節がなで消されている。口唇直下の部分には沈線による縦線文が描かれている。4・5・10も条間の節がいく分なでつけられている。他はなでつけられてはいない。条の幅の広いもの(6)から狭いもの(8)まである。12はⅡ群a-2類土器である。 (大沼忠春)

13は黒曜石製の無茎石鏃である。14は安山岩製の台石である。片面に擦り度がみられる。15は砂岩製の台石である。片面は敲痕により凹んでいる。本資料は水分により脆くなっていたため接合にあたってはペノール樹脂マイクロバルーンをセメダインCで割ったペースト状のものを使用した。陥没部分も良く埋まり乾燥後はカッターナイフで削り形を整えた。(佐藤和雄)

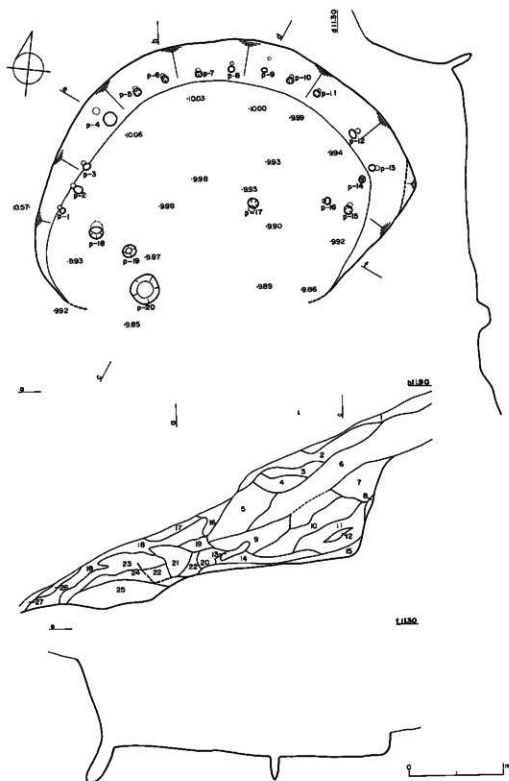
表I-15 H-4掲載土器一覧

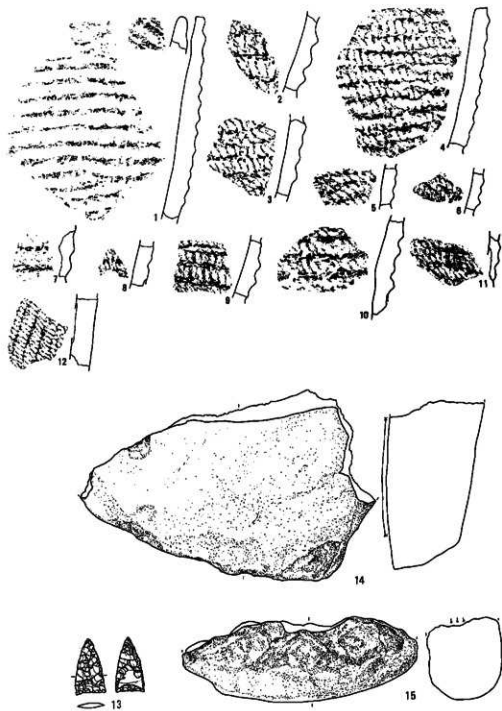
図番	分類	部位	位置	備考
1	Ⅱa-1	口縁	覆土	
2	*	胴	*	
3	*	*	*	
4	*	*	*	
5	*	*	*	
6	*	*	*	
7	*	*	*	
8	*	*	*	
9	*	*	*	
10	*	*	*	
11	*	*	*	
12	Ⅱa-2	*	*	

表I-16 H-4掲載石器一覧

図番	名称	分類	部位	大きさ (cm)	重さ(g)	材質
13	石鏃	ⅡA-4	覆土	2.9×1.5×0.3	1.3	Obs
14	台石	VM	*	6.4×(18.6)×6.6	760.0	Sa
15	*	*	*	15×23.3×8.6	3,170.0	And

I 美々8遺跡の調査





図I-27 H-4の遺物

I 美々8遺跡の調査

H-5 (図I-28)

位置 h-68-24・34

平面形 多角形

規模 $3.2 \times (2.35) / 2.9 \times (2.2) / 0.5$

南斜面のh-68-31-35に、垂直なトレンチを設けた段階で、h-68-34・35の土層中にTa-d₂層の落ち込みが認められた。調査の結果、H-6と重複する住居跡であることが確認された。

平面形は、長径約3.2mの多角形を呈するものと考えられる。谷側の壁は、検出されなかった。北東壁の外周には、幅約30-50cmのテラス状のものが検出されているが、斜面上方で大きく崩落しているため、テラスと判断することは困難であった。

床は、En-aローム層・Spfl層を振り込んだ部分と、その遺構排土でH-6を埋め立てた部分とにまたがって構築されている。床面は、ほぼ平坦で微細な炭化粒が薄く散在している。炉は検出されなかった。

柱穴は、壁際に13個、壁からやや中央よりに1個が検出された。その覆土は、軟質なSpfl層にTa-d₂層・En-aローム層が微量に混入するものであった。直径5-12cm・深さ6-17cmで角度は、ほとんどのものが中心方向に傾斜している。住居跡の谷側では、検出されなかった。

遺物は、覆土からフレイクが1点出土している。

構築時期は、その形態からみて、H-2-4と同様の縄文時代前期のものと考えられる。しかしながら、H-5はH-6とともに比較的小型であること、他の住居跡とは離れて位置していること、約1-2m高い急斜面に立地していることなど、H-2-4とはやや異った様相が認められる。

(皆川洋一)

H-6 (図I-28)

位置 h-68-24・25・34・35

平面形 多角形

規模 $2.15 \times (1.6) / 2.14 \times (1.64) / 0.56$

H-5と重複する住居跡である。

平面形は、残存する部分が多角形を呈するものと思われる。住居跡の谷側は、直接急斜面に続いており、床や壁など崩落した部位もあるものと思われる。

床は、Spfl層を掘り込んで構築されている。平坦でH-5同様に炭化粒が散在している。炉は、検出されなかった。

柱穴は、壁際に11個、中央よりに2個検出された。柱穴の覆土は、H-5と同様である。直径5-10cm・深さ6-30cm、壁際のものは中心方向に傾斜しており、中央よりのものは垂直方向である。

覆土は、Spfl層・En-aローム層(17・21層)とI黒層(23層)の逆転が認められることから、H-5の遺構排土によって埋め立てられているものと考えられる。このことから、重複する住居跡の新旧関係は、H-5が新しくH-6が古いと考えられる。

遺物は、検出されなかった。構築時期は、形態から縄文時代前期と思われる。

(皆川洋一)

2) 土壌

H-1の北側斜面部で一個検出されたのみである。

P-1 (図I-29)

急斜面下の平坦部の一面で、Ta-d₂上に径約3mのほぼ円形をなす黒色土のプランが確認された。この黒色土は、斜面を流れ落ちて再堆積したもので、ピットはこれに掘りこまれている。この再堆積土は硬くしまっており、それに比してピットの埋土は軟質である。ピット内から遺物が出土しているが、再堆積土からはまったく出土していない。(千葉英一)

位置 g-68-20

平面形 楕円形

規模 1.77×1.47/1.24×0.82/0.54

覆土 1 黒色土 (黒色土>d₂)

2 黒褐色土 (黒色土>d₂)

3 d₂崩落土

4 暗灰褐色土 (Ⅲ黒+EnL)

5 褐色土 (黒色土>d₁)

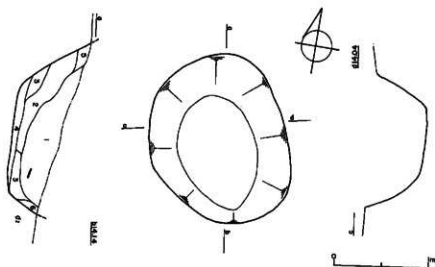
6 褐色土 (黒色土>d₂)

遺物 (図I-30) 1はI群b-4類土器である。口唇断面は角形に調整され、器面に自縄自巻の原体による燃糸文風の縄文を施している。口唇断面は角形に調整されている。器面は縄文施文後に器面をなでている。口縁に縄文による刻みを施し、上下、2段に短縄文の帯が認められる。短縄文には自縄自巻原体の端部が使用されている。2には下半部にLRの斜行縄文が施されている。その上部には羽状に燃糸文風の縄文が施されているが、この条間はなでられている。

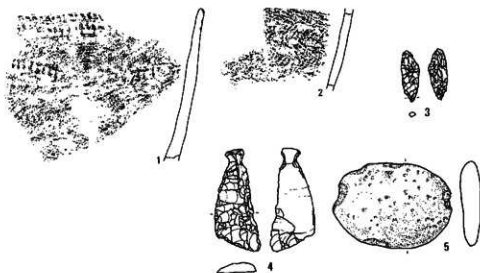
(大沼忠春)

3は黒曜石製の石鏃である。先端部に潰れ痕が残る。4は頁岩製のつまみ付ナイフである。片面全面に二次加工が施される。5は片麻岩製の石鏃である。長軸両端に打欠きがみられる。

(佐藤和雄)



図I-29 P-1



図I-30 P-1の遺物

表I-17 P-1 掘載土器一覧

図番号	分類	部位	層位	備考	図番号	分類	部位	層位	備考
1	Ib-4	口縁	覆土		2	Ib-4	胴	覆土	

表I-18 P-1 掘載石器一覧

図番号	名称	分類	層位	大きさ(cm)	重さ(g)	材質
3	石 鏃	ⅡC	覆土	6.6×9×1.5	1.3	Obs
4	つまみ付ナイフ	ⅢD	※	4.9×2.4×0.6	7.5	Sh
5	石 鏃	ⅣN	※	2.7×1.0×0.5	340.0	Gni

3) Tピット

38基のTピットが検出された。これらは、調査区の北側と南側の2か所に分布している。前者は、h-65・g-65区の東西方向に走る流れ沢の両岸に15基分布している。後者は、h-67・g-67区の台地縁辺部に19基列をなしており、南側斜面に3基が分布している。T-2・3は、昭和60年度の調査において、その一部が調査区外に存在していたもので、残りを今年調査したものである。T-2・3は、T-13・12と先に報告されているものである。

構造は、5基(T-14・28・32・36・37)が小判型で杭穴が伴うもの、残る33基はすべて溝状のタイプのものである。この他に墳底に達しない杭状の痕跡がみられるものもある(T-9・15・22)。

長軸の向きは、5基(T-11・15・16・18・37)が東西方向で等高線と平行なのに対して、

残る33基はすべて南北方向で等高線に対して直交する。横断面は、大半が崩落によりV字形またはY字形を呈している。

覆土の堆積状況は、いずれも $E_n - a$ ローム・パミス、 $Ta - d_2$ を主体とする土層と黒色土 (II 黒・ $Ta - d_1$) が互層をなす。前者が後者よりも堆積量が多い。(立川トマス)

T-1 (図I-31)

調査区北側の沢底にあり、昭和60年度に調査したT-1の北東約2mに位置する。これは、北側斜面から続くT-3、T-2と9~10m間隔で並び、さらにT-7あるいはT-9へ続くものと考えられる。墳底の幅は約20cmで、南壁がオーバーハングしている。

位置 $h-65-73 \cdot 83$

平面形 長楕円形

規模 $2.54 \times 0.77 / 2.38 \times 0.22 / 1.18m$

T-2 (図I-31)

調査区北西端に位置し、南西部の約1/4が昭和60年度に調査されている(T-13)。長軸方向は等高線と平行し、斜面上位のT-3と下位のT-1の中間に位置している。

位置 $h-65 \cdot 92$

平面形 楕円形

規模 $(0.94) \times 0.82 / (0.75) \times 0.27 / 1.35m$

(森岡健治)

T-3 (図I-32)

昭和60年度に一部が調査区外に存在し、未調査だった部分を調査したものである。北壁上部の崩落が大きい。

位置 $g-65-00 \cdot 01$

平面形 長円形

規模 $2.68 \times 1.08 / 2.38 \times 0.27 / 1.55$

(立川トマス)

T-4 (図I-32)

T-5と重複。中央部から南西側の壁・覆土の一部をT-5に切られている。

位置 $g-65-91 \cdot 92$

平面形 長楕円形(溝状)

規模 $2.96 \times 0.80 / 2.95 \times 0.19 / 1.26$

T-5 (図I-33)

北東側でT-4の壁・覆土を切っている。

位置 $g-65-91 \cdot 92$

平面形 長楕円形(溝状)

規模 $(1.35) \times (0.50) / 1.55 \times 0.16 / 1.10$

T-6 (図I-33)

平面形・規模・長軸方向などから、T-5と同時に掘り込まれたものと思われる。

位置 $g-65-82$

平面形 長楕円形(溝状)

規模 $1.41 \times 0.87 / 1.28 \times 0.18 / 1.38$

(佐藤和雄)

T-7 (図I-34)

調査区北側の沢底、T-1とT-9のほぼ中間に位置する。墳底の幅は約20cmで、南西壁がオーバーハングしていることなどから、T-1と非常に類似した形態といえる。

I 英々8遺跡の調査

位置 h-65-64・74

平面形 長楕円形

規模 $2.43 \times 1.00 / 2.45 \times 0.21 / 1.11 \text{ m}$

T-8 (図 I-34)

調査区北側の沢底にあり、T-12の北西4mに位置する。ビット中にみられる黄褐色土 (EnL) は、このビットが完全に埋没する前に周辺から投げ込まれたものと思われる。

位置 h-65-74・84

平面形 楕円形

規模 $2.12 \times 1.04 / 1.67 \times 0.21 / 1.62 \text{ m}$

(森岡健治)

T-9 (図 I-35)

長軸両端の壁中位が、こぶ状に崩落しているが短軸の両端の壁は、ほとんど崩落がみられない。

位置 h-65-65

平面形 長楕円形

規模 $1.98 \times 0.76 / 1.85 \times 0.19 / 1.44 \text{ m}$

T-10 (図 I-35)

南東側壁の壁中位から上位の崩落が大きい。

位置 h-65-65・75

平面形 長楕円形

規模 $1.60 \times 0.90 / 1.56 \times 0.17 / 1.61 \text{ m}$

T-11 (図 I-36)

短軸両壁の崩落が大きい。

位置 h-65-57・58・67・68

平面形 長楕円形

規模 $2.13 \times 1.21 / 1.40 \times 0.25 / 1.75 \text{ m}$

T-12 (図 I-36)

壁の崩落もほとんど見られず、構築時の形状をもっとも良く留めているものと思われる。

位置 h-65-76

平面形 長楕円形

規模 $1.96 \times 0.54 / 1.93 \times 0.17 / 1.07 \text{ m}$

T-13 (図 I-37)

短軸両壁と南壁の崩落が大きい。土層断面からみて、埋没途中の覆土4層下面を境にして、手を加えている可能性がある。

位置 h-65-18・28

平面形 長楕円形

規模 $2.11 \times 1.19 / 1.35 \times 0.29 / 1.58 \text{ m}$

T-14 (図 I-37)

東側壁の崩落が大きい。竈底は、若干南から北へ傾斜している。また、杭穴と思われる小ビット2個が確認された。

位置 h-65-69・79

平面形 楕円形

規模 $1.93 \times 1.20 / 1.34 \times 0.42 / 1.43 \text{ m}$

T-15 (図 I-38)

土層断面からみて、埋設途中で杭状のものが立てられた可能性がある。その杭状のものは土層中位までで止まっている。

位置 h-65-89

平面形 長楕円形

規模 $1.79 \times 0.82 / 1.39 \times 0.28 / 1.04 \text{ m}$

(立川トマス)

T-16 (図 I-38)

北東側の壁の崩落が激しい。墳底の中央部分には杭穴と思われるが小ピット、東南部分には前者よりも大型の小ピットが検出されている。

位置 h-68-33・43

平面形 楕円形

規模 $1.96 \times 1.35 / 1.53 \times 0.38 / 1.16 \text{ m}$

遺物 (図 I-38) 黒曜石製の石鏃で先端部と基部が欠損している。

(皆川洋一)

T-17 (図 I-39)

壁中位から上部の崩落が大きい。

位置 h-67-76

平面形 長楕円形

規模 $2.05 \times 1.04 / 1.36 \times 0.44 / 1.65 \text{ m}$

T-18 (図 I-39)

墳口付近での壁の崩落がみられる。長軸方向北側の墳底が若干凹凸している。覆土中から、I群b類の土器2点と黒曜石製フレイク1点が出土している。

位置 h-67-76・78

平面形 長楕円形

規模 $2.22 \times 0.99 / 1.92 \times 0.31 / 1.89$

(立川トマス)

遺物 (図 I-39) 1・2はI群b-3類土器である。1には自縄自巻の原体による縄文、2には綾結文が認められる。同一個体かとみられる。

(大沼忠春)

T-19 (図 I-40)

上半部の崩落のため横断面はY字型である。下半部は、ほぼ原形を保っている。墳底は、谷方向に傾斜している。

位置 h-67-75

平面形 長楕円形

規模 $2.34 \times 0.8 / 2.01 \times 0.2 / 1.0$

(皆川洋一)

T-20 (図 I-36)

南斜面肩部に位置する。墳底は中央部が凹む。

位置 g-67-14・15

平面形 長楕円形

規模 $2.36 \times 1.25 / 1.88 \times 0.51 / 1.50$

T-21 (図 I-41)

壁中位から上部にかけて若干崩落している。

位置 h-67-35

平面形 長楕円形

規模 $2.10 \times 1.72 / 1.03 \times 0.33 / 1.96$

T-22 (図 I-41)

土層断面から、b層がレンズ状に堆積した時期に杭状のものが立てられた可能性がある。
北方向に傾斜している。

位置 h-67-05・06 平面形 長楕円形
規模 $1.96 \times 0.71 / 1.92 \times 0.34 / 1.61$ (立川トマス)

T-23 (図 I-42)

大きく崩落している。1層中には、他のTピットの排土と考えられるTa-d₂が認められる。

位置 h-67-85・86 平面形 長楕円形
規模 $1.06 \times 2.25 / 0.4 \times 1.8 / 1.33$

T-24 (図 I-42)

上半部の崩落により、横断面はY字型を呈している。壊底は、斜面に沿って傾斜している。

位置 h-67-66 平面形 長楕円形
規模 $1.97 \times 0.84 / 1.38 \times 0.28 / 1.22$

(皆川洋一)

T-25 (図 I-43)

壁の崩落が大きい。

位置 h-67-67 平面形 長楕円形
規模 $2.20 \times 1.11 / 1.46 \times 0.28 / 1.41$ (立川トマス)

T-26 (図 I-43)

上半部の崩落により横断面はY字型を呈する。1層中には、他のTピット排土と考えられるTa-d₂が認められる。

位置 h-67-46・47 平面形 長楕円形
規模 $2.53 \times 0.81 / 2.07 \times 0.24 / 1.52$

T-27 (図 I-44)

大きく崩落している。1層中には、他のTピットの排土と考えられるTa-d₂が認められる。

位置 h-65-38 平面形 長楕円形
規模 $2.02 \times 1.0 / 1.36 \times 0.3 / 1.2$ (皆川洋一)

T-28 (図 I-44)

壊底の中央部から、杭穴と思われる小ピット1個が検出された。

位置 h-67-27 平面形 楕円形
規模 $1.43 \times 1.01 / 0.72 \times 0.29 / 1.35$ (立川トマス)

T-29 (図 I-45)

大きく崩落している。1層中には火山灰が少量ブロック状に堆積している。

位置 g-67-37 平面形 長楕円形
規模 $2.33 \times 1.16 / 1.7 \times 0.2 / 1.53$ (皆川洋一)

T-30 (図 I-45)

墳底が、北から南にかけて傾斜している。覆土中から、黒曜石製のフレイク1点が出土している。

位置 g-67-15・16

平面形 長楕円形

規模 $2.17 \times 0.86 / 1.72 \times 0.25 / 1.82$

(立川トマス)

T-31 (図 I-46)

発掘区南側斜面の肩部に位置する。墳底は地形にそって南側に傾斜している。

位置 h-67-56・57

平面形 長楕円形(溝状)

規模 $1.94 \times 0.83 / 1.53 \times 0.37 / 1.34$

T-32 (図 I-46)

墳底のほぼ中央部に杭状の小ピットが1個検出された。

位置 g-68-10・11

平面形 楕円形(小判型)

規模 $2.04 \times 1.66 / 1.03 \times 0.42 / 1.25$

遺物 (図 I-46) 黒曜石製の無茎石鏃。

(佐藤和雄)

T-33 (図 I-47)

横断面は、Y字型を呈しており、1層と3層は、他のTピットの流れ込み土と考えられる。

位置 g-67-79

平面形 長楕円形

規模 $1.74 \times 0.91 / 1.43 \times 0.14 / 1.34$

T-34 (図 I-47)

II黒層上面で確認できたが、掘り込み面は不明である。

位置 h-67-18・28・29

平面形 長楕円形

規模 $2.42 \times 9.7 / 2.24 \times 0.22 / 1.54$

T-35 (図 I-48)

上半部の崩落のため、横断面はY字型を呈する。EnP以下の下半部は、ほぼ原形を保っていると考えられる。

位置 g-67-55

平面形 長楕円形

規模 $2.46 \times 1.02 / 1.9 \times 0.24 / 1.35$

T-36 (図 I-48)

北西部の壁面が大きく崩落している。墳底は、水平で中央部に杭穴と思われる小ピットが検出されている。

位置 h-68-81

平面形 楕円形

規模 $1.68 \times 1.37 / 1.73 \times 0.62 / 1.4$

(皆川洋一)

T-37 (図 I-49)

発掘区南東側の斜面部に位置する。墳底は地形にそって傾斜しており、中央部に杭状の小ピットが1個検出された。

I 美々8遺跡の調査

位置 h-68-02・12

平面形 楕円形

規模 1.79×1.38/1.09×0.44/1.35

(佐藤和雄)

表 I-19 遺構別出土遺物一覧

遺構 番号	層位	土 器			石 器 等															石 製 品	計	
		I	II	III	O	I		II	III	IV	V	VI		X								
		b	a	a	1a	1-2	A	C	D	E	F	M	N		0	1						
		4	1	2			4	6				2		1	2							
H-1	床				81	2,277															2,358	
	覆土	10	1		1	296	3	1		3	3			2	2	2		13		337		
H-2	床				3	587										1	1			572		
	覆土	5	32	28	1	1,622	6		3	1	4	5		2	1		1	4	42	2,757		
H-3	床					321				1	1								1	524		
	覆土		13	2		3	5			2		1	3				1	3		33		
H-4	床					75														75		
	覆土		35	2		4	1						1	2				3		48		
H-5	床																					
	覆土					1														1		
P-1	覆土	4	1			11			1	1	1					1		2		22		
T-16	覆土		1			5			2											8		
T-18	覆土	3				1												2		6		
T-30	覆土					1														1		
T-32	覆土					1	1													2		
計		12	92	33	82	8,386	11	1	6	2	11	9	1	6	3	2	4	4	5	65	1	6,744

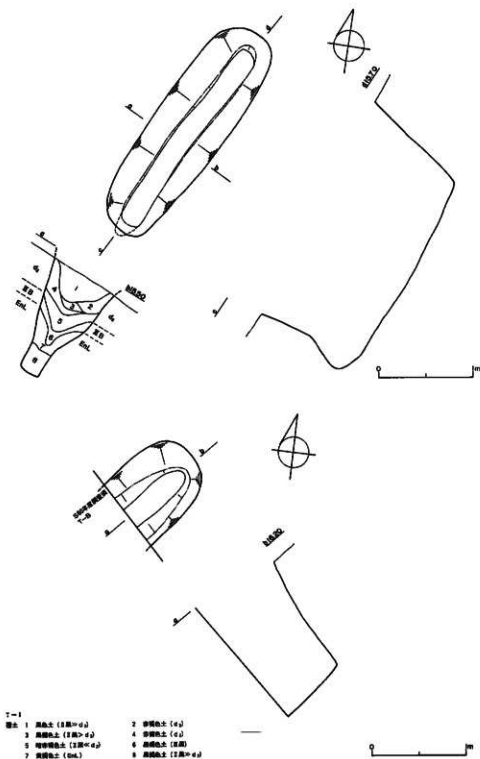


図 I-31 T-1・2

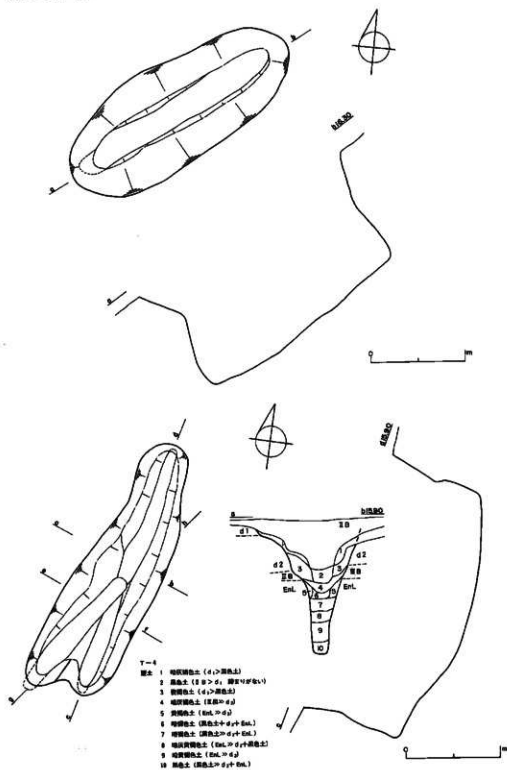
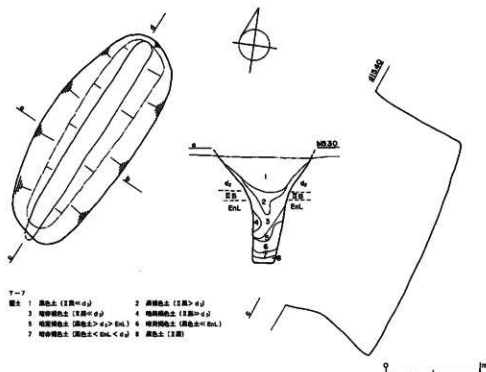


図1-32 T-3・4

I 美々8遺跡の調査



T-7

- 層土 1 黒色土 (I 層 $\approx$ d_1) 2 赤褐色土 (I 層 $>$ d_1)
 3 暗赤褐色土 (I 層 $\approx$ d_2) 4 暗赤褐色土 (I 層 $\approx$ d_2)
 5 暗赤褐色土 (黒色土 $>$ $d_2 >$ d_{1L}) 6 暗赤褐色土 (黒色土 $\approx$ d_{1L})
 7 暗赤褐色土 (黒色土 $<$ $d_{1L} <$ d_2) 8 黒色土 (I 層)

T-8

- 層土 1 暗赤褐色土 (d_{1L})
 2 暗赤褐色土 ($d_{1L} >$ d_2)
 3 黒色土 (I 層)
 4 暗赤褐色土 (I 層 $>$ d_2)
 5 暗赤褐色土 (d_2)
 6 暗赤褐色土 (I 層)
 7 暗赤褐色土 (d_{1L})
 8 暗赤褐色土 (黒色土 $<$ d_2)
 9 暗赤褐色土 (暗赤褐色土 $\approx$ d_2)
 10 暗赤褐色土 (黒色土 $<$ $d_2 <$ d_{1L})
 11 黒色土 (I 層)

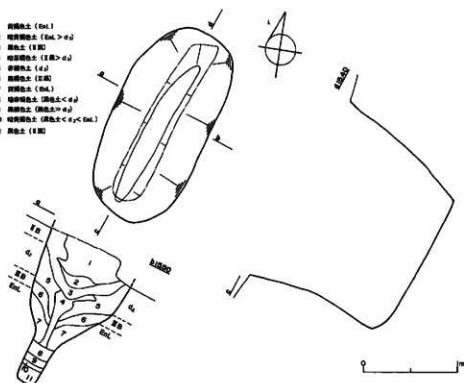


図 I-34 T-7・8

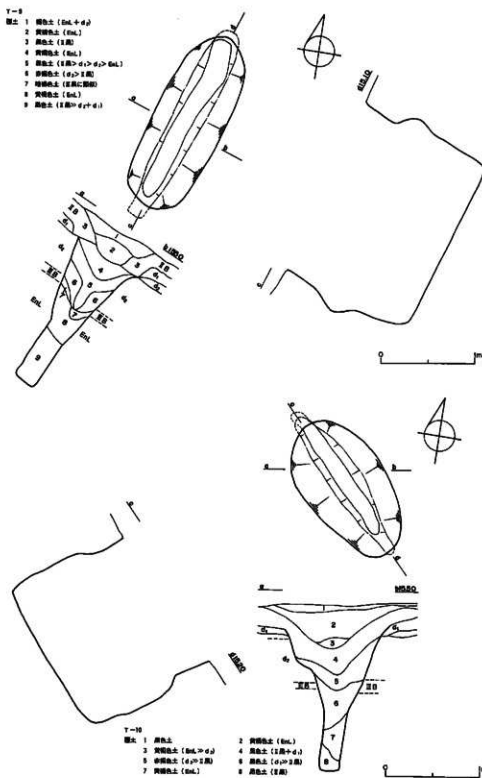


図1-35 T-9・10

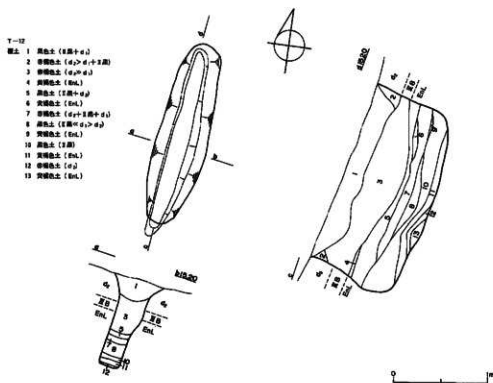
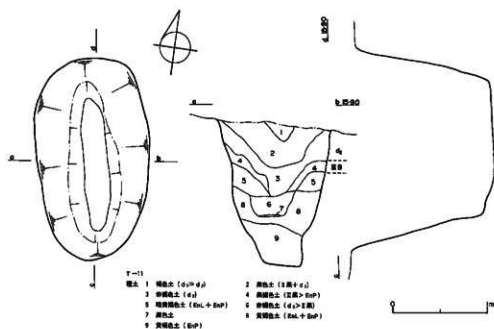


図 I-36 T-11・12

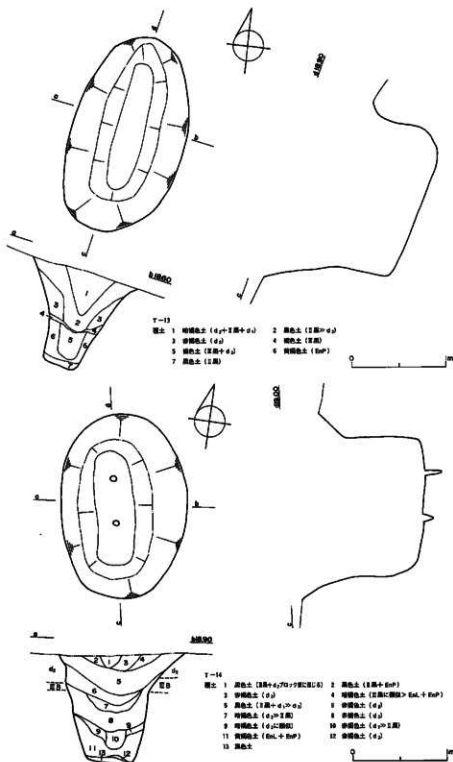


図 I-37 T-13・14

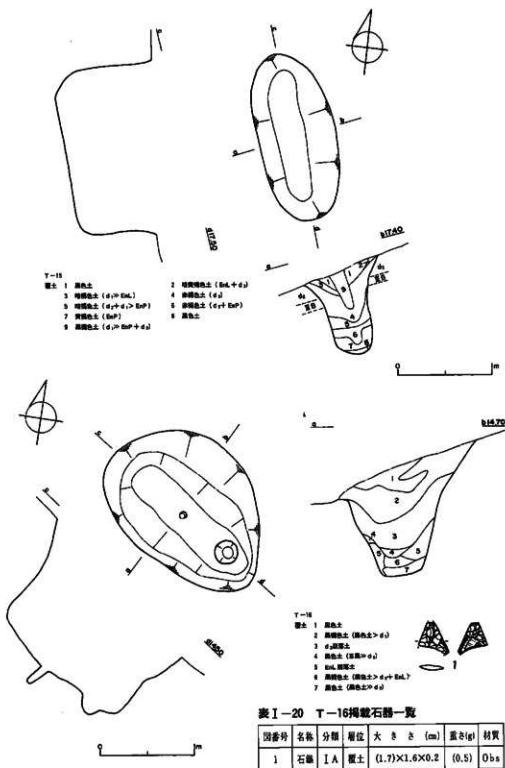


図 I-38 T-15・16と遺物

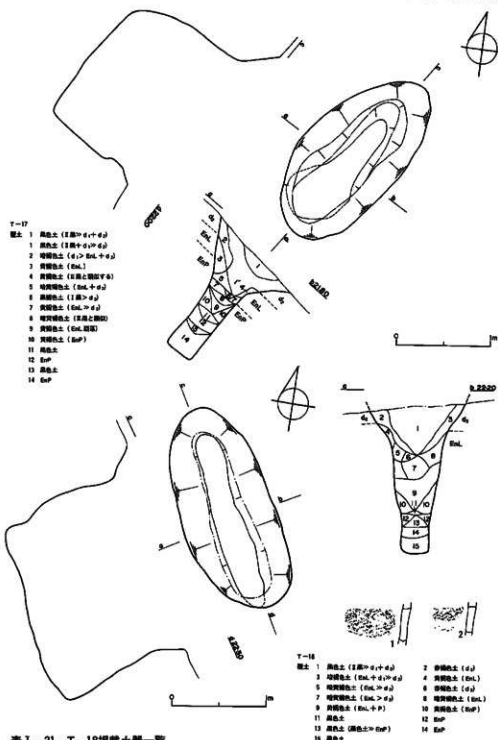


表 I-21 T-18掘土層一覽

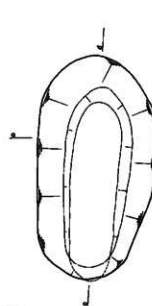
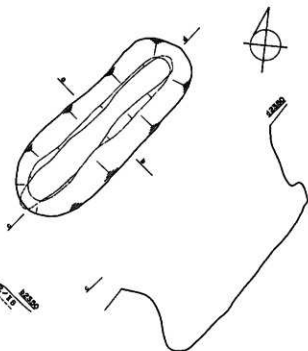
図番号	分類	部位	層位	備考
1	I b-3	胴	覆土	
2	*	*	*	

図 I-39 T-17・18と遺物

T-19

圖上

- 1 黒色土 (I層) $d_1 > d_2 > d_3$
- 2 黒色土 ($d_1 > 2$ 層) d_1
- 3 砂礫層土 (I層) $d_1 > d_2 > d_3$
- 4 黒色土
- 5 黒色土 ($d_1 + 2$ 層) d_1
- 6 砂礫層土 ($d_1 + EnL$)
- 7 砂礫層土 (I層) d_1
- 8 砂礫層土 ($d_1 > 2$ 層)
- 9 砂礫層土 ($EnP > 2$ 層)



T-20

圖上

- 1 黒色土 (I層) $d_1 > d_2 > d_3$
- 2 黒色土 ($d_1 > 2$ 層) d_1
- 3 黒色土 (I層) $d_1 > d_2 > d_3$
- 4 砂礫層土 ($d_1 > 2$ 層) d_1
- 5 砂礫層土 (d_1)
- 6 砂礫層土 ($d_1 + EnP$)
- 7 黒色土 (I層) d_1
- 8 砂礫層土 ($d_1 + EnL$)
- 9 砂礫層土
- 10 砂礫層土 ($d_1 + 2$ 層) EnL
- 11 砂礫層土 ($d_1 + 2$ 層)
- 12 砂礫層土 (EnL)
- 13 黒色土
- 14 砂礫層土 ($d_1 + 2$ 層)
- 15 砂礫層土 ($d_1 + EnL > 2$ 層)
- 16 EnP
- 17 砂礫層土 (I層)
- 18 砂礫層土 ($EnP + d_1$)
- 19 EnP
- 20 砂礫層土
- 21 砂礫層土 (I層) d_1

図 I-40 T-19・20

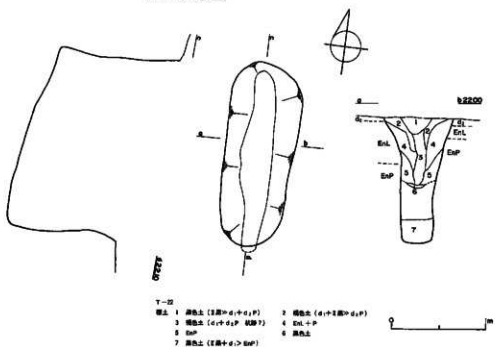
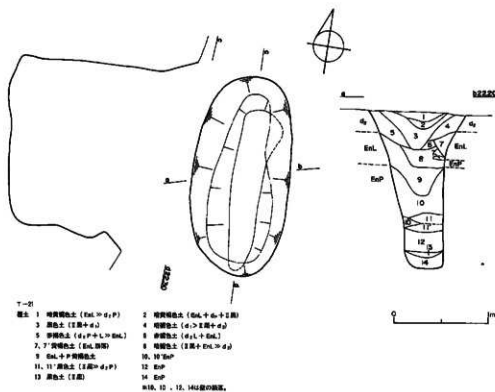


図 I-41 T-21・22

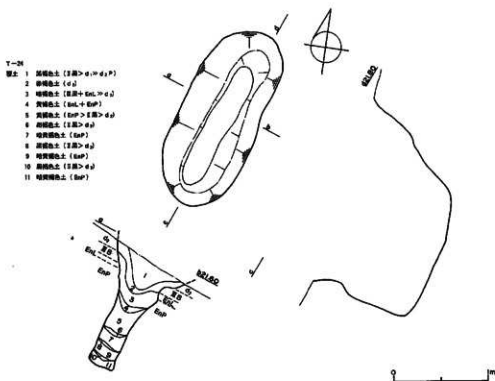
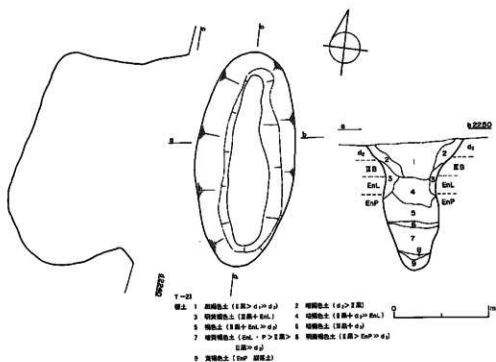


図 I-42 T-23・24

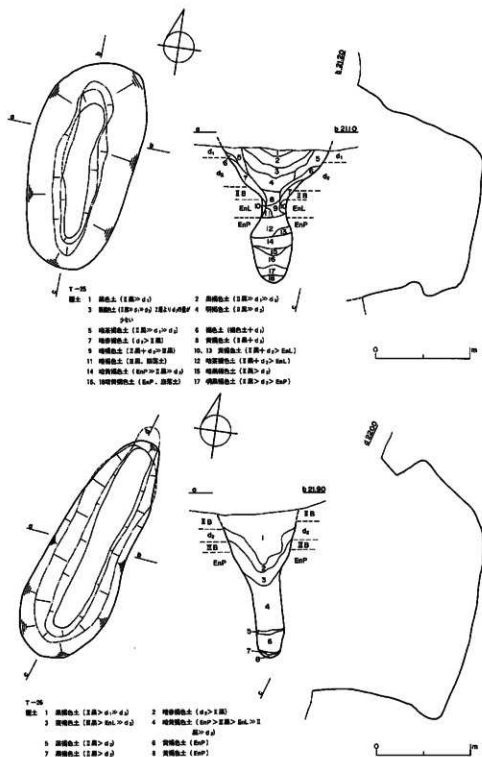
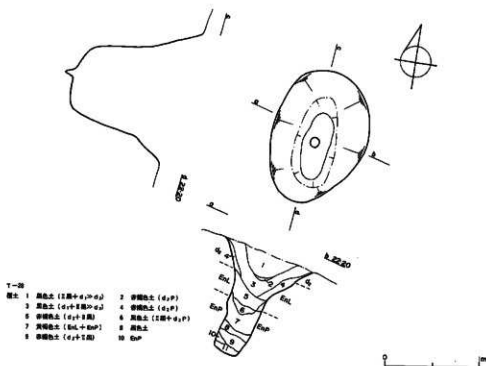
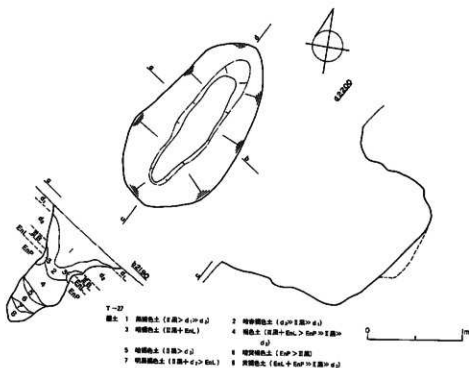


図 I-43 T-25・26



図I-44 T-27・28

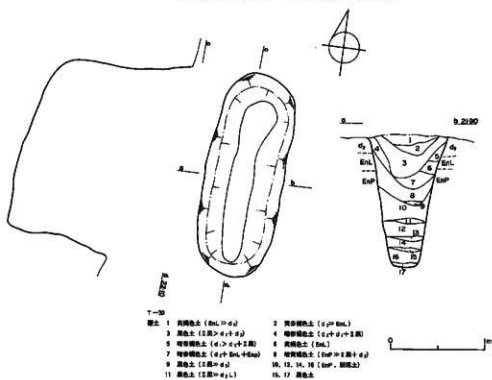
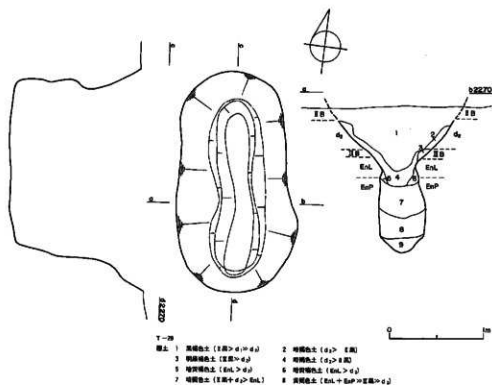


図 I-45 T-29・30

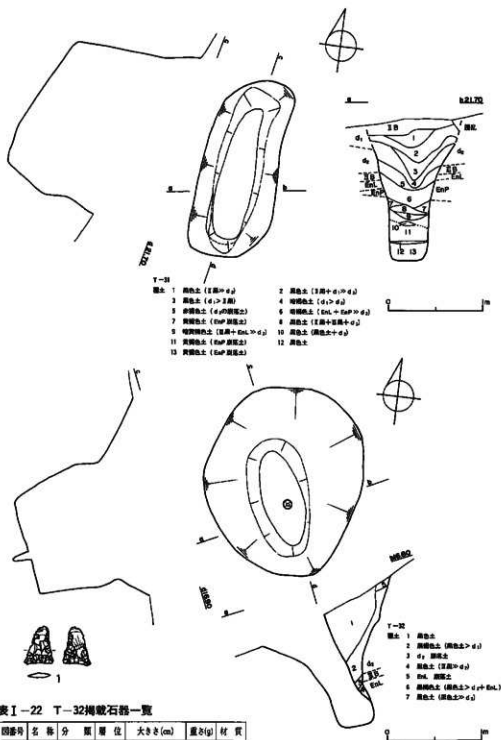


表 I-22 T-32掲載石器一覧

図番号	名称	分	原	層位	大きさ(m)	重さ(g)	材質
1	石	鉄	IA-4	覆	土	2.0×1.5×0.3	(0.7) Obs

図 I-46 T-31・32と遺物

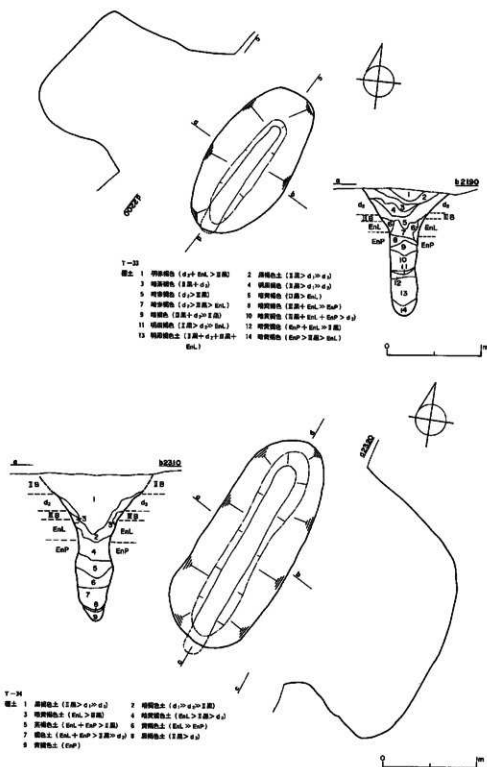


図 I-47 T-33・34

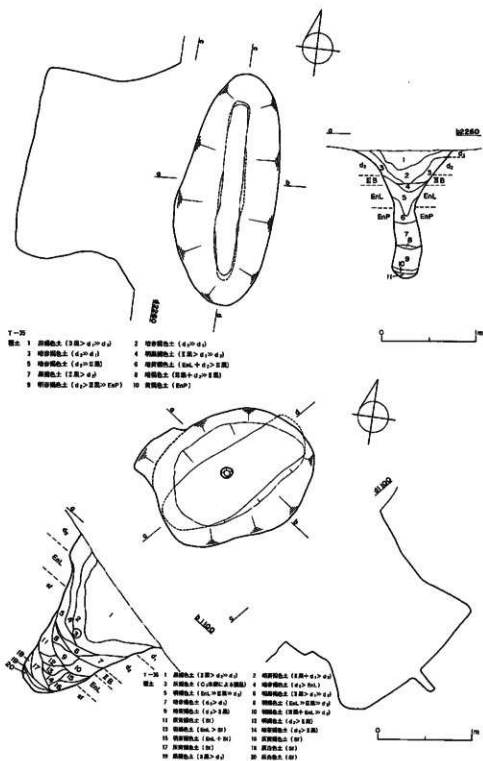


図 I-48 T-35・36

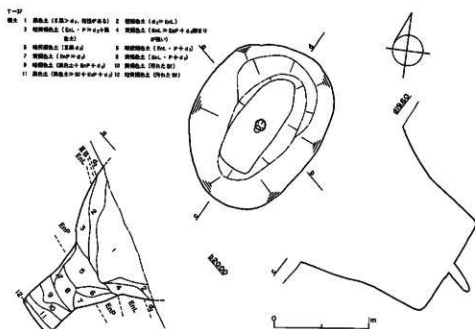


図 I-49 T-37

(2) 遺物

Ⅱ黒層からは、縄文時代早期～晩期の土器片が1,947点とこれらに伴うと考えられる石器等15,661点・石製品1点が出土した。

1) 土器 (図 I-50～54)

1,947点のうちⅠ群のものが47%で最も多く、Ⅱ群が19%、Ⅴ群7%、Ⅳ群7%、Ⅲ群5%と続く。これらの土器はⅠ群のものが平坦部から南斜面にかけて、Ⅱ群のものは南斜面にそれぞれ集中しており、その他のものは南斜面を除きほぼ全域に分布する。(佐藤和雄)

Ⅰ群b-3類(薄手の器面に1～1.5cm間隔で多数横環する明瞭な隆線を形成する貼付帯がある。その間に、短縄文と縄線文を交互に施している。本類の中でも新しい段階のものかとみられる。

Ⅰ群b-4類(2～34) 5には一條の隆起線が認められ、その上下に本類の特色となる羽状の自縄自巻の縄文が施されている。本類の内では最も古い段階のものとみなされる。2～12は次の段階とみなされるものである。2・7・11は同一個体とみなされるもので、口縁に短縄文を2列に施している。

4は同一個体で、燃り戻しになった原体RRによる施文の認められるものである。6は縄文の圧痕のやや深いもの、8・9は縄文地に綾絡文の認められるものである。10は底部の周囲に縄端による刺突文を加えている。

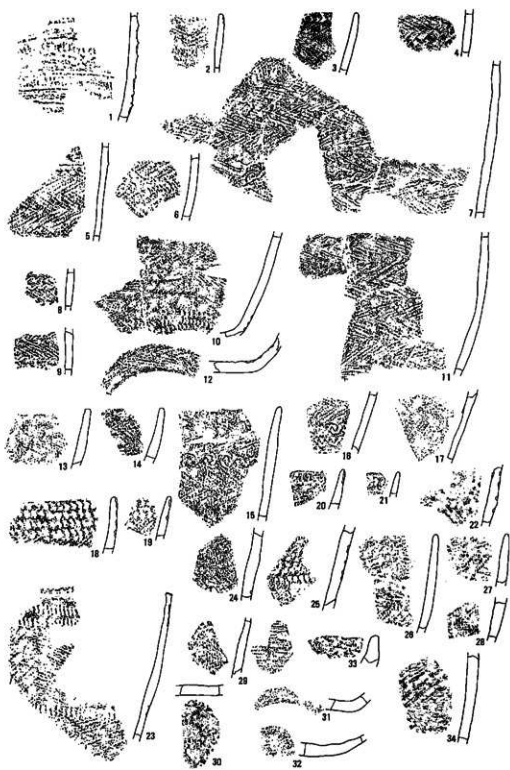


図 I-50 II 黒層の土器(1)

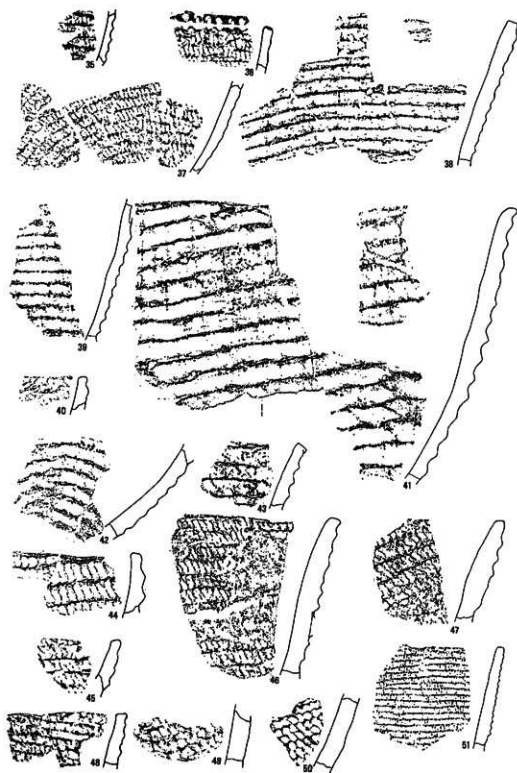


図 I—51 II 黒層の土器(2)

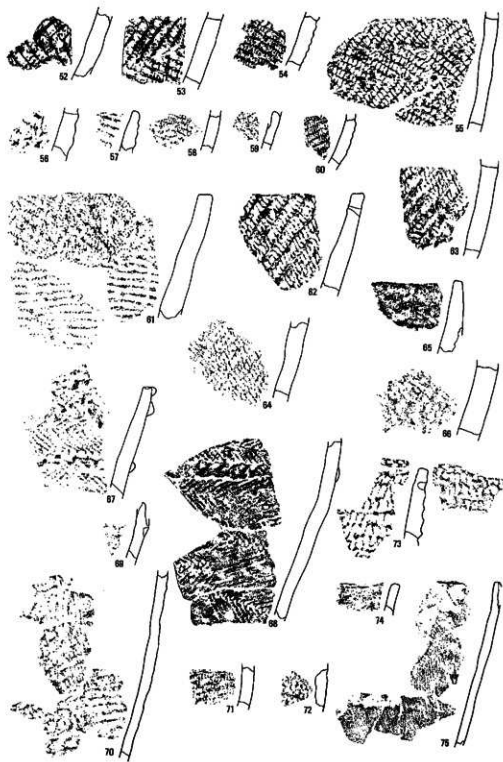


図 I-52 I 黒層の土器(3)

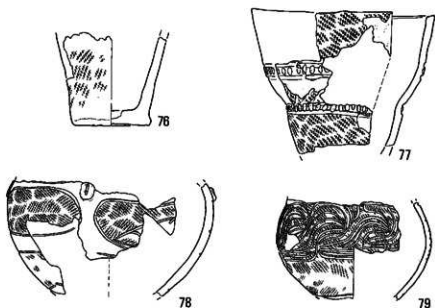


図 I-53 II 黒層の土器(4)

13~24は、比較的新しい段階のものと思われる。13・14は自縄自巻の原体による縄文のみのものである。15には結束の回転文かとみられる文様がある。16には大柄な結節の回転文が施されている。17には縄文施文後に器面をかるく磨いたようにみられるものである。18には4段、19には2段縄文をめぐらすものである。20・21には口唇直下に一段短縄文をめぐらす、22は、縄文の間に短縄文を配するものである。23は、口唇上と口縁に棒状工具による爪形状の刺突文をめぐらし、体部に2本並列する磨りの異なる原体の磨糸文が施されている。24には痕跡的だが、25には明瞭に縄端による刺突文が施されている。26~28は同一個体で、縄文に重ねて魚骨回転文を施している。29は内面に貝殻によるかとみられる条の施されたものである。30は、底面には縄端による刺突文を施したものの。30・31は平底を呈し、32は丸底に近いものとみられる。33・34は最も新しい段階に属すとみなされるものである。33は無文の口縁部で、34は比較的太い磨糸文の施されたものである。

Ⅱ群 a-1 類 (35~57) 35~51は縄文土器である。35~37は比較的薄手で、古い段階のものかとみなされる。36と37は同一個体で、口唇に縄端によるかとみられる刺突がある。38~43は条内のなで消されたもので、39は比較的薄手であり、35~37と同様古い段階のものかとみられる。38の条は幅が1cm、41の条は1.5cm程である。口唇は角形か切り出し形に調整されている。44~49は条内の節の認められるものである。49の条はわずかにつけられている。50の文様は、通常の縄文とは異っていて、あるいは組み紐の類の圧痕かとみられる。51は条の幅の狭いもので、5mm程である。50・51は新しい段階のものかとみられる。52~57はⅡ群 a-1 類の羽状縄文土器である。52は節がなで消されている。52~54、56は帯状の縄文帯の幅が広く、55は少し狭

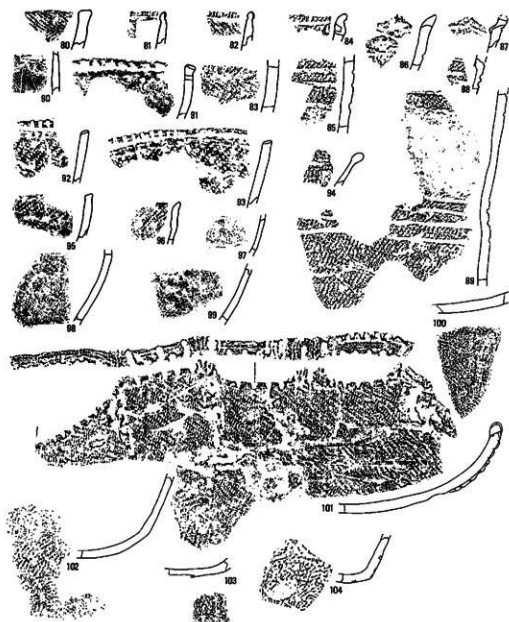


図 I-54 II 黒層の土器(5)

い。55の内面はなめらかに調整されている。

II 群 a-2 類 (58-66) 58-60は同一個体とみなされる斜行縄文が施され幅のせまい網文が施されている。62-66は粗い斜行縄文の施されたもので、62-64は圧痕が深く、65・66では浅い。62の口縁には貫通孔がめぐらされている。

III 群 a 類 (76・67・68) 76は底部周囲3分の1程度が残存する。内面は磨かれていて外面

は部分的に縄文が施されている。縄文施文後底部の周囲をなで調整している。底面には網状痕がある。67は結束羽状縄文の他に貼付帯を施し、それに指頭で刻み目をつけている。内面は磨かれている。68は結束羽状縄文の他に貼付帯を施し、それに棒状工具で刻み目を施すもので、内面には凹凸があり、なで調整がなされている。

Ⅲ群 b-2 類 (69-71) 69・70は同一個体とみなされ、器面には横走気味の斜行縄文を地として下から斜に突いた刺突文と3条の沈線が施されている。71は横走気味の縄文の施されているものである。

Ⅳ群 a 類 (72-75) 72は胎土に縦縞を含まず、縄文施文後に器面がなでられたような形跡がある。73は口唇と内面にも縄文が施されている。口唇直下に縄端によるかとみられる刺突文が加えられ、内面に突痕を形成する。74は口縁部が無文の薄手の土器であり体部に横走する細かい縄文の施された破片である。75は無文のもので、器面調整痕とみなされる擦痕がある。

Ⅳ群 b 類 (77・78・80) RLの斜行縄文を地として沈線による文様が描かれている。口唇から内面にかけて磨かれている。78は注口付土器とみられ、注口部を除く3方に瘤状の貼付文がある。周囲の3分の2程度残存する。器面には羽状縄文を沈線で区画し、磨消縄文を形成している。体下半にはRLの斜行縄文が施されている。80は口唇が磨かれ、細かい羽状縄文の施された土器である。

Ⅳ群 C 類 (79・81-90) 79は壺形土器の体部で、縄文地には沈線で文様が描かれている。体下半にLRの細かい縄文が施されている。81・82は同一個体で、口唇に刻み列、体部には縄文地に沈線による文様が描かれている。84-89は同一個体に属するものである。口縁に突起があり体部にくびれをもつ大形の深鉢形土器である。口縁部と体部に縄文を施し、それに重ねて沈線をつけ、口縁直下には、突刺文が並べられている。90は壺形土器の口縁部で突起部分を欠失している。磨消縄文の施されているものである。

V 群 C 類 (91-104) 96・98・99・102は、鉢形土器とみなされるもので縄文のみの文様である。雄施文後器面をなで調整していて、文様が不鮮明である。91-95は縄文の施された浅鉢形土器とみなされ、91-94の口唇には刻み目がある。91の刻み目は指頭によるものとみられる。

92と93は同一個体で、刻み目は部分的である。

97は無文の土器で、薄手である。亀ヶ岡式系とみられる。101は、大形の片口浅鉢の破片である。内面の黒色で光沢をもつ状態と、外面に炭化物の付着しているのをみると、フライパンのような用途にあてたものかと思われる。文様は口唇面と、側面に認められ、外側全面に縄文が施されている。口唇には縄線を並列させ、所々棒状工具で刻みを入れている。また、口唇部に刻み目をめぐらせている。陸帯につけられた刻み目は爪によるものである。100・103・104は底部の破片である。100・103の内面には炭化物が付着し、ほぼ全面黒色を呈する。104は小形の浅鉢形土器の底部とみなされる。器面に縄文を施し、その表面をなで、沈線を描き、さらに刺突文が加えられている。

(大沼忠春)

表 I-23 掲載土器一覽

図番号	分類	部位	発掘区	図番号	分類	部位	発掘区
1	Ib-3	胴部	h-67-28	53	IIa-1	胴部	
2	Ib-4	口縁部	h-67-94	54	*	*	h-68-80
3	*	*	h-67-53	55	*	*	h-68-91
4	*	胴部	h-67-91	56	*	*	h-67-45
5	*	*	h-68-72	57	*	口縁部	g-68-21
6	*	*	h-67-51	58	IIa-2	胴部	g-68-10
7	*	*	h-67-94	59	*	*	g-68-20
8	*	*	h-67-76	60	*	*	g-68-30
9	*	*	h-67-84	61	*	口縁部	g-68-21
10	*	底部	g-67-11	62	*	*	g-68-01
11	*	胴部	h-67-74	63	*	胴部	h-67-37
12	*	底部	h-67-51	64	*	*	h-67-37
13	*	口縁部	g-67-29	65	*	口縁部	h-68-62
14	*	*	g-66-17	66	*	胴部	h-68-62
15	*	*	g-67-28	67	IIIa	口縁部	g-68-02
16	*	胴部	g-67-74	68	*	胴部	g-68
17	*	*	g-67-54	69	IIIb-2	*	h-67-62
18	*	口縁部	h-68-72	70	*	*	h-67-64
19	*	*	g-67-52	71	*	*	f-66-21
20	*	*	h-67-54	72	IVa	*	h-67-81
21	*	*	g-67-53	73	*	口縁部	g-67-16
22	*	胴部	g-67-54	74	*	*	h-67-61
23	*	口縁部	g-67-52	75	*	*	g-66-76
24	*	胴部	h-66-88	76	IIIa	*	h-68-72
25	*	*	g-68-21	77	IVb	*	h-67-85
26	*	口縁部	g-67-54	79	*	*	f-66-04
27	*	*	g-67-54	80	IVc	*	g-66-66
28	*	胴部	g-67-54	89	IVb	口縁部	g-65-70
29	*	*	h-67-95	81	VIc	*	g-65-91
30	*	底部	h-67-91	82	*	*	g-65-91
31	*	*	h-66-97	83	*	*	f-66-25
32	*	*	g-67-12	84	*	*	g-66-56
33	*	口縁部	h-68-70	85	*	*	g-66-56
34	*	胴部	h-68-34	86	*	*	g-66-56
35	IIa-1	胴部	g-68-21	87	*	*	g-66-56
36	*	口縁部	h-66-96	88	*	胴部	g-68
37	*	胴部	h-66-97	89	*	*	g-66-56
38	*	口縁部	g-68-20	90	*	*	h-68-31
39	*	胴部	g-68-20	91	Vc	口縁部	f-66-03
40	*	口縁部	g-67-19	92	*	*	h-66-68
41	*	*	g-67-19	93	*	*	h-66-68
42	*	胴部	g-67-29	94	*	*	f-66-02
43	*	口縁部	g-68-21	95	*	*	f-66-12
44	*	*	h-68-71	96	*	*	g-66-54
45	*	*	g-67-29	97	*	胴部	g-66-54
46	*	*	g-67-29	98	*	*	g-67-18
47	*	*	g-67-30	99	*	*	g-66-08
48	*	*	g-67-29	100	*	底部	f-66-04
49	*	胴部	g-67-54	101	*	*	f-65-56
50	*	*	g-68-20	102	*	*	f-66-04
51	*	口縁部	g-67-11	103	*	*	g-66-54
52	*	胴部	g-67-39	104	*	*	h-67-60

2) 石器等 (図1-55~59)

Ⅱ 黒曜からは、15,662点の石器等が検出された。このうち、フレイク・チップ(01・02)、礫・破片($X_0 \cdot X_1$)が97%を占め、石器は3%の出現率である。

石器は総数495点のうち、剥片石器352点、礫石器143点である。剥片石器の器種別出土頻度は、石鏃が64%を占め、以下、つまみ付ナイフ、スクレイパー、石槍またはナイフ、石錐の順である。礫石器では、石斧が71%で最も多く、すり石、たたき石、砥石、石錘、台石、石皿の順となる。以下、器種別に記す。

石鏃(1~63) 224点出土したうち破片を除く177点については、 $A_2 \sim A_7$ 類に細分される。 A_2 類(1~4)は、6点出土した。二次加工は、いずれも両面を入念に施している。 A_3 類(5~12)は、14点出土した。五角形を呈する薄身のもので、両面とも入念に二次加工の施されたものが多い。 A_4 類(13~43)は、112点出土した。基部が平坦なもの(13~26)と内湾するもの(27~43)がある。 A_7 類(44~63)は、42点出土した。かえしが明瞭なもの(47・50~53・58~61・63)と不明瞭なもの(44~46・48・54~57・62)がある。石材は47のみ珪岩で、ほかはすべて黒曜石である。

石槍またはナイフ(64~70) 10点出土したうち、4点は破片である。 B_1 類(64~68)と B_2 類(69・70)に分けられる。石材はすべて黒曜石である。

石錐(71~72) 4点出土している。71は棒状の C_2 類で、先端部は摩滅している。72は、断面が三角形に近い C_1 類である。石材は、いずれも黒曜石である。

つまみ付ナイフ(73~101) 62点出土した。 D_1 類および D_3 類~ D_5 類に細分される。 D_1 類(73~84)は、片面全面加工で裏面の側縁に調整痕を有する。 D_3 類(85~93)は、片面周縁加工のもの。 D_4 類(94・95)は、片面全面加工だけで裏面は素材面のままのもの。 D_5 類(96~101)は、両面加工のものである。石材は黒曜石のほか、頁岩、珪岩も多く含まれる。

スクレイパー(図102~112) 52点出土した。定形的なものは少なく、剥片の側縁または端部に二次加工を施したことが多い。石材は106のみ頁岩で、ほかは黒曜石。

石斧(113~121) 102点出土したが、85点は破片である。細分できたものは、 F_1 類(113)が4点、 F_2 類(114~120)が8点、未成品(121)が5点である。

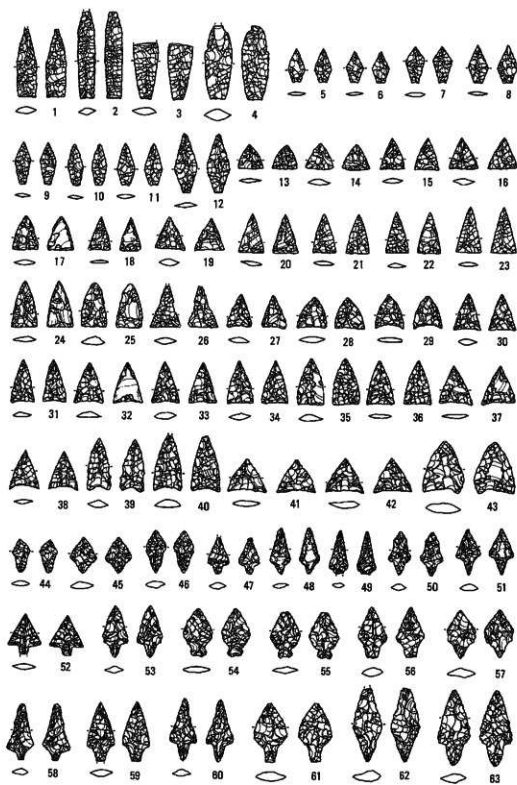
たたき石(122) 7点出土したうち、3点が破片である。122は G_4 類で、 M 類片を再利用したものと考えられる。石材は安山岩である。

すり石(124~128) 18点出土したうち、13点が細分される。 J_1 類(123~125)は、角柱礫を素材としたもので、断面は三角形になる。 J_2 類(126~128)は、扁平礫を素材としたものである。128は、すり面の両端に打ち欠きを有する。石材は、122・125が安山岩、ほかは砂岩である。

台石・石皿(129) 4点出土した。129は破岩製で、両面が使用されている。

石錘(130・131) 130・131は、長軸に打ち欠きを有する破岩製の N 類である。

石製品(132) 1点のみ出土した。132は蛇紋岩製の玉の破片である。(森岡健治)



図I-55 I黒層の石鏃(1)

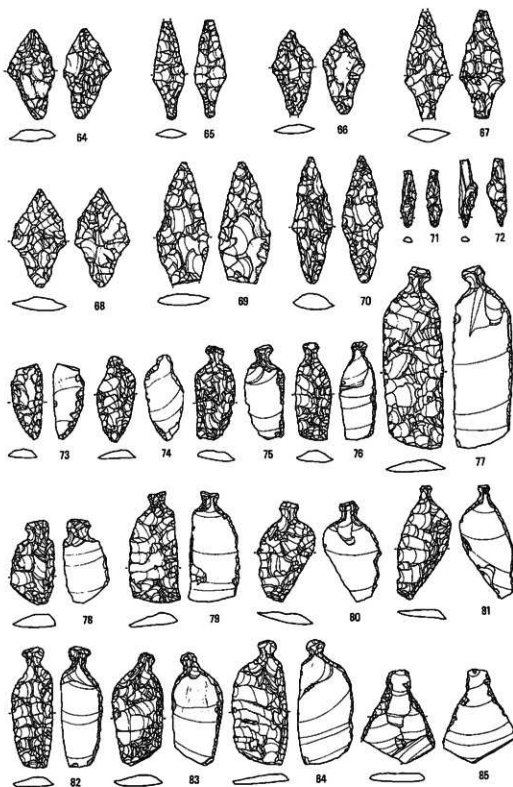


図1-56 II 黒居の石器(2)

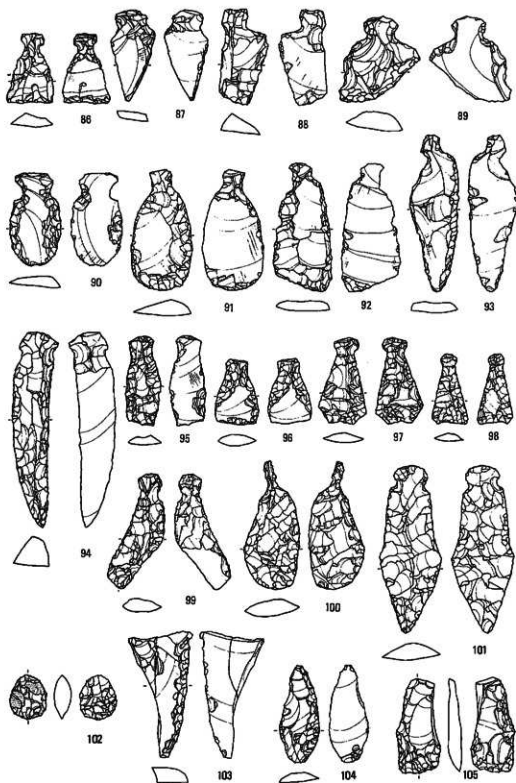


図 I-57 II 黒層の石器(3)

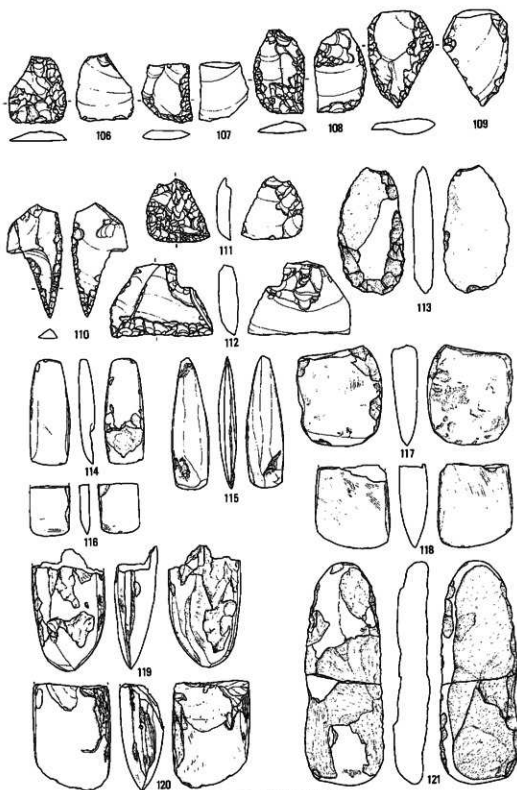


図 I-58 I 黒層の石器(4)

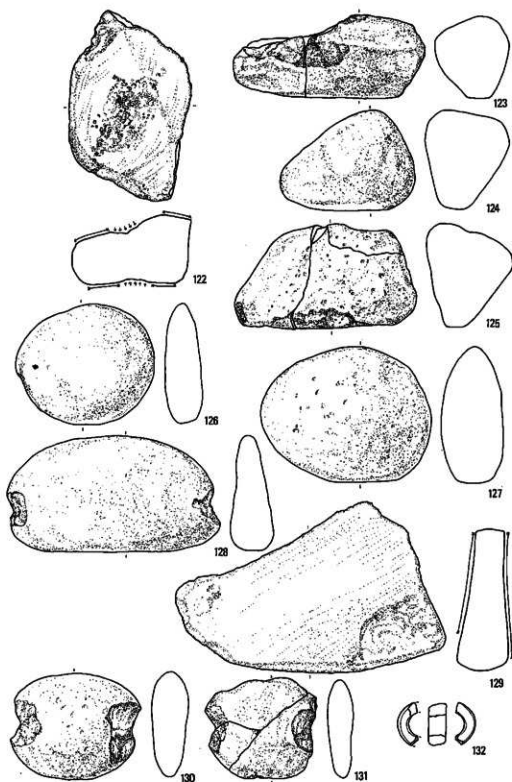


図 I-59 II 黒層の石跡(5)

表I-24 掲載石群一覧

番号	名 称	分 類	発 掘 区	大 き さ (cm)	重 さ (g)	材 質	写 真 図版番号
1	石	A 2	g-66-06	(3.6)×1.1×5.4	(3.3)	Obs	I-26
2	*	*	g-67-11	(4.6)×0.9×0.4	(1.9)	*	*
3	*	*	g-67-30	(3.0)×1.3×0.3	(1.4)	*	*
4	*	*	h-66-73	(3.9)×1.4×0.6	(3.3)	*	*
5	*	A 3	h-67-74	1.8×0.9×0.2	0.2	*	*
6	*	*	h-66-79	1.6×0.9×0.2	0.2	*	*
7	*	*	g-66-56	1.9×1.0×0.2	0.4	*	*
8	*	*	h-66-54	2.0×1.0×0.2	0.3	*	*
9	*	*	g-67-13	2.2×0.8×0.2	0.3	*	*
10	*	*	g-67-43	2.1×0.8×0.2	0.3	*	*
11	*	*	g-67-23	2.2×0.9×0.2	0.4	*	*
12	*	*	g-65-62	3.1×1.2×0.6	0.7	*	*
13	*	A 4	g-66-46	1.4×1.3×0.2	0.3	*	*
14	*	*	h-68-40	1.4×1.4×0.3	0.4	*	*
15	*	*	g-65-00	1.6×1.3×0.2	0.3	*	*
16	*	*	g-65-80	1.8×1.6×0.3	0.5	*	*
17	*	*	g-67-29	1.8×1.9×0.3	0.5	*	*
18	*	*	h-68-62	1.8×(1.1)×0.2	(0.2)	*	*
19	*	*	h-67-70	1.9×1.6×0.4	0.7	*	*
20	*	*	h-68-72	2.0×1.3×0.2	0.4	*	*
21	*	*	h-68-23	2.1×1.2×0.2	0.4	*	*
22	*	*	h-68-40	2.2×1.2×0.2	0.5	*	*
23	*	*	h-68-41	2.4×1.3×0.2	0.6	*	*
24	*	*	h-67-61	2.4×1.4×0.3	0.8	*	*
25	*	*	g-67-54	2.3×1.3×0.4	1.3	*	*
26	*	*	h-67-65	(2.3)×1.6×0.3	(0.8)	*	*
27	*	*	h-68-62	2.0×1.5×0.2	0.4	*	*
28	*	*	h-68-34	1.8×1.7×0.3	0.6	*	*
29	*	*	g-67-48	(2.0)×1.7×0.3	(0.6)	*	*
30	*	*	g-67-29	1.8×1.5×0.3	0.5	*	*
31	*	*	g-66-08	1.9×1.8×0.2	0.6	*	*
32	*	*	g-67-17	2.3×1.6×0.3	0.7	*	*
33	*	*	g-66-37	2.4×1.6×0.3	0.7	*	*
34	*	*	g-67-18	2.4×1.6×0.3	0.7	*	*
35	*	*	h-68-80	2.7×1.6×0.3	1.0	*	*
36	*	*	g-67-00	2.5×1.6×0.2	0.6	*	*
37	*	*	h-67-92	2.4×1.9×0.2	0.6	*	*
38	*	*	f-66-20	2.3×1.7×0.2	0.5	*	*
39	*	*	g-66-65	2.9×1.9×0.5	1.2	*	*
40	*	*	g-65-00	(3.1)×1.6×0.4	(1.6)	*	*
41	*	*	h-68-31	2.1×2.2×0.3	0.7	*	*
42	*	*	g-68-10	2.2×2.2×0.3	0.7	*	*
43	*	*	g-68-21	3.0×2.3×0.5	2.7	*	*
44	*	A 7	g-68-11	1.7×0.9×0.2	0.3	*	*
45	*	*	h-67-75	1.8×1.4×0.4	0.7	*	*
46	*	*	g-67-46	2.4×1.2×0.4	0.6	Che	*
47	*	*	h-68-32	(1.9)×1.0×0.3	(0.5)	Obs	*
48	*	*	g-67-18	2.4×1.0×0.2	0.6	*	*
49	*	*	h-66-69	(2.2)×1.0×0.2	(0.3)	*	*
50	*	*	g-67-40	2.3×1.2×0.3	0.5	*	*
51	*	*	g-66-64	2.4×1.3×0.4	0.7	*	*
52	*	*	h-65-74	(2.1)×1.8×0.3	(0.7)	*	*
53	*	*	g-66-22	2.6×1.3×0.4	0.9	*	*

I 美々8遺跡の調査

番号	名 称	分 類	発 掘 区	大 き き (cm)	重 さ (g)	材 質	写 真 図 版 番 号
54	石 鎌	A 7	h-67-66	2.5×1.5×0.3	1.0	Obs	I-26
55	〃	〃	h-67-79	2.4×1.6×0.4	1.1	〃	〃
56	〃	〃	h-67-54	2.6×1.5×0.5	1.3	〃	〃
57	〃	〃	g-67-07	2.5×1.5×0.5	1.1	〃	〃
58	〃	〃	g-67-08	3.0×1.4×0.4	1.0	〃	〃
59	〃	〃	h-67-69	3.1×1.4×0.6	1.2	〃	〃
60	〃	〃	g-67-21	3.3×1.4×0.4	0.9	〃	〃
61	〃	〃	h-68-31	3.1×1.8×0.5	1.8	〃	〃
62	〃	〃	h-67-44	(3.9)×1.5×0.5	(2.4)	〃	〃
63	〃	〃	h-66-73	4.0×1.7×0.6	2.6	〃	〃
64	石櫛またはナイフ	B ₁	g-67-01	(4.6)×2.4×0.6	(4.0)	〃	〃
65	〃	〃	h-68-80	(5.3)×1.8×0.5	(3.0)	〃	〃
66	〃	〃	g-66-57	4.9×2.6×0.7	5.9	〃	〃
67	〃	〃	h-67-83	(5.8)×2.5×0.7	(6.6)	〃	〃
68	〃	〃	g-67-43	5.3×3.1×0.7	7.2	〃	〃
69	〃	B ₂	h-67-62	(6.6)×2.9×0.9	(10.3)	〃	〃
70	〃	〃	g-67-08	6.8×2.4×0.9	10.8	〃	〃
71	石 鎌	C ₂	g-67-35	3.0×0.7×0.6	1.6	〃	〃
72	〃	C ₁	h-67-74	3.7×1.1×0.7	1.9	〃	〃
73	つまみ付ナイフ	D ₁	g-67-29	4.1×1.8×0.6	4.1	〃	I-27
74	〃	〃	h-67-81	4.5×2.0×0.5	4.8	Che	〃
75	〃	〃	h-67-61	4.9×2.1×0.5	6.3	〃	〃
76	〃	〃	g-68-20	5.1×1.9×0.9	5.0	〃	〃
77	〃	〃	g-67-31	9.5×3.2×0.6	23.9	Sh	〃
78	〃	〃	h-67-28	4.4×2.3×0.6	9.0	Che	〃
79	〃	〃	h-68-43	5.8×2.6×0.6	9.5	〃	〃
80	〃	〃	g-68-10	5.3×2.8×0.6	8.7	Sh	〃
81	〃	〃	g-68-21	4.6×2.4×0.5	8.3	Che	〃
82	〃	〃	h-68-73	6.4×2.1×0.5	9.4	Sh	〃
83	〃	〃	h-67-74	6.0×2.7×0.7	12.1	Che	〃
84	〃	〃	g-68-30	6.5×2.9×0.5	12.6	Sh	〃
85	〃	D ₂	g-68-21	4.9×3.9×0.4	(6.5)	Obs	〃
86	〃	〃	g-67-24	3.8×2.6×0.7	5.0	〃	〃
87	〃	〃	g-68-20	4.8×2.3×0.6	5.8	〃	〃
88	〃	〃	g-67-24	5.1×2.3×1.1	11.3	〃	〃
89	〃	〃	g-68-10	5.2×3.6×1.0	15.5	Sh	〃
90	〃	〃	g-68-21	4.9×2.7×0.5	7.6	Obs	〃
91	〃	〃	g-68-11	6.3×3.2×0.7	13.6	〃	〃
92	〃	〃	g-68-21	6.9×3.1×0.4	9.8	〃	〃
93	〃	〃	g-68-20	8.3×2.6×0.6	9.9	〃	〃
94	〃	D ₄	h-68-41	10.5×2.1×1.4	32.1	Sh	〃
95	〃	〃	g-68-21	4.9×2.0×0.5	4.5	Obs	〃
96	〃	D ₃	h-67-29	3.5×2.3×0.8	4.7	Che	〃
97	〃	〃	g-67-05	(4.6)×2.6×0.5	(4.9)	Obs	〃
98	〃	〃	h-67-58	3.7×1.9×0.4	2.3	〃	〃
99	〃	〃	g-67-53	4.6×1.9×0.7	9.1	〃	〃
100	〃	〃	h-68-13	6.8×2.9×0.9	17.1	Sh	〃
101	〃	〃	g-68-21	7.3×3.3×1.0	23.2	〃	〃
102	スクレイパー	E	g-67-08	2.6×2.1×1.0	4.0	Obs	〃
103	〃	〃	g-65-92	(6.8)×3.6×1.0	(15.6)	〃	〃
104	〃	〃	g-68-11	5.3×2.3×0.6	5.8	〃	〃
105	〃	〃	g-68-11	5.1×2.4×1.1	8.7	〃	〃
106	〃	〃	g-67-31	3.8×3.1×1.0	7.4	Sh	〃

番号	名 称	分 類	発 掘 区	大 き さ (cm)	重 さ (g)	材 質	写 真 版 番 号
107	スクレイパー	E	g-68-10	3.3×2.7×1.7	4.8	Obs	I-27
108	＊	＊	h-67-78	4.7×2.9×1.2	9.8	＊	＊
109	＊	＊	h-66-79	5.3×3.7×0.8	11.4	＊	＊
110	＊	＊	g-68-21	6.1×3.1×1.0	10.0	＊	＊
111	＊	＊	g-68-21	3.7×3.2×0.8	8.4	＊	＊
112	＊	＊	h-68-20	3.9×5.7×1.0	21.5	＊	＊
113	石 斧	F ₁	h-67-77	10.2×5.2×1.1	130	Sa	I-28
114	＊	F ₂	g-68-20	8.4×3.1×1.1	50	＊	＊
115	＊	＊	h-67-85	10.4×3.0×1.3	60	Gr-Mud	＊
116	＊	＊	g-68-21	(3.9)×3.2×0.8	(20)	Bl-Mud	＊
117	＊	＊	g-66-19	7.7×6.7×2.0	180	Ser	＊
118	＊	＊	g-66-81	(5.6)×5.9×2.3	(150)	Gr-Mud	＊
119	＊	＊	g-67-00	(9.7)×5.7×3.0	(230.5)	Sch	＊
120	＊	＊	h-66-21	(8.4)×6.1×3.2	(270)	Gr-Mud	＊
121	石 斧 未 成 品	F 未 製 品	h-67-14 h-67-22	17.9×6.2×2.9	450.5	Sa	＊
122	た た き 石	G ₁	h-67-95	9.8×14.5×5.6	710.5	And	＊
123	す り 石	J ₁	g-67-27	6.6×15.3×6.5	750	＊	I-29
124	＊	＊	h-67-65	7.9×10.9×7.5	630	Sa	＊
125	＊	＊	g-68-20	8.1×14.6×7.7	1,200	And	＊
126	＊	J ₂	g-67-04	9.5×10.9×2.9	475.5	Sa	＊
127	＊	＊	h-67-94	10.8×13.7×4.7	910	＊	＊
128	＊	＊	g-66-57	9.3×17.0×3.4	840	＊	＊
129	台 石 ・ 石 皿	M	g-68-21	21.3×13.9×3.8	1,280	＊	＊
130	石 鉢	N ₂	h-67-74	8.9×10.1×2.9	380	＊	I-28
131	＊	＊	h-68-68 h-68-72	8.0×8.7×2.1	240	Gni	＊
132	垂 簾	＊	g-66-59	(2.2)×(1.1)×0.95	2.8	Ser	I-29

6. ローム質土層の調査

本遺跡では、I-1で述べたように更新世の堆積物である恵庭a降下軽石層と支笏軽石流堆積物の間のローム質粘土層を対象に、旧石器確認を実施した。調査の対象は、全体の面積の5%に相当する499.8㎡である。ただし、Ⅲ黒層の調査にあたっては調査区を別区に設定したため、全体の面積の2.3%に相当する222.78㎡である。この結果、ローム質土層の上部からフレイク1点が出土した。

(立川トマス)

(1) 発掘区の設定と層序 (図 I-61)

今回の調査では、台地縁辺部を対象にし、h-67-66杭とg-67-64杭を結ぶ線を中心とした幅10m、長さ95m程の平面形が台形を呈する範囲を調査区とした。ただし、Ⅲ黒層の調査に関しては、この調査区に堆積するⅢ黒層の層厚が2～3cm程と薄かったため、この分の調査区を別区に設定した。発掘区中央部東側の平坦部に位置するh-66-88杭とh-67-83を結

ぶ線を中心とした幅10m、長さ50cm程の平面形が台形を呈する範囲である。

旧石器包含層の分層については、昭和61年度、新千歳空港用地内発掘調査報告書（「第1分冊 調査の概要」）内の標準土層模式図を使用している。（立川トマス）

XI層 淡赤褐色土 支笏軽石流堆積物（Spfl）。

X層 暗黄褐色土 径2～3cmの支笏軽石を含む。

IX層 黄褐色土 径4mmほどの岩片を含む。本層中には部分的に炭化物が混入しており、本層をIX a、炭化物を含むスポットをIX bとした。

VIII層 赤褐色を呈する径1～2mmの軽石層（VIII a）と暗褐色を呈する径1mm以下の細粒スコリア層（VIII b）からなるもので、レンズ状に薄く堆積している。

VII層 暗褐色土 径1mmほどの火山灰を含み、炭化物も少量混入する。粘性に富み、しまりのある層

VI層 黄褐色土 遺物出土層 径1mmほどの火山灰を含み、炭化物が比較的多量に混入する。本層をVI a、炭化物を含むスポットをVI bとした。

V層 暗灰色火山灰 レンズ状に断続的に堆積している。

IV層 黄褐色土 粘性があり、若干炭化物を含む。

III層 灰白色土

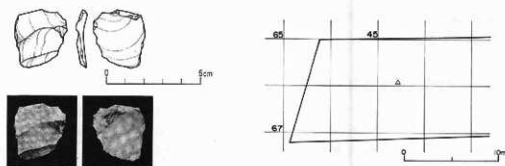
II層 暗灰色火山灰 レンズ状に堆積し、V層と近似する。

I層 明黄褐色土

(2) 遺物 (図I-60)

出土した遺物は、フレイク1点だけである。正面図左側縁は主要剝離面側からの加圧により一部折損している。フレイクの打面は二面で構成されているが、その剝離方向は不明である。大きさは3.08×2.76×0.41cmで、重さ3.4g、石材は白色めのである。

（千葉英一）



図I-60 遺物と出土位置

7. 美々8遺跡第I黒色土層の種子について

同定は開拓記念館矢野牧夫氏に依頼し、結果は表I-5に掲載した。数量の98%を占めるアブラナ科と思われるものは岡山大学笠原教授に同定を依頼していることである。

注 数量は完形の個体数で、()内は破片および細片の数である。

表I-25 植物遺体一覧

遺構・発掘区	同 定	数 量	土量(m ³)	備 考
H-1	アブラナ科?	1,469		
	マメ科ハギ属	15		種子 現生種のおそれあり?
	ヒロノキハダ?	(1)		果実?
	ユリ科	10		モロコシではない。栽培種ではない。
	ヤマブドウ	1		
	オニグルミ	(8)		種子
	タデ科タデ属	1		
	現 生 種	5(8)		
計	不 明 種	18		
		1,519(17)	0.135	
f-66	アブラナ科?	791		
	マメ科ハギ属	2		種子 現生種のおそれあり?
	ヒロノキハダ	1		種子
	ヒロノキハダ?	(2)		果実?
	ヤマブドウ	3		
	オニグルミ	(1)		種子
	現 生 種	1		
	不 明 種	9(1)		
	植 物 片	(1)		
計	木 片	(1)		
		807(6)	0.382	
g-66	アブラナ科?	2,221		
	マメ科ハギ属	7		種子 現生種のおそれあり。
	ユリ科	1		モロコシなどではない。栽培種ではない。
	カヤツリグサ科	4		種子
	ヤマブドウ	1		
	オニグルミ	(1)		種子
	現 生 種	8		
	不 明 種	63(3)		
計		2,305(4)	0.894	
g-67	アブラナ科?	5,860		
	マメ科ハギ属	4		種子 現生種のおそれあり。
	ヒロノキハダ?	(4)		果実?
	カヤツリグサ科	3(4)		種子
	ツツジ科スノキ属	1		
	ユリ科	1		モロコシなどではない。栽培種ではない。
	現 生 種	2(3)		
	不 明 種	3(6)		
計		5,874(12)	0.660	
h-66	アブラナ科?	290		
	不 明 種	4(1)		
計		294(1)	0.025	
h-67	アブラナ科?	4,070		
	マメ科ハギ属	3		種子 現生種のおそれあり?
	タデ科	1		
	ユリ科	4		モロコシなどではない。栽培種ではない。
	ヒロノキハダ	(1)		果実?
	現 生 種	13		
計	不 明 種	5(2)		
		4,096(3)	0.962	

8. まとめ

今回の調査ではⅠ黒層・Ⅱ黒層で竪穴住居跡が検出された。本遺跡では初めての例であるが前3回の調査を含め主体となるのはⅠ黒層の捺文土器、集中線、Ⅱ黒層のTビットである。ここでは捺文土器とTビットについて若干述べていきたい。

(1) 捺文時代の土器

1) 分類

器形には甕・鉢・杯・皿などがあり、なかでも甕が多くを占める。これらは文様・手法の特徴・形態などから次のように分類できる。なお個々の土器については観察表に示してある(表6)。

甕(図Ⅰ-10~12)

文様には肩部以上に段・沈線をめぐらせるもの、口縁部・肩部に短刻文をもつもの、口縁部・肩部に貼瘤や貼付帯をもつもの・無文のものなどがある。器面調整の手法にはハケメ・ヘラズリがある。形態は口縁部が外反し、長胴形のものと同張りのものがある。

Ⅰ. 肩部以上に段・沈線をめぐらせるもの

A 段・沈線が2~4のもの(図1-3・6・7)

この中には3本の鋸歯状沈線を施すものがある(図-1)

1. 器面調整がハケメのもの

ハケメには縦・斜めのものが多い。口縁部は上部の立ち上るものがあり(図-2)、端部には平坦になるものと丸味のあるものがある。平坦になるものの中には浅い凹みがめぐるものもある。

2. 器面調整がハケメとヘラミガキのもの

ハケメ調整の後にヘラミガキを施すものである。口縁端部には丸味をもつ。

B 段・沈線が5本以上のもの(図-9~11)

段・沈線が頸部のみに施されるもの・口縁部と頸部に施されるもの、口縁部から頸部にかけて施されるものがある。器面調整はナデ・ハケメ・ヘラミガキが施される。口縁上部が立上っているもの。口縁端部が丸味をもつもの、浅い凹みがめぐるものがある。

Ⅱ. 頸部以上に段・沈線のみられないもの

A 長胴形のもの(図-8)

器面調整は口縁部がハケメ調整、体部がヘラミガキで内面はハケメ調整後にヘラミガキが施される。口縁端部は丸味をもつ。

B 胴張り形のもの(図-5)

最大径が胴部にあるもので、器面調整は内外面ともにハケメ調整後ヘラミガキが施される。

Ⅲ. 肩部以上に沈線がめぐり、口縁部や肩部に短刻文が施されるもの

A 口縁部に短刻文が施されるもの（図-12・13）

器面調整はハケメが施されるが内面にヘラズリらみられるものもある。口縁端部は平坦になるもの（図-12）と丸味をもつもの（図-13）とがある。

B 口縁部と肩部とに短刻文が施されるもの（図-14）

口縁部はゆるく外反し、上部は立ち上がる。端部は丸味をもつ。器面調整は体部が縦のヘラミガキ内面は横のヘラミガキが施される。

Ⅳ. 口縁部・胴上部に貼瘤・貼付帯が施されるもの

完全に復元されたものはないが、器高20cm以内の小型のものが多いようである。

貼瘤が施されるもの（図-16）、貼付帯が施されるもの（図-17）、貼瘤・貼付帯ともに施されるもの（図-15）がある。口縁部は強く外反するものと、ゆるく外反するものがある。口縁端部は丸味をもつ。文様は斜沈線を多用し、口縁部に短刻文が施される。器面はヘラミガキ調整されている。

鉢（図-4・8）

2点ある。頸部・肩部に段をもつものと、口縁部・肩部に短刻文をもつものである。

I. 頸部・肩部に段をもつもの

口縁部はゆるく外反し、端部は丸味をもつ。器面調整はハケメが施される。

Ⅱ. 口縁部・底部に短刻文をもつもの

口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、端部は丸味をもつ。器面調整は内外面ともにヘラミガキが施される。

坏・皿（図23～26）

器面調整はヘラミガキが施され、内面は黒色処理（内黒）されている。全体の器形がわかるものは段・沈線がつき、丸底である、口縁部の形態で次のように分けられる。

I. 口縁部が外傾するもの

A 内外面に段がつくもの（図24）

B 外面に沈線がつくもの（図23・26）

Ⅱ. 口縁部が内傾するもの（図25）

下半部が欠失のため段・沈線の有無は不明である。

須恵器（図27・48～50）

4点出土されているが全体のわかるものはない。底部は平底で、切り離しは回転糸切りである。

2) 分布

出土した土器は出土状態位置からある程度まとまりを指摘できる。

西側ライン付近一壺ⅠA類1・2、ⅡB、鉢Ⅰ類、坏・皿

南側裾れ況斜面一壺Ⅲ類、鉢Ⅱ類

平坦部東側一壺ⅠA類2、ⅠB類、ⅡA類

g ラインより東側一壺Ⅳ類

3) 土器の時期

土器を分類と分布によって整理すると、次の4つの時期に分けることができる。

- I 「壺」長胴形のものと同張りのものがある。長胴形のは、口縁部が外反し、肩部以上に2～4条の段・沈線をもつ。器面調整はハケメである。同張りのものは無文で、器面調整はハケメ後にヘラミガキされる。
「鉢」口縁部がゆるく外反し、肩部に段をもつ。器面調整はハケメである。
「坏・皿」内黒のもので体部に段・沈線をもつ。器面調整はヘラミガキが施される。
- Ⅱ 「壺」口縁部が外反し、肩部以上に5条以上の段・沈線をもつ。器面調整はハケメとヘラミガキを併用するものとヘラミガキのみのものがある。
- Ⅲ 「壺」口縁部が外反し、口縁部や肩部に短刻文をもつ。器面調整はハケメとヘラミガキがある。
- Ⅳ 「壺」口縁部・肩部に貼瘤貼付帯をもち、頸部から肩部にかけて斜沈線が施される。器面調整はヘラミガキである。

「鉢」口縁部・底部に短刻文がつき、その間に矢羽根状沈線が施される。

土器は遺構覆土の火山灰・遺物の共存関係などから時期を推定できる例がある。千歳市末広遺跡では、土器のもつ特徴から坏を「ロクロ未使用のもの」と「ロクロ使用のもの」に大別されている。さらに「ロクロ使用のもの」は苫小牧火山灰の上下で細分されている。「ロクロ未使用のもの」が「ロクロ使用のもの」に先行することは遺構の重複関係で確認されており、さらには東北の編年や最近の研究などで明らかである。

本遺跡の土器を末広遺跡の編年と対比すると以下ようになる。Ⅰの時期は内黒・丸底の坏から末広遺跡のⅠ類b型に対比でき、その年代は8世紀後半に編年されている。Ⅱの時期は末広遺跡のⅡ類a型に対比できよう。ロクロ使用の土師器の坏が出土する時期で、最近の例では北大橋内サクシュコニ川遺跡第2文化層のものがある。9世紀初頭に編年されている。Ⅲの時期はⅡ類b₁型に対比でき年代は10世紀前半になろう。なお須恵器は10世紀から11世紀頃のものと思われる。Ⅳの時期は末広遺跡の編年では不明であるが最近調査された青森県蓬田大館遺跡の報告では、ほぼ11世紀中葉に位置付けられている。以上他遺跡との対比でおおよその年代を推定したが、本遺跡の時期幅が大きいことから多少のずれはある。

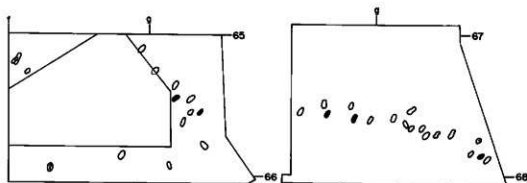
従来、徳文時代の開始はほぼ8世紀代とされてきたが、近年の新資料の蓄積によって7世紀

代まで溯ることとなった。本州東北部では内黒坪・刷毛目調整等の墓・少量の真間式土器との
 共存関係から従来「桜井第Ⅰ形式」とされてきた資料の再検討がなされている（小井川和夫・
 小川淳一、1982）。ほぼ同じころ道内出土の須恵器・ガラス小玉・土師器と北大式土器との関
 係から弥文時代の開始を7世紀後葉とする論考（大沼忠春、1984）がある。また最近では本州
 東北部の土師器と北大式土器との共存関係から弥文時代の開始を7世紀後半とする論考（横山
 英介、1988）、7世紀前葉とする考え（大沼忠春、1988）がある。5・6世紀の土器の様相も
 しだいにあきらかになりつつある現在、弥文時代の開始を7世紀代とするのは妥当と思われる。
 したがって本遺跡のⅠの時期は1世紀程度溯るものと考えたい。

(2) 覆土に En-a ロームがみられる T ビットについて

今年度の調査において、前項で述べたように38基の T ビットが検出された。これらのうち、
 恵庭のロームおよびバミスからなる黄褐色土が被覆していた T ビット（T-8・9・20・
 31・33）5基が検出された（図Ⅰ-62）。これらの分布は、次の通りである。T-8・9の2
 基が、h-65区の小沢北側に、T-20・31・33の3基が、h-67・g-67区の台地縁辺部の
 位置している。形状は、いずれも底面に杭穴を伴わない溝状で、横断面形は土層断面から本来
 は U 字型を呈していたものと思われる。長軸の向きは、いずれも南北方向で等高線に対して
 直交している。これらの T ビットは、分布・形状・長軸方向等を見ても、他のビットと変わ
 らない。

これらの T ビットは、崩落・流込み等によって埋没し、Ⅱ黒層が堆積してゆく過程に出来
 る凹みに恵庭 a ロームがみられるものである。このロームは、周辺の T ビットを構築する際
 にその掘り上げ土を、先に放棄された T ビットの凹みに廃棄したものを思われる。これらの
 うちで、T-8の調査時にそのビット周辺部で掘り上げ土が確認されたが、他の4基につい
 ては凹みの中だけで周辺からは確認されなかった。しかし、この4基についても、T-8と
 同様に掘り上げ土の廃棄によるものと思われる。



図Ⅰ-62 T ビット

なお、今年度の調査で検出された5基の他にも、昭和60年度に調査された美々2遺跡で検出されたT-2、同美々8遺跡で検出されたT-1・11も同じタイプのものと思われる。

(立川トマス)

付 表土層の調査

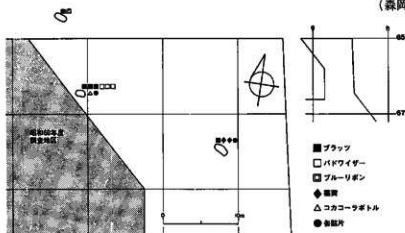
表土層の調査は、昭和56年度（北埋調査 7）と60年度（同 24）にその成果が報告された。昭和56年度の調査では、「ユウフツ越」または、北海道開拓使によって開削された旧室蘭街道に関するものと考えられる竪穴状遺構と、それに伴って古銭、洋式ナイフ、和式のこぎり鉄、ガラス玉、布製バッグとその金具等が発掘された。

また、60年度には、アメリカ軍が残したと考えられる方形の土壇から、ビール缶、缶詰の空缶などが出土している。

本年度の調査では、60年度と同様、アメリカ軍に関係した遺構、遺物が出土した。方形の土壇は、調査区北側の斜面に3個あり、60年度調査区の東側にあたる（図I-63）。I層上面での規模は、長軸1.4～1.8m、短軸0.6～0.9m、深さ0.5～0.8mで、3個ともほぼ同じ大きさである。土壇の中からは、ビール缶9個、コカコーラボトル1本、葉巻2本、缶詰片多数が出土した。また、T-a、b層除去作業中にも、葉巻6本と「US」と刻印されたスプーン1本が検出されている。ビール缶の銘柄と内訳は、ブラッツ5個、パドワイザー3個、ブルーリボン1個で、いずれもアメリカ製である。デザインは、缶が腐食して読み取れないものもあるが、ほぼ前回出土したものと同じで、ブルーリボンが昭和25年（1950）、パドワイザーが昭和27年（1952）、ブラッツが昭和28年（1953）の缶である。また、上蓋は三角形の穴が2ヵ所に開いているものが7個、方形の穴と縁に沿った弧状の穴がそれぞれ1個である。

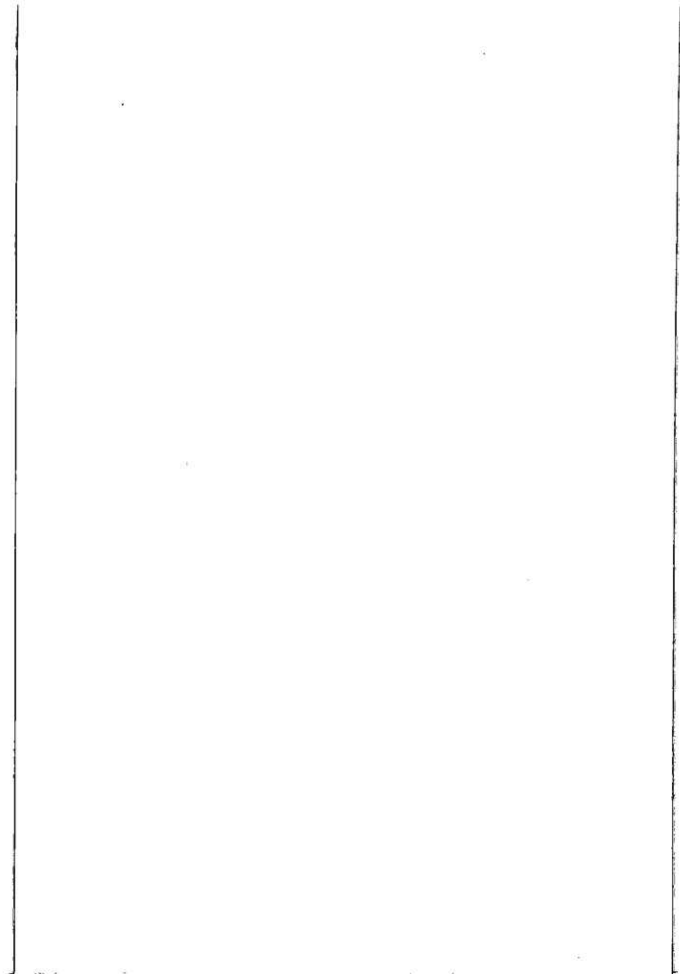
以上、これらの遺構・遺物は、「増補千歳市史」によれば、昭和20年8月15日の終戦を機にアメリカ軍が朝鮮戦線に向けて猛演習を行った際に残した物と考えて間違いないさそうである。

(森岡健治)



図I-63 表土層の遺構と遺物分布

写真図版



美々 8 遺跡の調査



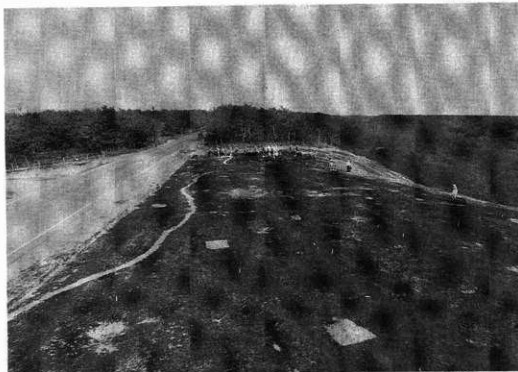
空中写真



①遠景 (S-N)



②南側斜面 (W-E)



①道跡 (W-E)



②道跡 (W-E)



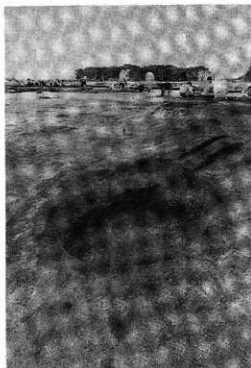
①H-1 (N-S)



②H-1 炭化材出土状況 (NE-SW)



③H-1 礎



①P-1 (S-N)



②P-2 (NW-SE)



③土器片出土状況 (h-67-80・SW-NE)



④集中曝出土状況 (h-67-36・NW-SE)



I 黒層の土器



I 黒層の土器



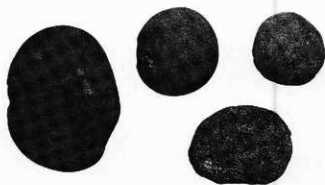
I 黒層の土器



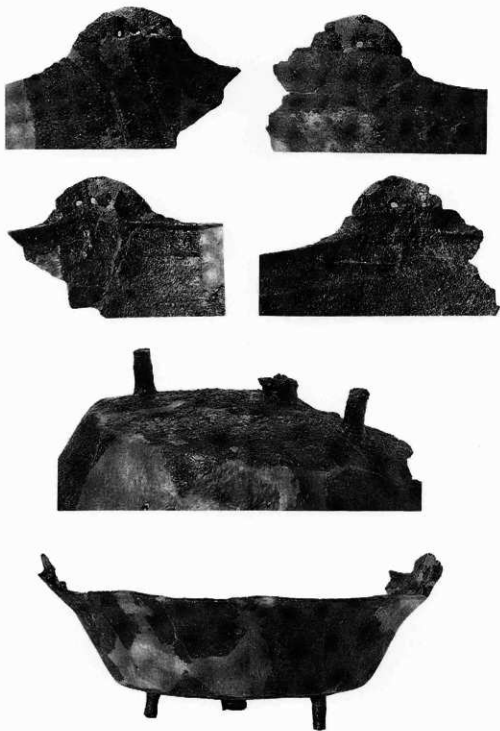
I 黒層の土器



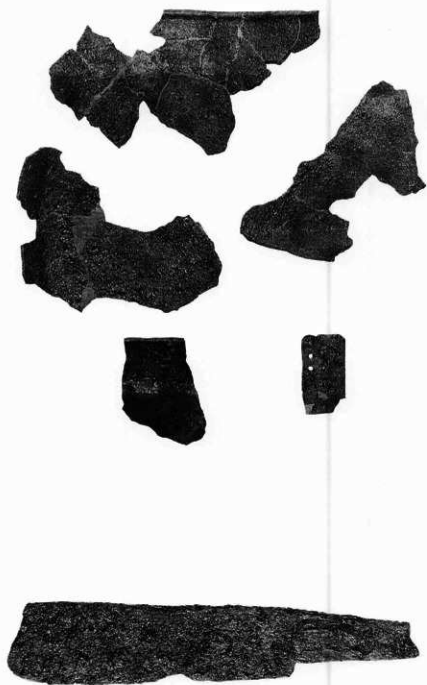
① I 黒層の土器 (V 群C類)



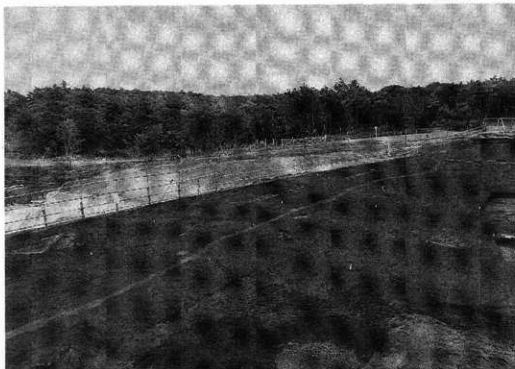
② I 黒層の石器



吊耳斂銅



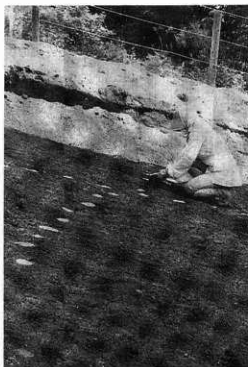
金属製品



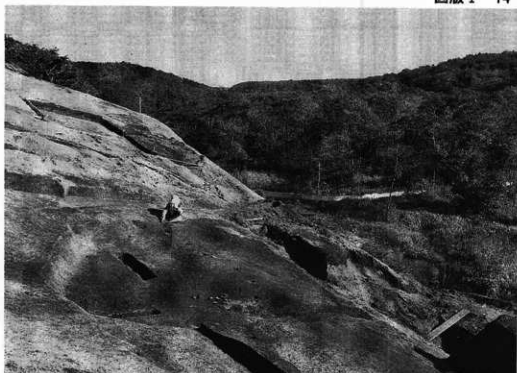
①道跡 (W-E)



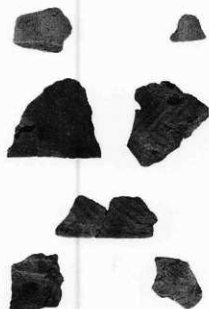
②動物の足跡 (W-E)



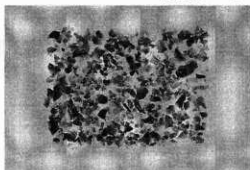
③動物の足跡 (SW-NE)



①H-1 (W-E)



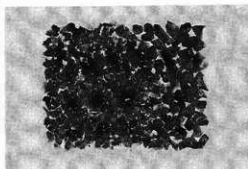
②H-1 の土器



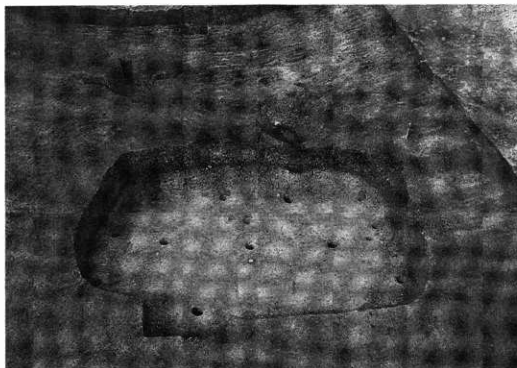
②H-1フレイクチップ集中1



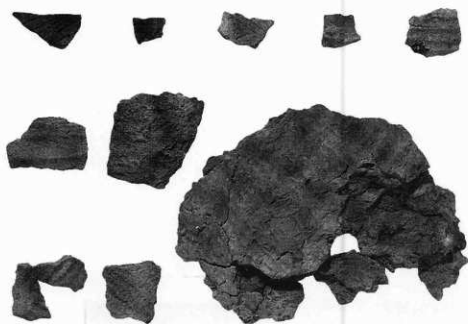
①H-1の石器



③H-1フレイクチップ集中2



④H-2 (S-N)



①H-2の土器



②H-2の剥片石器



③H-2の礫石器



①H-3 (W-E)



②H-3 (E-W)



③H-3 の石製品



④H-3 の遺物



①H-4 (SW-NE)



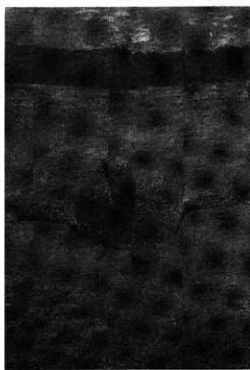
②H-4 の石器



③H-4 の土器



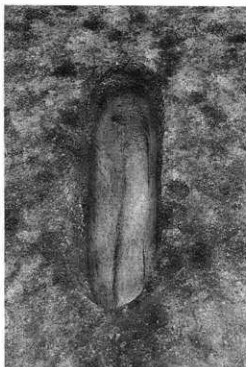
①H-5・6 (NW-SE)



②P-1 (S-N)



③P-1の遺物



①T-1 (N-S)



②T-16 (NW-SE)



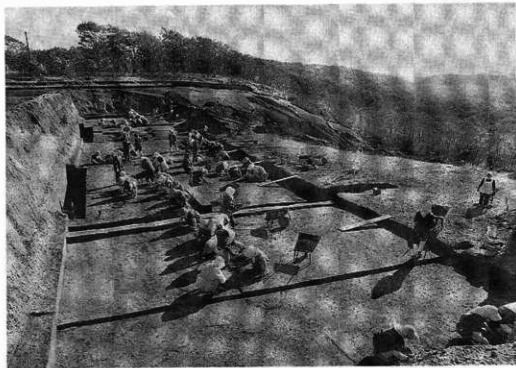
③Tピット列 (W-E)



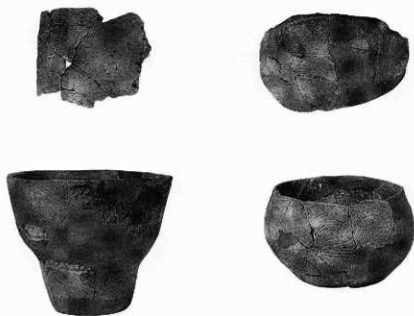
④T-18の土器

⑤上 T-16の
石器
下 T-32の
石器

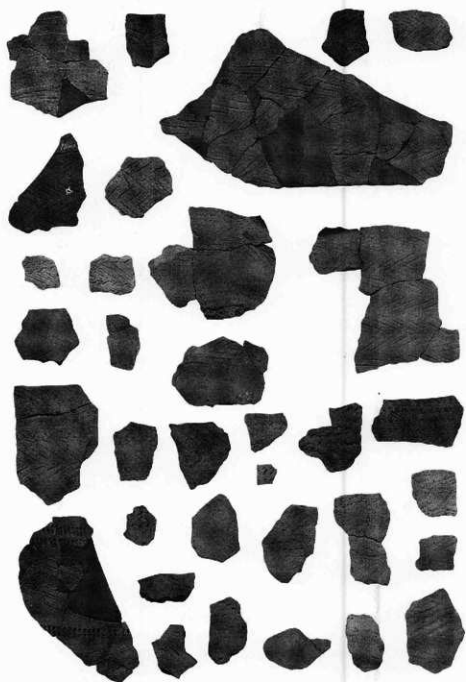




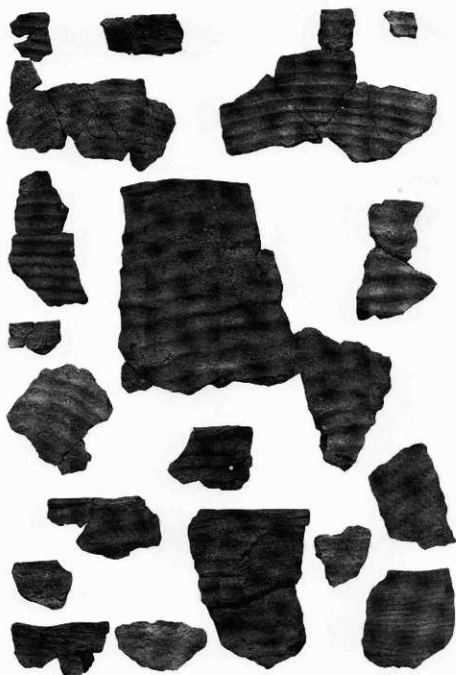
①旧石器確認調査 (W-E)



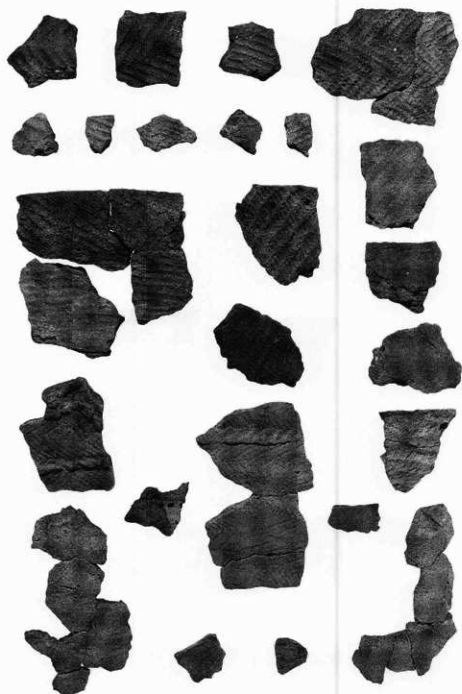
②I 黒層の土器 (Ⅲ群・Ⅱ群)



Ⅱ黒層の土器（Ⅰ群b類）



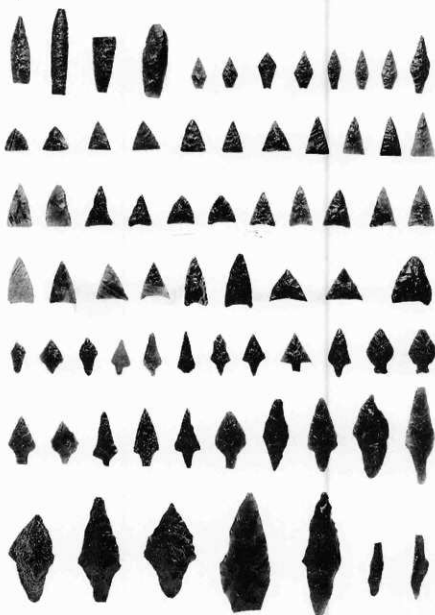
Ⅱ黒層の土器（I群a類）



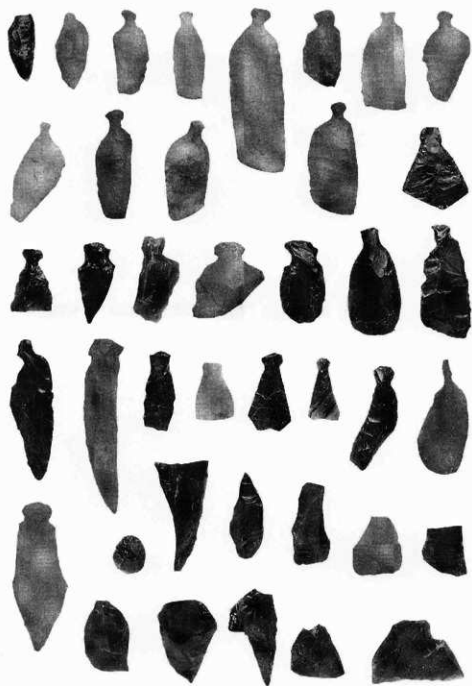
Ⅱ黒層の土器（Ⅱ群a・b類、Ⅳ群a類）



Ⅱ黒層の土器 (Ⅱ群b・c類、Ⅴ群C類)



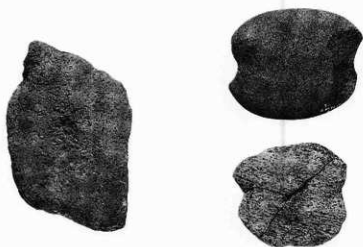
Ⅱ 黒磨の石器 (A・B・C類)



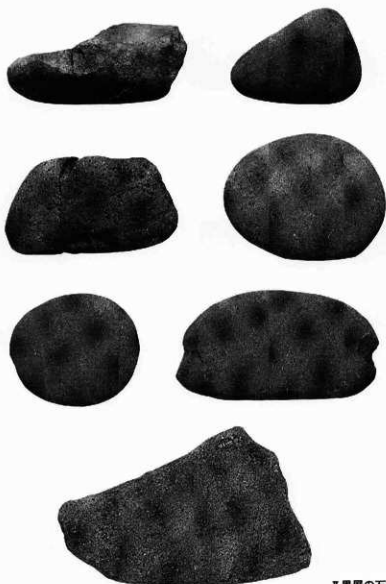
I 黒層の石器 (D・E類)



①Ⅱ黒層の石器（F類）



②Ⅱ黒層の石器（G・N類）



Ⅱ 黒層の石器 (J・M類)

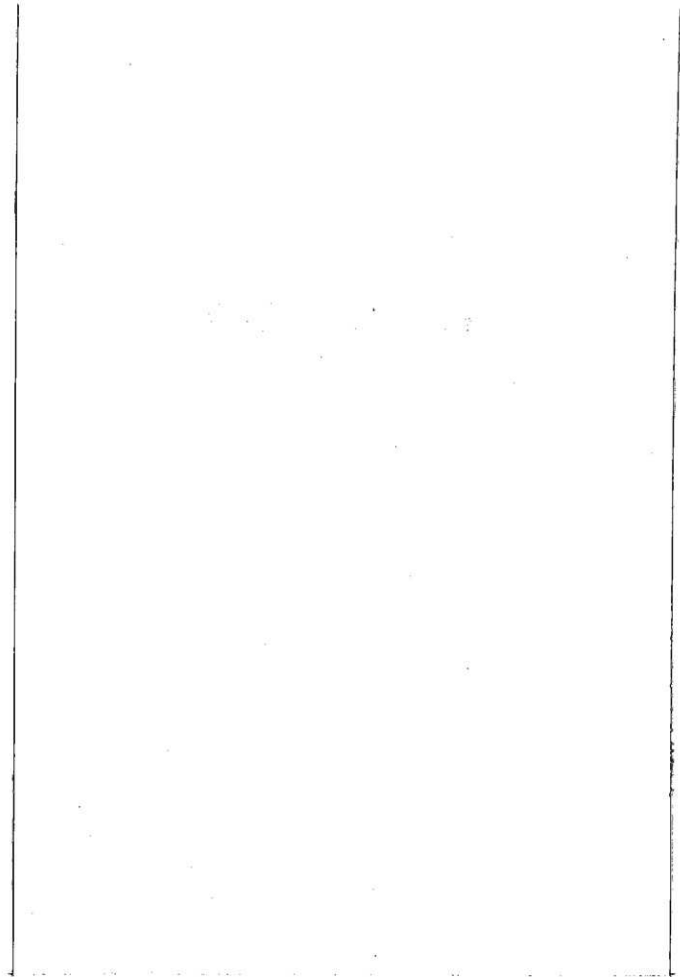


Ⅱ 黒層の石製品



表土層の遺物

Ⅱ 美沢13遺跡の調査



II 美沢13遺跡の調査

1. 概要

美沢13遺跡は、美沢川とそれに直交する右岸の支谷とに挟まれる舌状の台地縁から、美沢川の流れる谷にかけての広がりをもつ。美沢川流域の遺跡群のなかでは、最も湧水点に近い。昭和59・60年度調査の美々2遺跡（北埋調報 24）は、本遺跡の東寄りの対岸に位置している。

発掘調査は、付替道路工事にかかる2,185㎡について、II黒層を主な対象に実施した。美沢川の流れる低地部分は、湧水のために作業効率が極めて悪く、安全上の問題もあったため重機によるトレンチ調査に切り換えて実施した。トレンチは、II黒層の調査と同時に河道の断面をみるために両岸にまたがって掘削した。

調査の結果、Tピット4個と土器・石器が計5点検出された。

Tピットは、台地の縁辺に1個、美沢川沿いの標高11～12m付近に3個が検出された。台地の縁辺に位置するものが小型の楕円形を呈するほかは、すべて長楕円形のもので考えられる。

土器は、縄文時代晩期末葉のものが2点出土した。石器は、縄文時代早期の石鏃・中期の石槍・剥片の計3点が出土した。出土状況は、石鏃を除いてすべて低地部分に設けたトレンチから出土しているため明確ではない。これらの遺物については、台地上からの流れ込みの可能性もある。

猶、調査区周辺の表土層には、炭窯2ヵ所と土取場と思われる凹地3ヵ所が分布している。低地部分に設けたトレンチの表土からは、炭窯と関連すると考えられる陶磁器片やビール瓶等が出土している。

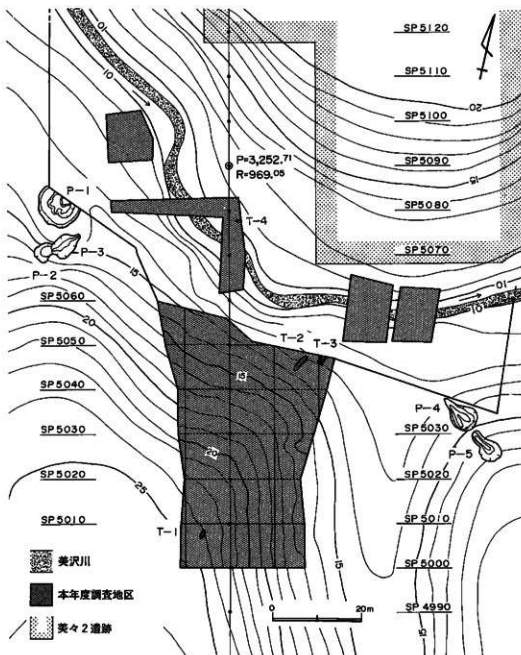
トレンチは、付替道路センターラインに沿って、台地部分から美沢川の流れる低地部分にかけて設置した。台地上の各層厚は、傾斜部分や低地部分と比較して薄い。特にIII黒層は、SP 5000～SP 5035の間でほとんど認められず、斜面下方に流れ落ちている。SP 5040～5050では、マス・ウェスティング（Mass・Wasting）と考えられる土層の逆転が、III黒層・En-aローム層・En-aバミス層にわたって確認された。

低地部分のトレンチ断面からは、旧美沢川河道の痕跡が3ヵ所確認された。これらは、各の切り合いや、堆積物等から、旧河道の変遷の復元や時代推定が可能であった。

（皆川洋一）

表II-1 遺構・遺物一覧

	名 称	II 黒 層	そ の 他
遺 構	Tピット	4	0
遺 物	土 器	2	0
	石 器	3	0



図Ⅱ-1 遺構位置図

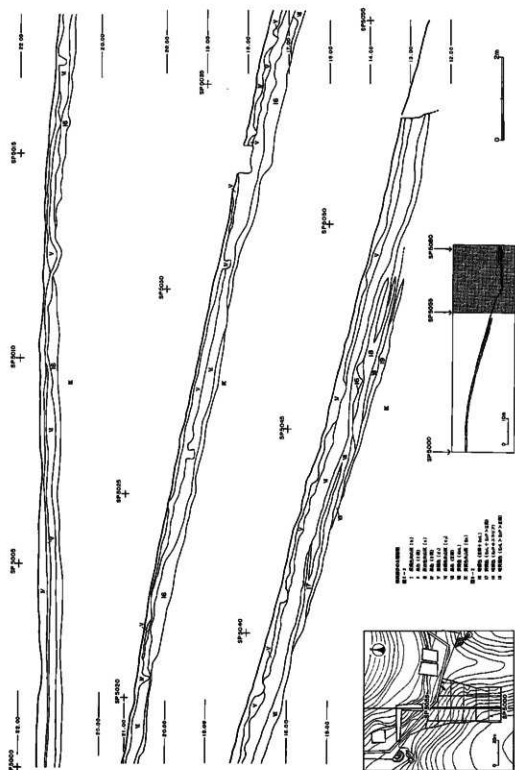
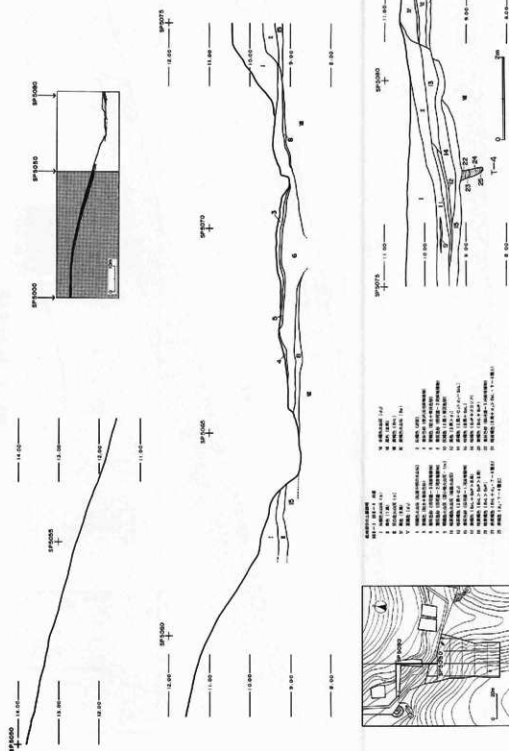


図1-2 傾斜部分の土層



図Ⅱ-3 底部部分の土層(1)

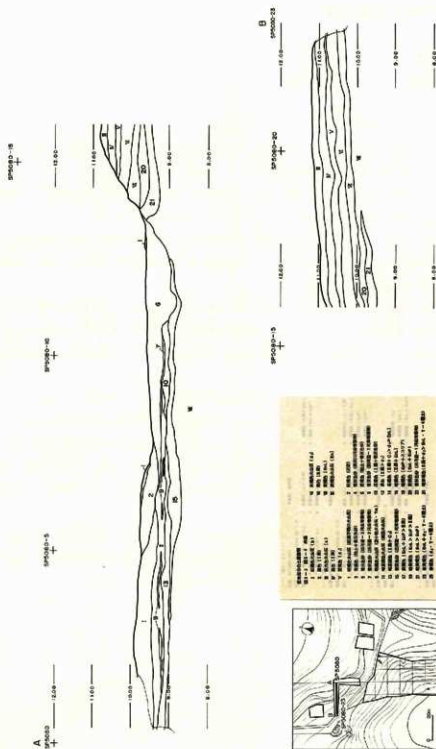


図 1-4 佐持部分の土層

2. Ⅱ 黒層の遺構と遺物

(1) 遺構

調査の結果、4個のTピットが検出された。

Tピット (図Ⅱ-5 T-1・2・3、図Ⅱ-3 T-4)

検出された4個(T-1~4)のうち、台地の縁辺に位置するT-1以外は、美沢川沿いの標高10~12m付近に位置している。遺物は、いずれからも出土していない。

T-1は、標高24mの等高線に直交する。平面形は、小型の楕円形、横断面はU字型を呈している。溝状のタイプで杭穴は認められなかった。長幅比は、3.8である。

T-2は、4個のTピットのなかで最も大形のものである。平面形は、長楕円を呈し、横断面は、U字型である。溝状のタイプで、溝底が斜面に沿って傾斜している。杭穴は認められなかった。長幅比は11.1である。

T-3は、仮排水管の埋設工事のために半切された状態であった。残存する部分から推定して、平面形は長楕円で、溝状のタイプと考えられる。横断面は、U字型である。杭穴は、認められなかったが、土層中には杭の痕跡と考えられるしまりのない褐色土層(8層)が認められる。

T-4は、低地部分に設けられたトレンチの壁から検出された。上半分は、旧美沢川によって流されており、下半分約50cmの検出であった。美沢川左岸の標高10~11m付近に位置していたものと推定される。T-4の上層には、Ta-cの軽石を含む水性堆積物をはさんで、プライマリー(primary)なⅡ黒層が認められる。そのことからT-4は、Ⅱ黒層形成以前に構築されたものと考えられる。これは、美々2遺跡で検出されたTピットの年代である縄文時代晩期末以前と矛盾しない。

本調査において、美沢川沿いで検出されたTピットは、標高10~12mに位置すること、等高線に直交することなどの点で、近隣の美々2遺跡のTピット群と類似点が多いことから、近い年代に構築されたか、それらの配列の一部である可能性も考えられる。

(皆川洋一)

表Ⅱ-2 Tピット一覧

名称	平面形	分類	規模 (m)			長幅比	杭穴の有無	位置
			確認面	底面	最大深			
T-1	楕円形	C ₁	1.77×0.88	1.43×0.38	1.33	3.8	×	SP5000~5010
T-2	長楕円形	B	4.13×1.02	3.55×0.32	1.33	11.1	×	SP5040~5050
T-3	長楕円形	B	(2.26)×(0.90)	(2.32)×0.43	1.40	5.4以上	△	SP5040~5050
T-4	—	—	—	—×0.14	—	—	—	SP5070~5080

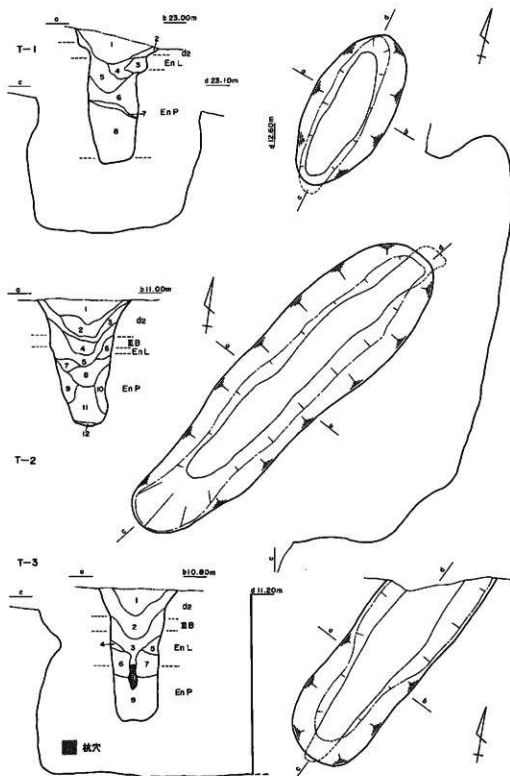


図 II-5 T-1・2・3

T-1 (図Ⅱ-5 T-1)

位置 SP 5000~5010

平面形 楕円形

規模 $1.74 \times 0.88 / 1.42 \times 0.38 / 1.39$

- | | |
|---------------------------------|-----------------------|
| 覆土 1 黒色 (Ⅱ黒 $\gg d_1 \gg d_2$) | 2 赤褐色 ($d_2 \gg$ Ⅱ黒) |
| 3 黒褐色 (Ⅱ黒 + EnL) | 4 明褐色 (EnL) |
| 5 赤褐色 ($d_2 \gg$ Ⅱ黒) | 6 褐色 (EnL + EnP) |
| 7 暗茶褐色 (Ⅱ黒 + d_2) | 8 黄褐色 (EnP) |

T-2 (図Ⅱ-5 T-2)

位置 SP 5040~5050

平面形 長楕円形

規模 $4.12 \times 0.52 / 3.54 \times 0.33 / 1.34$

- | | |
|-------------------------------|---------------------------------|
| 覆土 1 黒色 (Ⅱ黒 $\gg d_2$) | 2 褐色 (d_1) |
| 3 明赤褐色 ($d_2 >$ Ⅱ黒) | 4 褐色 ($d_1 \gg$ Ⅱ黒 $\gg d_2$) |
| 5 赤褐色 (d_2) | 6 暗褐色 (Ⅲ黒 $>$ EnL) |
| 7 暗褐色 (Ⅲ黒 $>$ EnL) | 8 暗赤褐色 ($d_2 \gg$ Ⅱ黒) |
| 9 黄褐色 (EnP) | 10 黄褐色 (EnP) |
| 11 明黒褐色 ($d_2 >$ Ⅱ黒 $>$ EnP) | 12 黄褐色 (EnP) |

T-3 (図Ⅱ-5 T-3)

位置 SP 5040~5050

平面形 長楕円形 (推定)

規模 $(2.26) \times 0.90 / (2.38) \times 0.54 / 1.41$

- | | |
|-------------------------|-------------------------------|
| 覆土 1 黒色 (Ⅱ黒 $\gg d_2$) | 2 暗褐色 (d_1) |
| 3 暗赤褐色 (d_2) | 4 黒褐色 (Ⅲ黒) |
| 5 黒褐色 (Ⅲ黒) | 6 黄褐色 (EnL) |
| 7 黄褐色 (EnL) | 8 褐色 (Ⅲ黒 + EnL + EnP 杭跡の可能性有) |
| 9 明褐色 (EnL + EnP) | |

T-4 (図Ⅱ-3 T-4)

位置 SP 5070~5080

平面形 不明

規模 $-X-/-X0.14/-$

- | | |
|---------------------------|----------------------------|
| 覆土 23 赤黄褐色 (EnL + d_2) | 24 暗赤褐色 (Ⅱ黒 + $d_2 >$ EnL) |
| 25 赤褐色 (d_2) | |

(2) 遺物 (図Ⅱ-6)

土器は、低地部分に設けられたトレンチから2点出土した。ともに縄文時代末期のものである。

1は、深鉢の口縁直下の破片である。文様は、上端の沈線の下方に原体の縄文が施文されている。色調は、表面が淡赤褐色、内面が暗褐色である。胎土には、 1mm 程の砂が点在する。

2は、深鉢の胴下半分の破片である。文様は、RLの原体の縄文が施文されている。色調は、表面が明赤褐色・内面が黒褐色である。内面には、微量な炭化物の付着が認められる。焼成は良好である。

これらの土器は、同じ時代のものが多量に出土している美々2遺跡からの流れ込みの可能性が考えられる。

石器は、石鏃、石槍、剥片が各1点検出された。すべて黒曜石製である。

4の石鏃は、傾斜部分の中腹付近から出土した。先端部は、破損欠失している。形態からみて、縄文時代早期のものと考えられる。

3の石槍は、低地部分に設けられたトレンチから出土した。形態からみて、縄文時代中期のものと考えられる。

5の剥片も、トレンチからの出土である。時期は不明である。

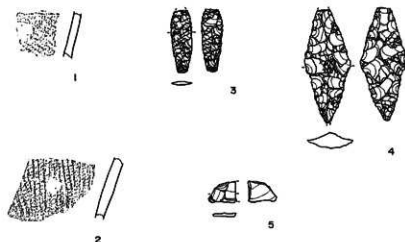
(皆川洋一)

表Ⅱ-3 土器一覧

図番号	分類	部位	出土位置
1	Vc	胴	SP5060~5090
2	Vc	胴	SP5060~5090

表Ⅱ-4 石器一覧

図番号	名称	分類	大きさ(cm)	重さ(g)	材質	出土位置
3	石 鏃	A 2	3.3×1.1×0.2	1.0	Obs	SP5020~5030
4	石 槍	B 2	5.9×2.4×0.8	7.7	Obs	SP5060~5090
5	剥 片	O 1	1.5×1.1×0.2	0.4	Obs	SP5060~5090



図Ⅱ-6 遺物

3. 表土の遺構と遺物

美沢13遺跡の周囲の地表面からは、数ヶ所の凹地が確認されている（図Ⅱ-7）。これらは、川沿いの沢口付近に立地することや、煙筒用の土管や焼けた石材などが地表に露出していることから、美々2遺跡の表土にも検出された炭窯及土取場と判断し、若干の調査を実施した。

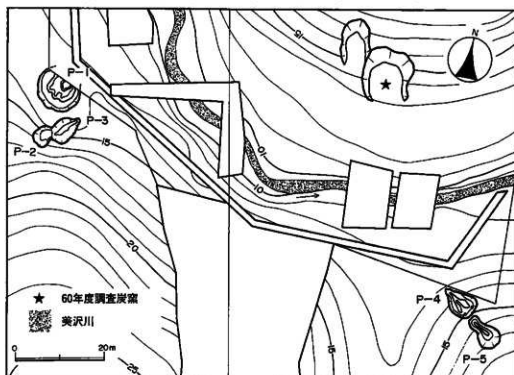
凹地は総計5ヶ所（P-1～5）認められ、P-1・4は煙道等が地表からも確認できることから炭窯、P-2・3・5は煙道や煙筒用の土管がみられない、横幅が狭い、各炭窯に隣接していることなどから土取場と各々判断した。

P-1は、発掘に先立って、仮排水の埋設工事を行った際重機によって半切されたものである。残存部分は半円形を呈しており、煙道の末端部分が3ヶ所確認された。P-2・3は、P-1に隣接し、連結した凹地を呈している。P-1の築窯に際して、土取場として利用されたものと思われる（図Ⅱ-8）。

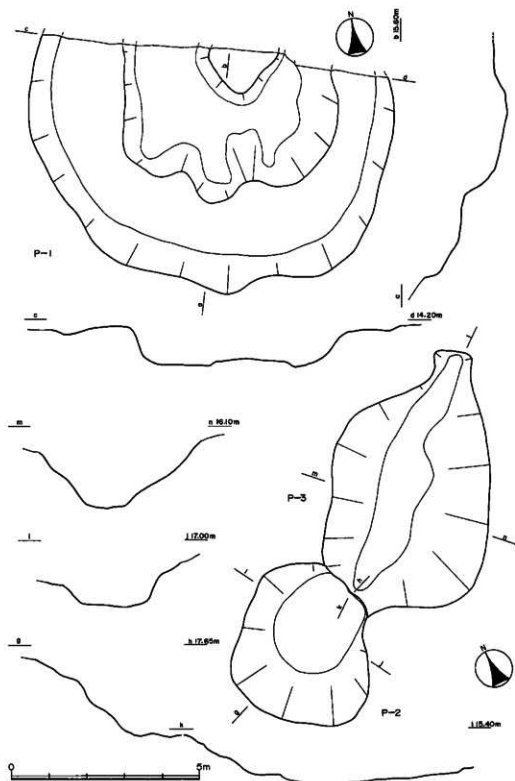
P-4は、壁が馬蹄形にめぐっており、楚き口から二又に分かれる煙道と、その各先端に煙筒用の土管が配置された炭窯である。規模は、P-1や美々2遺跡で報告されたものよりも一回り小型である。P-5は、その土取場と考えられる（図Ⅱ-9）。

図（図Ⅱ-8・9）は、いずれも表土面でのものである。P-1～3については、地表からの壁みの状態を図示した。

又、これら炭窯からの搬出入に利用したと思われる道跡も確認されている。



図Ⅱ-7 表土の遺構



図Ⅱ-8 P-1・2・3

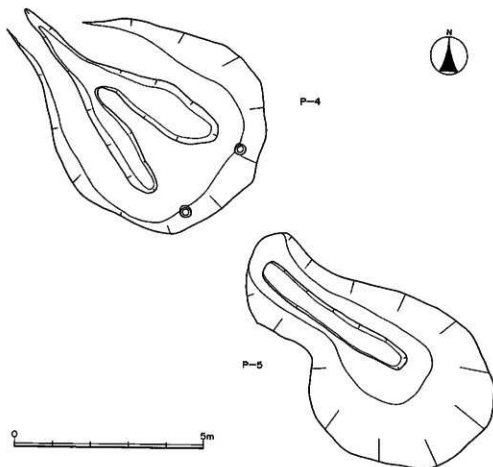
美沢川の流れる低地部分に設けたトレンチの表土からは、茶碗などの陶磁器類・ガラス製品・加工痕を有する木材・木炭片等が出土している。陶磁器類は、明治後半昭和初期のものである。ガラス製品のうち、ビール瓶には美々2遺跡の炭窯内から出土したものと同一「大日本ビール」の標示がみられる。そのことから、ビール瓶は「過度経済力集中排除法」によって大日本麦酒社の分割された昭和24年以前のものと考えられ、同時に出土した各遺物についても同様の時代が考えられる。これらは、明治後半から昭和初期に美沢川流域で炭窯操業を行っていた人々の残留物であると思われる。

註 九州陶磁博物館大橋康二氏の御教示による。

(皆川洋一)

表Ⅱ-5 低地部分出土遺物一覧

名 称	数量(点)	内 容
陶 磁 器	64	小皿(4)、飯茶碗(4)、茶碗(4)、急須(2)、摺鉢(1)、徳利(1)
ガラス製品	70	ガラス瓶:「大日本ビール」(5)・「キリンビール」(1)・「合同酒類」(3) 「日本製薬・清漆神液」(1)・不明(0)、その他ガラス片
金 属 製 品	4	罐(1)、罐(1)、金属片(2)
そ の 他		礫石(1)、加工痕を有する木材(多数)、炭片(多数)、その他



図Ⅱ-9 P-4・5

4. 美沢川の河道変遷について

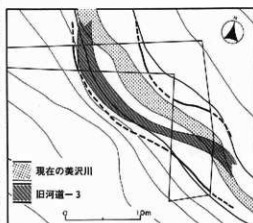
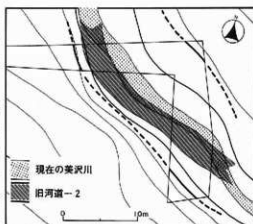
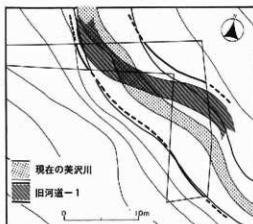
美沢川の流れる低地部分に設けたトレンチからは、Tピット（T-4）1個・遺物4点が検出された。トレンチの断面には、旧美沢川河道の変遷が、T-4構築以降現在までに3回認められた（以下、土層番号は図Ⅱ-3）。

美沢川河道の変遷は、過去に確認の例がなく、今回が初めての確認である。

河川流域の遺跡における旧河道の復元は、当時の生活環境を知るうえで、重要だと考えられる。ここでは、トレンチの断面（図Ⅱ-3）で確認された3つの旧河道跡を古い順に旧河道1・2・3として、旧美沢川の復元を試みる。

旧河道1は、トレンチ断面で最も古い河道である（図Ⅱ-10・旧河道1）。現在の河床と同様にEn-aローム層を河床としている。本河道の河床堆積物（17層）は、Ta-c火山灰を均質に含む二次堆積の腐植土層（16層）に直接覆われる。更に、その直上には、プライマリー（primary）なI黒層（10層）が認められる。このことから、本河道の時代は、En-aローム層形成以降I黒層形成以前に位置すると考えられる。又、縄文時代晩期末以前に構築されたと考えられるTピット（図Ⅱ-3 T-4）の上半部を切っていることから、旧河道1の時代は、T-4構築以降I黒層形成以前に限定できる。

旧河道2は、旧河道1よりも低地部分の右岸寄りに位置している（図Ⅱ-10、旧河道2）。旧河道1の河床堆積物を覆うプライマリー（primary）なI黒層（10層）を切っている。I黒層（10層）内には、レンズ



図Ⅱ-10 旧美沢川復元図

状に堆積した「白頭山—苦小牧火山灰」(町田他、1981) (以下T_mと表示する) (9層)が認められる。又、直上の河床堆積物(7層)には、Ta—b火山灰が含まれていない。このことから、旧河道—2の時代は、T_m降下後のI黒層形成以降Ta—b火山灰降下の1667年(寛文7年)(曾屋他、1980)前と考えられる。

旧河道—3は、低地部分の中央より位置を変化させている(図Ⅱ—10、旧河道—3)。Ta—b層(6層)を切って、旧河道—2の河床堆積物(7層)の直上に位置している。このことから旧河道—3の時代は、1667年(寛文7年)(曾屋他、1980)のTa—b火山灰降下直中及び降下後現在に位置すると考えられる。

このように、美沢川は、時代によってその流路を様々に変化させてきた。そのためにT—4(図Ⅱ—3)は、上半部を切られて検出されている。それらの変化は、美沢川流域の地形や生活環境にも少なからず影響を与えたものと考えられる。

(皆川洋一)

5. まとめ

美沢13遺跡の調査区は、舌状の台地縁から美沢川の流れる低地部分にかけて立地しており、そのほとんどは、急斜面と谷によって占められている。調査の結果、4個のTピットと5点の遺物が出土した。

舌状の台地上には、腐植土がほとんど認められず台地縁でT—1が検出されている。

谷へ向かう斜面では、早期のものと思われる石鏃が単独で出土している。付近では、範囲確認調査時にも石斧片が出土している。遺構は、検出されなかった。

斜面下部には、傾斜の緩やかな部分が認められた。美沢川の屈曲部分にあたるため、僅かな面積ではあるが、過去の調査結果から、今回の調査区内で最も遺構・遺物の発見が期待された部位であった。その結果、遺構はTピットが2個検出されたが、遺物は認められなかった。

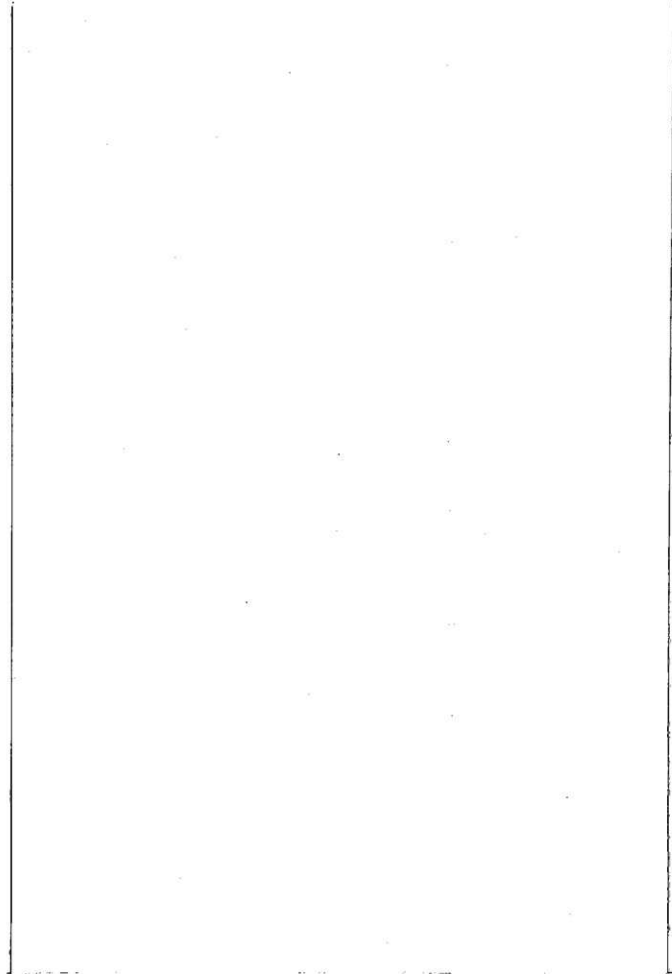
遺物は、低地部分に設けられたトレンチから出土している。縄文時代末葉の土器片が2点、縄文時代中期と考えられる石鏃が1点出土している。

美沢川を挟んだ対岸の美々2遺跡では、縄文時代晩期末葉の遺構・遺物が多数出土している。しかし、本遺跡では、Tピットと僅かな遺物が出土するにすぎない。このことは、本遺跡が美々2遺跡のような“生活の拠点”とは、明らかに異った空間であった事を示している。これは小林氏の6つのセトルメント・パターン(小林、1973)にあてはめるならば、F型に相当するものであるが、このような区域の発掘調査例が乏しく、この空間の意味するところについては、不明点が多い。

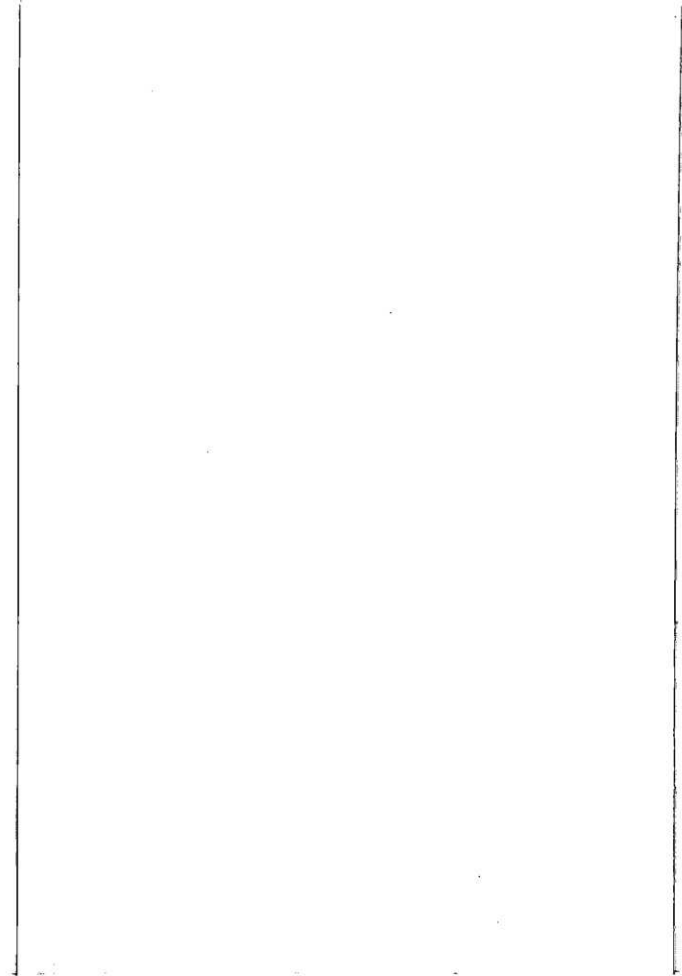
(皆川洋一)

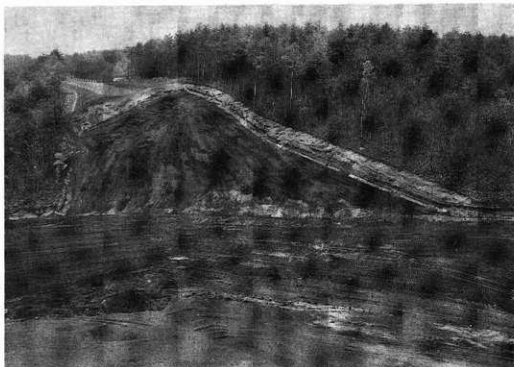
引用・参考文献

- 大谷敏三・田村俊之 1982 「末広遺跡における考古学的調査」『千歳市文化財調査報告書Ⅲ』千歳市教育委員会
- 大沼忠春・和泉田毅 1984 「池田町出土の須恵器について」『北海道考古学会だより』19号
- 大沼忠春 1988 「環海の大地北海道」『図説検証 原像日本』3 旺文社
- 横山英介 1984 「北海道におけるロクロ使用以前の土師器 ―縄文時代前期の設定―」『考古学雑誌』第70巻第1号
- 横山英介 1988 「縄文時代の開始年代修正について」印刷中
- 1982 「御駒堂遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅵ』宮城県教育委員会
- 1987 「宮崎遺跡」西目町教育委員会・秋田市遺跡保存会
- 櫻井清彦・菊地徹夫編 1987 「葦田大館遺跡」『早稲田大学文学部考古学研究報告』六興出版
- 宇田川 洋 1972 「縄文集落の一分析例」『物質文化』19
- 小林達雄 1973 「多摩ニュータウンの先住者―主として縄文時代のセトルメント・システムについて―」『月刊文化財』112号
- 曾屋龍典・佐藤博之 1980 「千歳地域の地質」『地域地質研究報告』地質調査所
- 高橋稀一・越田賢一郎 1984 「美沢川流域の遺跡群―遺物分布と遺構分布の関係からみて―」『北海道の研究』第一巻考古篇Ⅰ 清文堂
- 町田 洋・新井朋夫・森脇 広 1981 「日本海を渡ってきたテフラ」『科学』Vol. 51 No. 9
- 横山 泉・勝井義雄・大場与志男・江原幸雄 1973 有珠山―火山地質・噴火史・活動の現況および防災対策 北海道防災会議 札幌
255 pp
- 1981 美沢川流域の遺跡群Ⅴ 財団法人北海道埋蔵文化財センター
- 1982 美沢川流域の遺跡群Ⅵ 財団法人北海道埋蔵文化財センター
- 1984・1985 美沢川流域の遺跡群Ⅶ 財団法人北海道埋蔵文化財センター



写真図版

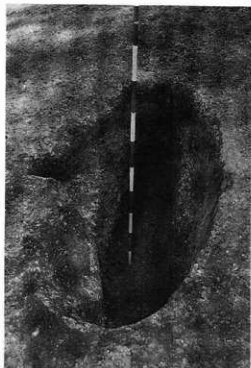




①重機によるTa-c除去後の全景 (N-S)



②全景 (S-N)



①T-1 (W-S)



②T-1 遠景 (SW-NE)



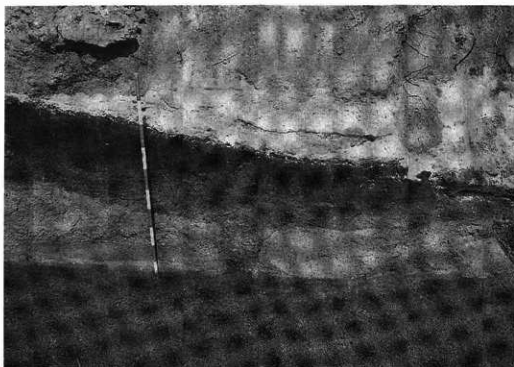
③T-2・3 全景 (N-S)



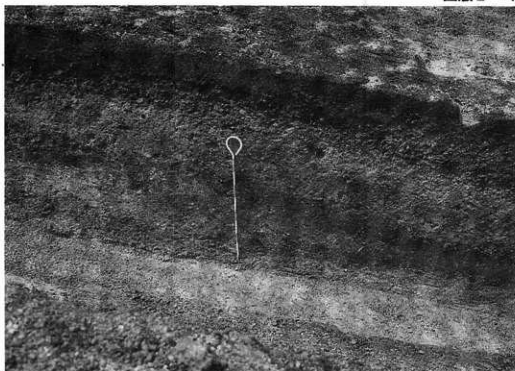
①T-2 (N-S)



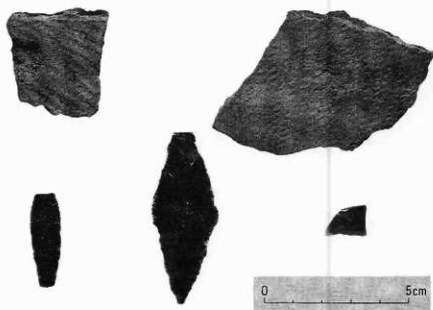
②T-3 調査風景 (N-S)



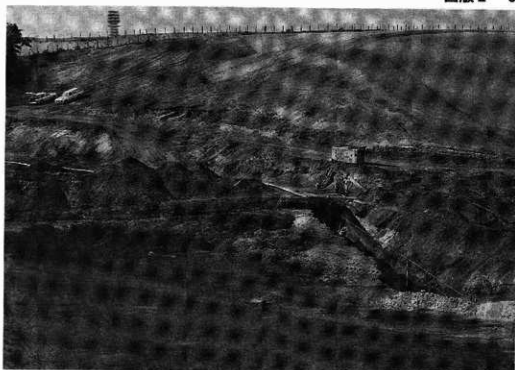
③T-4 (W-E)



①マス・ウェスティングによる土層逆転部分 (E-W)



②Ⅱ黒層の遺物



①低地部分トレンチ全景 (S-N)



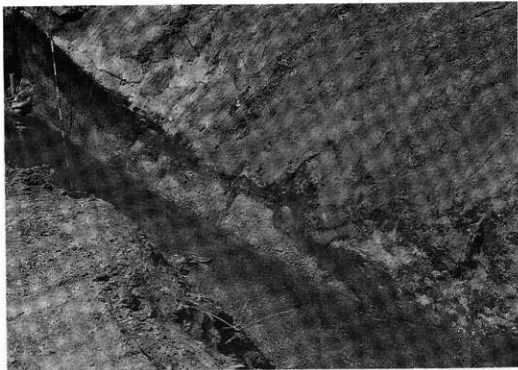
②低地部分トレンチ (NW-SE)



③低地部分調査風景 (NE-SW)



④水付部調査風景 (EW)



①低地部分N-Sトレンチ (SW-NE)



②低地部分E-Wトレンチ (NW-SE)



①陶磁器



②小瓶類



③鉄製品



④瓶類



低地部分出土木材

北海道埋蔵文化財センター調査報告 第44集
新千歳空港用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

第2分冊 美沢川流域の遺跡群Ⅺ

発行日 昭和63年3月26日
発行者 財団法人 北海道埋蔵文化財センター
〒 064 札幌市中央区南26条西11丁目
Tel (011)561-3131
印刷者 富士プリント株式会社
〒 064 札幌市中央区南16条西9丁目
Tel (011)531-4711

これは、北海道開発局札幌開発建設部の承認を得て増刷したものである。

